(中表紙)

学位論文 博士(工学)

核燃料再処理における化学的・電気化学的物質 変換過程、物質分離過程およびそれらのプロセス化

2013 年度

慶應義塾大学大学院理工学研究科

土方 孝敏

(様式乙3)

		主	論	文	要旨
報告番号	Z	第	号	氏名	土方 孝敏
主論文題	1日:			•	
	核燃料	再処理におけ	る化学的・1	電気化学的物	勿質変換過程、物質分離過程
	12 97001 11	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	おトブバテオ	れらのプロー	Þalk
(中安の軍					
(内谷の安)	日) 百二には	始料しかた ウラン	(II) トーッル	トーウ <i>ト (</i> D)	、なが取り再利用することは、燃料浴浴酒
使用消み	ホールが	& キャー 巨平)	(U) こノル	トーワム (FL ーアカチノイ	レ を1米収し円利用りることは、然料員係 ド (MA ネプツーウムたど) む回収して
「日子に内で	に フィル・	こ。よに、以下1 されげ 感音物	の環境自着低	減につたがろ	本研究では このようた核燃料車処理
過程で不可	なた化学的	か・雷気化学的	い物質変換過	程 物質分離	治程を検討するとともに 関係する高温
融体 (LiCl-	-KCl系彩	容融塩、液体カ	ドミウム (Cc	しなど)の最	適輸送法を確立し、連続プロセスの構築
につなげる	ことを目的	的とした。		, - , -	
第1章で	は、本研	究の背景と目的	」として、酸化	物燃料や金属	[燃料の再処理に関わる課題のうち、とく
に物質変換	と分離の這	過程、さらにそ	れらのプロセ	ス化で要求さ	れる事項を整理して述べた。
まず第2	章では、福	高レベル廃液か	ら導かれる M	A酸化物から	MA塩化物への転換を、反応装置の腐食
抑制が期待	できる、」	より 低温で行う	可能性を検討	した。この結果	果、C+Cl₂を用いる従来法に比べ200K
以上低い温」	度域でも、	、実用的な速度	で塩化物転換	が可能な、五	话塩化モリブデン(MoCl5)法を新たに提
案できた。言	また ZrO2	あるいは Nd2C	03を模擬酸化物	物として、Mo	副生物を目的塩化物から揮発分離する可
能性なども	示した。				
第3章で	は、アク	チノイド金属	(AN : U, Pu	および少量の	>MA)種に対する一連の物質変換(酸化
物→塩化物・	→金属) i	過程に随伴する	、希土類金属	(中性子を吸	如する燃料毒)の除去を目的として、塩
化物→金属(2〕還元過ね ≁ てい□□) ~	星における分別 エーズ し 新しい	を検討した。	温化物浴融塩 いま のしし:/	液体 Cd-Li 合金の二相界面における酸
化速元区心・	を利用して	く、布士頬より キス NL OL (A)	も選択的にA	NをCd-Li言	
退兀・加口 迎入する N	栗「FIに刈」 。Cl の早後	9 つ NaUL (AN 駆け小キロテレ	N 温化物のさら を示した	つなる随行物	の影響も検討し、LiCI-KCI 糸俗醜温に
(此八) つ INa	aCIの家宿 け II と	Pu 全庫の同時	を小した。	一道の雪解結	11. 赤羽精制プロセスを検証] た ここ
ではいのや	ってい PuOゥを	出発物質として	LIやPuを	金属として同	和収でき、酸化物のリチウム環元→電解精
製→蒸留精	製の3ス	テップを連続ブ	ロセスとして	成立させた。	
第5章で	は、まず福	高温融体(溶融	a、液体 Cd、	さらに陽極か	らの脱落粉体が混入する溶融塩スラリー)
の輸送に関	する詳細	な検討を行った	。それらの知	見に基づいて	、ガドリニウム金属を使用済金属燃料の
模擬陽極と	し、電解て	で液体 Cd 陰極P	内へ移動させた	このち、Cdを	揮発除去する工学規模(想定実機の約1/8
スケール) (の連続プロ	ロセス装置を設	計・構築した	。さらに、こ	れを最適化条件で運転し、迅速かつ高収
率な金属燃	料再処理の	の可能性を示し	た。		
第6章に	は、本研	究のまとめと今	後の課題を述	べた。	
					以上

SUMMARY OF Ph.D. DISSERTATION

School	Student Identification Number	First name Surname	
Integrated Design Engineering		Takatoshi Hijikata	

Title

Chemical and electrochemical material conversion, material separation, and their consecutive processes for the reprocessing of spent nuclear fuels

Abstract

After reprocessing spent nuclear fuels, recovered U and Pu can be used again as new fuels to save the natural U resources. At the same time, it reduces the long-term radioactivity of high-level wastes to remove the minor actinoids (MA) and to lead their nuclear fission by neutrons. In the present study, various material conversion steps by chemical/electrochemical reactions and the material separation steps required for the reprocessing of spent oxide or metal (next generation) nuclear fuel have been investigated. The consecutive multistep processes, furthermore, have been demonstrated in a safely closed space based on the optimum transport of various high temperature melts; liquid Cd and LiCl–KCl binary molten salts including their slurries.

In Chapter 1, the background and the object of this work have been described in detail, where the attention was focused on chemical and electrochemical material conversion, the material separation, and the construction of their consecutive processes for the improved reprocessing.

In Chapter 2, a new low-temperature reaction using $MoCl_5$ has successfully been proposed for the chlorination of MA oxides, which come from high-level wastes. The chlorination of ZrO_2 and Nd_2O_3 (as simulants) by $MoCl_5$ can proceed at over 200 K lower temperature than conventional C +Cl₂ method, which might suppress the corrosion damage.

In Chapter 3, the reductive extraction of actinoid (AN) chlorides at the molten salt | liquid Cd-Li alloy interface has been studied in order to separate rare-earth (RE) chlorides contained as the fuel-poison from upstream materials. After redox reactions at the interface, AN metals have been extracted in Cd phase more selectively than RE. The effects of another impurity of NaCl contaminating the LiCl-KCl salts were small on the AN-RE separation factors.

In Chapter 4, metallic U and Pu could be recovered successfully from their oxides by the consecutive [Li reduction] \rightarrow [electrorefining] \rightarrow [distillative purification] process.

In Chapter 5, the various transport methods for high-temperature melts (liquid metals, molten salts including their slurry) have been studied extensively in order to optimize the required setup for the above various operations. The obtained knowledge was useful to construct a consecutive [electrorefining] \rightarrow [distillative purification] small plant, which demonstrated highly efficient and rapid operation for Gd as an simulant of U/Pu.

In Chapter 6, the summary of this work has been described in addition to further subjects.

目次

目次

第1章 緒言	1
1-1 核燃料と核燃料サイクル	1
1-1-1 天然ウラン資源と核燃料	1
1-1-2 原子炉内での核燃料の変化と再処理による核燃料リサイクル	3
1-1-3 原子力長期計画における核燃料サイクル	6
1-2 長半減期マイナーアクチノイドの分離と核種変換	7
1-3 長半減期マイナーアクチノイドの回収:湿式法と乾式法	7
1-4 MAの乾式分離法	9
1-5 金属核燃料の乾式再処理	11
1-6 乾式分離と乾式再処理における課題と本研究の目的	14
1-7 本論文の構成	15
第1章の参考文献	17
第2章 アクチノイド酸化物から塩化物への低温変換	28
2-1 背景:アクチノイド酸化物から塩化物への転換	28
2-2 塩化物への転換反応に関する熱力学的検討	30
2-3 ZrO ₂ から ZrCl ₄ への転換反応に関する報告例	34
2–4 MoCl ₅ を用いる ZrO ₂ から ZrCl ₄ への転換反応	34
2–4–1 実験方法: MoCl₅を用いる ZrO₂から ZrCl₄への転換反応	34
2-4-1-1 用いた試薬と試料の調製	34
2-4-1-2 示差熱分析による反応開始温度の検討	34
2-4-1-3 定温反応実験	35
2-4-1-4 X線粉末回折による反応生成物の同定	36
2-4-1-5 反応生成物の定量分析	36
2–4–2 実験結果および考察:MoCl5を用いる ZrO2 から ZrCl4 への転換反応	37

2-4-2-1 反応開始温度に関する検討	37
2-4-2-2 反応生成物の特定	38
2-4-2-3 反応速度の温度依存性	40
2-4-2-4 他の塩化物転換反応との比較	42
2–4–3 まとめ:MoCl ₅ を用いる ZrO ₂ から ZrCl ₄ への転換反応	43
2–5 MoCl ₅ を用いる(1/2)Nd ₂ O ₃ から NdCl ₃ への転換反応および Mo 副生成物の除去	44
2-5-1 実験方法: MoCl₅を用いる(1/2)Nd₂O₃から NdCl₃への転換反応および Mo 副 生成物の除去	44
2-5-1-1 用いた試薬と試料の調製	44
2-5-1-2 反応熱の示差測定、高温反応および反応生成物の分析	44
2-5-1-3 生成系における揮発性物質の蒸留分離	46
2–5–2 実験結果および考察: MoCl ₅ を用いる Nd ₂ O ₃ から NdCl ₃ への転換反応および Mo 副生成物の除去	46
2-5-2-1 反応開始温度の検討と反応生成物の特定	46
2-5-2-2 揮発性 Mo 副生物と NdCl ₃ との蒸留分離	49
2-5-3 まとめ: MoCl ₅ を用いる(1/2)Nd ₂ O ₃ から NdCl ₃ への転換反応と Mo 副生物 の蒸留除去	53
2-6 MoCl ₅ を用いるアクチノイド酸化物の塩化物変換プロセスに対する期待	54
第2章の参考文献	55
第3章 アクチノイドと希土類金属(燃料毒)の分離	57
3-1 還元・抽出分離の背景	57
3-2 実験方法:溶融塩 Cd-Li 合金界面での還元・抽出による AN と RE の分離	59
3-2-1 用いた試薬と試料の調製	59
3-2-2 還元・抽出実験装置	60
3-2-3 実験手順の詳細	60
3-3 結果と考察:溶融塩 Cd-Li 合金界面での還元・抽出による AN と RE の分離	61
3–3–1 LiCl–KCl 溶融塩 液体 Cd–Li 二相界面での還元・抽出	61

3–3–2 LiCl–NaCl 溶融塩 液体 Cd–Li 二相界面での還元・抽出	67
3–3–3 LiCl–NaCl Cd–Li 系と同温度での LiCl–KCl Cd–Li 系の比較	69
3-4 まとめ:溶融塩 Cd-Li 合金界面での還元・抽出による AN と RE の分離	71
3-5 還元・抽出による金属分離技術としての課題	72
第3章の参考文献	73
第4章 使用済金属燃料の電解精製と蒸留精製	75
4-1 背景:金属核燃料の乾式再処理	75
4-2 本研究の目的と概要	75
4-3 実験方法:アクチノイド金属の調製、電解精製および蒸留精製	76
4-3-1 用いた試薬	76
4-3-2 実験装置	76
4-3-3 実験手順の詳細	79
4-4 結果および考察:アクチノイド金属の電解精製および蒸留精製	80
4–4–1 LiCl–KCl 溶融塩中での電解精製	80
4-4-2 陰極析出金属の蒸留精製	84
4-4-3 リチウム還元・電解精製・蒸留精製の連続プロセスにおける金属収支	87
4-5 まとめ:アクチノイド金属の電解精製および蒸留精製	89
第4章の参考文献	90
第5章 高温融体の輸送を前提とする電解精製・蒸留精製プロセス	92
5-1 背景:実用プロセスにおける高温融体輸送の優位性	92
5-2 電解精製・蒸留精製プロセスにおける高温融体の輸送	92
5-2-1 対象となる高温融体と輸送区間	92
5-2-2 高温融体の流量と最高流路揚程:想定される乾式再処理実用プラント	93
5-2-3 高温融体の移送方法	94
5-3 工学的規模の電解精製・蒸留精製プラントにおける高温融体の輸送	95
5-4 59LiCl-41KCl 溶融塩の流動特性と輸送	96

5-4-1 溶融塩の重力下降流と流量制御	96
5-4-1-1 実験方法:溶融塩の重力下降流と流量制御	96
5-4-1-2 結果と考察:溶融塩の重力下降流と流量制御	98
5-4-2 遠心ポンプによる溶融塩の輸送	105
5-4-2-1 実験方法:遠心ポンプによる溶融塩の輸送	105
5-4-2-2 結果と考察:遠心ポンプによる溶融塩の輸送	107
5-4-3 まとめ:高温溶融塩の輸送	111
5-5 金属微粉体が混入した 59LiCl-41KCl 溶融塩スラリーの強制分散と輸送	112
5-5-1 背景:金属微粉の溶融塩スラリー	112
5-5-2 撹拌下におけるスラリー内金属粒子の強制分散	113
5-5-2-1 実験方法:撹拌下におけるスラリー内金属粒子の強制分散	113
5-5-2-2 結果と考察: 撹拌下におけるスラリー内金属粒子の強制分散	115
5-5-3 59LiCl-41KCl 溶融塩系金属粉スラリーの重力流下	119
5-5-3-1 実験方法:59LiCl-41KCl 溶融塩系金属粉スラリーの重力流下	119
5-5-3-2 結果と考察: 59LiCl-41KCl 溶融塩系金属粉スラリーの重力流下	120
5-5-4 まとめ:金属微粉体が混入した溶融塩スラリーの流動と粒子輸送	127
5-6 液体 Cd の流動特性と輸送	127
5-6-1 液体 Cd の重力下降流と流量制御	127
5-6-1-1 実験方法:Cdの重力下降流と流量制御	127
5-6-1-2 結果および検討: Cd の重力下降流と流量制御	129
5–6–2 減圧ポンプを利用した Cd の吸液	130
5-6-2-1 実験方法:減圧ポンプを利用した Cd の吸液	130
5-6-2-2 結果と考察:減圧ポンプを利用した Cd の吸液	132
5–6–3 遠心ポンプによる Cd の揚液	136
5-6-3-1 実験方法:遠心ポンプによる Cd の揚液	136
5-6-3-2 結果と考察:遠心ポンプによる Cd の揚液	138
5-6-4 まとめ:液体 Cd の輸送	141

5-	7 電解精調	製-陰極 Cd 合金蒸留精製の連続プロセス化	142
5 -	7-1 工学	規模をもつ電解精製−陰極 Cd 合金蒸留精製の連続装置	142
5-	7–2 Gd 경	を模擬アクチノイドとする工学規模連続装置の構築	143
5-	7—3 電解	精製–陰極合金蒸留の工学規模連続装置内での純 Cd の循環輸送	144
	5-7-3-1	用いた試薬と試料の調製	144
	5-7-3-2	実験手法の詳細:純Cdの循環輸送	144
	5-7-3-3	結果と考察:純Cdの循環輸送	145
5-	7-4 Gd 경	を模擬アクチノイドとする電解精製と陰極合金液体の輸送	146
	5-7-4-1	用いた試薬と試料の調製	146
	5-7-4-2	実験方法の詳細:Gdを模擬アクチノイドとする電解精製と陰極合金 液体の輸送	: 146
	5-7-4-3	結果と考察:Gdを模擬アクチノイドとする電解精製と陰極合金液体の輸送	: 147
5-	7-5 まと	め : 電解精製–陰極 Cd 合金蒸留精製の連続プロセス化	154
第5	章の参考文	献	156
第6	章 本研究	この総括と今後の課題	158
6–1	アクチノ	イド酸化物から塩化物への低温変換	158
6–2	アクチノ	イドと希土類金属(燃料毒)の分離	158
6–3	使用済金	属核燃料の電解精製と蒸留精製	159
6–4	高温融体	の輸送を前提とする電解精製・蒸留精製の連続プロセス	159
6–5	本研究の	工学的意義	161
6–6	今後の課	題	161
著者(の発表業績		163
謝辞			167

第1章 緒言

1-1 核燃料と核燃料サイクル

1-1-1 天然ウラン資源と核燃料

原子番号 92 のウラン 92U は地殻の平均 2~3 ppm を占め、地球上に広く分布するが、経済的採鉱は 500 ppm 以上の濃集鉱床で成立するとされている[1]。2007 年の OECD 報告書 [2]を Fig.1-1 に引用したが、130 USD/kg 以下のコストで採鉱できる U 資源は偏在し、オーストラリア、カザフスタン、ロシア、カナダ、米国、ブラジル、ニジェールの順に埋蔵量が多い[2]。経済発展が著しく原子力発電の導入に積極的な中国やインドでの可採埋蔵量は 1%程度しかなく、日本もほぼ全量を輸入に頼っている。中国はじめ新興国の原子力発電 需要の増加が予想されるため、天然 U 資源の確保が今後重要になる。



Fig 1-1 Confirmed global distribution of natural U resources available at a lower mining cost than 130 USD/kg. Data taken from [2].





一方、Fig. 1-2のように、2013年2月時点での日本の原子力発電設備容量は、米国とフ ランスにつぎ世界第3位である[3]。東日本大震災前の日本では、全発電量の約3割を原子

1

力発電が占めており、今後も原子力発電所をさらに安全強化したうえで再稼働することが 計画されている。

原子力発電では、Fig. 1-3 のように U 鉱石を処理して、ウラン酸化物の核燃料とする。 核分裂を起こしやすい ²³⁵U が天然には U 全量の約 0.7 %しか含まれない[1]ので、現在の軽 水炉用の核燃料はこれを 2~5 %まで濃縮している[4]。

鉱石 1 ton あたり U は数百 g しか含まれない。まず粗精製工程では、重ウラン酸アンモ ニウムまたは重ウラン酸ナトリウムとして濃縮する。つぎの精製・転換工程では、不純物 を化学的に除去したのち、六フッ化ウラン(UF6)に転換する。この UF6 は融点 64°C におい て 1.5 atm の蒸気圧をもつので、ガス拡散法を利用して ²³⁵U を濃縮する。²³⁵UF6 は ²³⁸UF6 より細孔隔膜を通過しやすいので、隔膜通過にともなって ²³⁵U/²³⁸U 同位体比が増加する。 ²³⁵U を天然同位体比から 3 %まで濃縮するには、これを数百段も繰り返す必要があり、約 13000 kWh・kg⁻¹の電気エネルギーを消費する[4]。これとは別の濃縮法に、高速回転円筒 を用いる遠心分離法があり[5]、分子量の小さい ²³⁵UF6 ガスを回転軸付近に濃縮する[6]。遠 心分離法では必要電力量をガス拡散法の約 1/10 まで節減できると言われている。

濃縮後の UF6を酸化物 UO2にもどし(再転換工程と呼ばれている)てから、短円柱状の ペレットに加工し、耐熱性のジルコニウム合金製被覆管内に封入する。この燃料棒数十本 を集合体ケース入れ、原子炉内に装荷する。このように核燃料の準備には、²³⁵Uの濃縮工 程をはじめとして多量のエネルギーが消費されている。



Fig. 1-3 The preparation of UO_2 nuclear fuels and their recycle use in a light water or fast breeder reactor. Data taken from [4].

 $\mathbf{2}$

1-1-2 原子炉内での核燃料の変化と再処理による核燃料リサイクル

使用済みとなった核燃料を廃棄するのではなく、原子炉内で起こった変化をふまえたう えで、再利用するために必要な処理(すなわち再処理)を行い、U 資源調達上での問題を 軽減することが、安定的な原子力発電の維持には不可欠である。

(a) Non recycled spent fuel (Pressured water reactor)



(c) Recycled spent fuel (Fast breeder reactor)



Fig. 1-4 Required amount of nuclear fuels for the one-year operation (80% duty) of 1000 MW output (electric only) in (a) non-recycling PWR, (b) recycling PWR, and (c) expected fast breeder reactor plants. Data taken from [4].

3

Fig. 1-4 に示したのは、発電出力 1000 MW の原子炉を 1 年間 80 %稼働率で運転するの に必要な天然 U 量を、Benedict らが試算した結果[4]である。1000 kg の天然 U₃O₈を表す 単位 MTU で表記すると、(a) 核燃料の再処理をまったく行わずに軽水炉(加圧水型)で発 電する場合には、201 MTU が必要である。(b) 未分裂の ²³⁵U を濃縮工程にもどし、²³⁸U か ら生成した ²³⁹Pu を核燃料として軽水炉(加圧水型)で併用する場合には、78 MTU 節減で き、必要量は 123 MTU となる。さらに、熱中性子を利用する軽水炉ではなく、(c) 高速中 性子を利用する高速増殖炉の場合には、1.5 MTU まで節減できる。この非常に大きな違い は、多量の ²³⁸U が新たな核燃料 ²³⁹Pu へと変わる割合(増殖比と呼ばれる)が、熱中性子 炉内より高速増殖炉内の方がはるかに大きいことに起因する。

高速増殖炉ではむしろ ²³⁹Pu が主燃料となるので、²³⁵U 濃縮用のエネルギー消費を節約 できるメリットもある。そこで、次世代の原子炉として高速増殖炉が期待され、わが国で は「もんじゅ」の名称で研究開発が進められている[7]。このように天然 U 資源の有効利用 を図るのが、Fig. 1-3 にも示した核燃料サイクルである。エネルギー資源をもっぱら輸入に 頼る日本では、軽水炉の使用済核燃料に含まれる ²³⁹Pu を準国産エネルギー源と位置づけ、 電気エネルギーの安定供給につながる核燃料サイクルの実現をめざしている[7]。



Fig. 1-5 Fission of 235 U and neutron capture of 238 U to produce 239 Pu. Data taken from [8].

原子炉内におかれた²³⁵U と²³⁸U は、Fig. 1-5 のように中性子と反応する[4, 8]。中性子 との衝突で起こる²³⁵U の核分裂と、²³⁸U による衝突中性子の捕獲である。一般に核分裂反 応では、1 個の中性子を吸収した重い原子核が2つに分裂すると同時に、いくつかの中性子 も生む。軽水炉中で核分裂するものには、²³⁵U のほか²³³U、²³⁹Pu、²⁴¹Pu などがある[4]。 一方の捕獲反応では、1 個の中性子を吸収して質量数が1つ多い核種に変化する場合がほと んどで、このときγ線を放出する。核燃料中でUの大半を占める²³⁸U は、中性子を捕獲し てβ壊変をして²³⁹Pu に核種変換される。上述のように、この²³⁹Pu も²³⁵U と同様に中性子 が衝突すると核分裂し、エネルギーを放出する燃料として利用できる。連鎖的化学反応に も似た、中性子衝突にもとづく原子核種の変換が原子炉内で引き起こされる。

しかしながら、²³⁵Uの核分裂生成物の中には、中性子を吸収して核分裂しないものもある。これらは原子炉内の中性子を消費することになるので、中性子と核燃料との正常な反応を阻害する燃料毒である。長期間使用してこの燃料毒が蓄積されると、必要な核反応を 維持できなくなるため、燃料棒を交換する必要を生じる。

²³⁵U の核分裂反応の生成物は、きわめて多種類である。原子核データ[9-10]にもとづく Benedict らの推算によれば、²³⁵U から分裂生成する核種の量は、Fig.1-6 のように質量数 90 と 137 付近に 2 つの極大ピークをもつ[4]。とくにこれらのピークにあたる ⁹⁰Sr と ¹³⁷Cs は多量で、いずれも半減期約 30 y の崩壊に際して、熱を放出する。また、140 前後の質量 数をもつ希土類金属(RE; Rare-earth metals)も多い。



Fig.1-6 Calculated fission yield of various nuclei from 235 U. Data taken from [4].

原子炉内で中性子を捕獲し、質量数の大きい核種へ変化するものもある。使用済燃料の 元素組成は ORIGEN-II を用いて推算でき、Fig. 1-7 にその一例を示した。計算対象は加圧 水型軽水炉(PWR)での使用済燃料 1 ton で、発熱履歴 45 GW・day、冷却履歴 5 年と設定さ れている[11]。この図に見られるように、質量数が 238 より大きい元素として Pu 1.2 %と マイナーアクチノイド (MA; Minor actinoid、Np、Am、Cm) 計 0.1 %程度が含まれ、U がいまだ 94 %を占める。このほか前述の Cs が 0.4 %、Sr が 0.1 %、希土類(RE)が計 1 %、 貴金属 (アクチノイドよりも電気化学的に貴な金属群であって、金や白金などの貴重金属 と同義ではない)が計 1 %含まれる。使用済核燃料の再利用にあたっては、このような多種 の元素群から U と Pu をできるだけ選択的に回収することが求められる。



Fig. 1-7 Simulated elemental content in one ton of nuclear fuel spent in a PWR plant (45 GW • day • ton⁻¹) after stored 5 years. Data taken from [11].

1-1-3 原子力長期計画における核燃料サイクル

Fig. 1-3 の核燃料サイクルの実現をめざす原子力長期計画[7]にもとづき、核燃料再処理施設の試運転が青森県六ヶ所村で行われている[5]。PUREX 法と呼ばれているこの再処理では、Fig. 1-8 のように使用済核燃料から U と Pu を別々にとり出す。まず硝酸で使用済核燃料を溶解したのち、硝酸と有機溶媒を用いた数段の抽出で U と Pu を分離する[8]。得られた U と Pu の硝酸溶液を混合・脱硝して酸化物とし、これらを焼結ペレット MOX 燃料に加工して、軽水炉や高速増殖炉で利用する。図中の第一段抽出(Scrub extraction)で U や Pu を採取したのちの高放射能レベル廃液には、MA が含まれる。現行計画では、長半減期をもつこれら MA 核種も核分裂生成物とともにガラス固化体とし、高レベル廃棄物として深地層に埋蔵処分する[12]。すなわち、MA 核種の分離処分は現在のところ想定されていな



Fig. 1-8 Outline of PUREX processes for the spent-fuel reprocessing. Data taken from [8].

1-2 長半減期マイナーアクチノイドの分離と核種変換

北本が提案した指針[13-15]によれば、分離や変換核種を検討すべき高放射能レベル廃液 物中の対象は、長期的に摂取毒性をおよぼす核種、深層地埋蔵時に地下水へ移行しやすい 核種、核変換容易な核種である。

Table 1-1 に主要アクチノイド同位体の半減期を示すが[16]、長半減期をもつ MA を分離 後に核種変換することは、以下に述べるいつかのメリットにつながる。まず、高レベル廃 棄物の毒性低下がある。放射性毒の許容限界 ALI (Annual limit on intake)に関する報告 [17]によれば、天然 U と同レベルまでの毒性低下に要する時間は、使用済核燃料から 99.5 % の U と Pu を除去した場合は 10⁵年程度、これらに加えて 99 %の MA も除去した場合は 10³ 年程度となるため、高レベル廃棄物からの MA 除去で放射能毒の影響時間を大幅に短縮で きる[17]。

$_{92}\mathrm{U}$		$_{93}\mathrm{Np}$		₉₄ Pu		$_{95}$ Am		$_{96}\mathrm{Cm}$	
m	$t_{1/2}$ (year)	т	$t_{1/2}$ (year)	m	$t_{ m 1/2}$ (year)	т	$t_{1/2}$ (year)	т	$t_{1/2}$ (year)
233	$1.6\! imes\!10^5$	236	$1.1 imes 10^{5}$	238	88	241	433	243	29
235	$7.0\! imes\!10^8$	237	$2.1\! imes\!10^6$	239	$2.4\! imes\!10^4$	243	$7.4\! imes\!10^3$	244	18
238	$4.5 imes10^9$			240	$6.6 imes 10^{3}$			245	$8.5\! imes\!10^3$
				241	14			246	$4.7\! imes\!10^3$
				242	$3.8\! imes\!10^5$			247	$1.6\! imes\!10^7$
				244	$8.1\! imes\!10^7$			248	$3.5\! imes\!10^7$
								250	$<1.1 \times 10^{4}$

Table 1-1 Half-lives of actinoid element isotopes. Data taken from [16].

現在、日本では高レベル廃棄物埋蔵処分の候補地が見つからない状況であるが、必要な 処分地面積は以下のように試算されている[18]。使用済 UO2燃料から MA を分離しない場 合は 150 m²/TWh、MA を分離すれば 100 m²/TWh とわずかに減少する。また、Pu も燃や すプルサーマル軽水炉の使用済核燃料そのままの場合は 500 m²/TWh、これから MA を分 離すれば 100 m²/TWh と大幅に減少する。さらに、高速増殖炉の使用済核燃料そのまま場 合は 450 m²/TWh、これから MA を分離すれば 100 m²/TWh まで減少する[18]。したがっ て深層地埋蔵処分の観点からも、とくに今後が期待されるプルサーマル炉や高速増殖炉の 使用済燃料から MA を分離すれば、有利である。

さらに、MAの分離は廃棄物処理上の有利性をもつのみならず、MAは高速増殖炉内の中 性子で核分裂するので、その回収と燃料としての再利用は資源の有効利用にもつながる。

1-3 長半減期マイナーアクチノイドの回収:湿式法と乾式法

以上の背景から、高レベル廃液中の MA 回収を主目的とする湿式溶媒抽出法が広く研究 されてきた。日本では、日本原子力研究開発機構(JAEA:旧原子力研究所のグループ)が 1984年頃から開発した3群分離プロセス[19-20]を発展させ、4群分離が検討されている[21]。 このプロセスでは、MA 群、Tc~白金族群、Sr と Cs 群、その他元素群の4つに金属成分を 分ける。まず、硝酸をベースとする高レベル廃液にギ酸を加えて、NO₃-を NO_x ガスとして 除去し、硝酸濃度を 0.5 M まで下げる。ついで、MA 群を有機相へ抽出後に水相へ逆抽出 して、分離する。さらに、Tc~白金族群を沈殿させて分離し、Sr と Cs 群をゼオライトなどの無機イオン交換体カラムに吸着・分離する。

このプロセスにおいては、MA 群に混入する希土類 (RE、燃料毒)の分離が課題であり、 新規な有機抽出剤の探索[22]などが行われている。また、イオン交換カラムを利用した MA /希土類の分離[23]も検討されている。

海外においても、MA 分離・核種変換に関する研究が盛んに行われている。

米国では、Oak Ridge National Laboratory (ORNL)が幹事機関となって、群分離・核変 換技術に関する総合的な評価が 1980 年になされ[24]、メリット/コストの比が小さいなど の理由で、大きな意義は見いだしがたいと結論された。このためその後は、この分野の研 究が縮小されたが、放射性廃棄物処理上のメリットが見直され、Argonne National Laboratory (ANL) [25]や Hanford で続行されている。米国では軍事用の再処理法として、 TRUEX (Transuranium extraction)と呼ばれるプロセスも開発されている。しかし米国で は、放射能レベルや核分裂生成物濃度が軍事分野廃液の約 100 倍にも達する商用廃液に対 して、再処理は実施されていない。

ヨーロッパでは、14ヶ国が参加する ACSEPT プログラム(2008-2012)にしたがって、MA の分離(乾式も含む)・核種変換が積極的に研究され[26-27]、SACESS プログラム(2012-) に移行後も継続されている[28]。フランスでは、高レベル廃棄物の分離・変換処理および高 レベル廃棄物固化処分を 15 年間並行して研究開発することが、1991 年制定の廃棄物管理 法で義務づけられたので、積極的な研究が展開された[29]。2006 年にも新廃棄物管理法が 制定され、引き続き研究を促進した[30]。DIAMEX (diamide extraction)と呼ばれる MA の 溶媒抽出分離プロセスが開発されたが[31]、Zr、Mo、Ru、Fe などの同時抽出抑制が課題 となっていた。その後、GANEX (Group actinide extraction)として、MA と希土類(RE)を 一括抽出してから RE だけを逆抽出するプロセスに発展させている[32]。

ロシアや中国においても、MAとREを分離するための有機抽出剤の研究が行われている [33-34]。

湿式分離では、充分な MA/RE 分離性能をもつ最適な抽出剤や、高放射線環境下でも二 次廃棄物化しないイオン交換樹脂の探索がいまだに課題となっている。

一方、MA の分離に水溶媒を使用しない乾式分離法も研究されている。一般財団法人電 カ中央研究所(以下、電中研)は、湿式再処理で発生する高レベル廃液中の MA を、溶融 状態の塩化物と液体 Cd を利用して分離し、これを高速増殖炉内で核種変換することを、 1987 年から提案している[35]。これまでに、還元・抽出や電解精製ステップでの分離性能 を評価するため、溶融塩や液体 Cd 中におけるアクチノイドや希土類の平衡電位などの基礎 データ[36-41]を集積してきた。さらに、溶融塩中での電解精製における MA/RE 分離性能 を確認し[42-46]、溶融塩 | 液体 Cd 二相界面での還元・抽出に際しての MA/RE 分離性能 も評価した[47-55]。これらの基礎的検討結果を踏まえた乾式分離プロセスの詳細について は、次節に述べる。 なお、この他の乾式分離法として、フッ化物の蒸留分離[56]や溶融塩中での選択的電析 [27]なども検討されている。

乾式分離法と湿式分離法を Table 1-2 に比較した[57]。乾式分離の特長は、処理対象が広 く、溶媒の放射線耐性が高く、二次廃棄物が少なく、臨界到達危険性の少ない小型のプラ ント設計が可能なことである。一方の湿式分離の特長は、得られる MA の純度が高い、運 転温度が低いことである。

	Dry process	Aqueous process	
Treatment volume / dm ³	50 (as chlorides)	400 (as nitrate soln.)	
Plant size	Compact	Large	
	HLW, Insoluble residue,		
Acceptable substance	Scrubbing waste,	HLW	
	Cladding waste		
Distribution factor	> 99 - 99.9	> 99.5 - 99.9	
Product	Metal (or oxide)	Oxide	
Purity of MA	Low	High	
Process temp. / K	773 - 1273	< 373	
Critical danger	Mild	Severe	
Secondary waste	Crucible	Solvent, IE resin	
Radiation resistance of	II:h	T	
solvent	nıgn	LOW	

Table 1-2 Comparison of dry (non-aqueous) and aqueous partitioning processes for the high level waste. Data taken from [57].

分離された MA の核変換には、高速増殖炉[18,58]または加速器駆動型未臨界専焼炉 (ADS) [59]の利用が見込まれている[60]。高速増殖炉の場合は高速中性子で MA を核分裂さ せ、ADS の場合は加速陽子を核破砕ターゲットに衝突させ、発生した核破砕中性子で MA(窒 化物や金属など)を核分裂させる。

分離・核変換に関わる技術上の進展は、日本原子力学会の専門委員会報告書[60]、 OECD/NEAの国際会議録(1990~2012年の隔年、計12回)、IAEAの報告書[61]にまと められている。このように、将来の核燃料サイクルにとって重要な MA の分離・変換技術 の研究が、海外も含め積極的に行われている。日本原子力委員会「分離変換技術に関する 研究開発の現状と今後の進め方」においても、将来技術としての位置づけで MA の分離・ 核変換技術の推進が提言されている[62]。

1-4 MAの乾式分離法

加圧水型軽水炉(PWR)での発熱履歴 48 GW・day、冷却履歴 4 年の使用済燃料 1 ton を、 PUREX 法で処理したときの高レベル廃液中の推定金属含有量と組成を Table 1-3 に示した。 MA は計 2.2 %であるが、PUREX プロセスでは回収できなかった 7.5 %の U や 0.1 %の Pu も含まれるので、U と Pu も MA とともに回収し、再利用する。

9

	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		
	Elements	Weight / kg	Ratio / wt%
	U	4.7	7.5
	Pu	0.1	0.1
	Np	0.7	1.1
MA	Am	0.6	0.9
	Cm	0.1	0.2
R	are earth metals	14.7	23.5
Oth	er fission products	25.7	40.9
Fe	Corrosion product	3.5	5.6
Na	Rinsing solvent	12.6	20.2
	Total	62.7	100.0

Table 1-3 Calculated* metal content and composition in a high level waste of PUREX treatments for the spent fuel**. Data taken from [35].

*Calcd. by ORIGEN-II ** 48 GW • day • ton⁻¹ in PWR after 4 year cooling



Fig. 1-9 A flow-diagram of the pyro-partitioning process after PUREX treatments for spent nuclear fuels. Data taken from [64].

電中研が提案する乾式分離プロセスを Fig. 1-9 に示すが、硝酸ベースの高レベル廃液を 加熱・脱硝して、まず酸化物に転換したのち[63-64]、より低融点の塩化物に転換する(塩 素化工程)[64-65]。さらに塩化物を低融点の LiCl-KCl 共晶塩に溶解させてから、MA を Li で還元して Cd 液相中に抽出し、溶融塩中に残る希土類(RE)と分離する(還元・抽出工 程)[47-55]。この還元・抽出工程では、MA と化学的性質が近い U と Pu も Cd 液相中に 合金化する。最後に Cd を揮発・除去し、MA、U、Pu を回収する。 Table 1-3 のように高レベル廃液中での RE/MA 比は約 10 で、中性子を吸収し燃料毒と なる希土類が過多のため、約 1 まで希土類を低減する必要がある。その後、MA(と U、Pu) を金属燃料に混合し、高速増殖炉で燃料として利用しながら、半減期のより短い核種に変 換する。

これまでに、還元・抽出の分離ステップや電解槽で分離ステップをロックウェルインタ ーナショナル社(現ボイーング社)やミズーリ大学と共同で研究し[36-40, 42-45, 53-55]、 また実高レベル廃液に対する乾式分離試験も EU 超ウラン元素研究所(ITU)と共同で行って きた[64]。著者はこれまで、Fig. 1-9の乾式分離プロセス中の数要素ステップに関与したが、 赤色の破線で囲んだ部分に関する研究成果を中心に、本論文をまとめた。

1-5 金属核燃料の乾式再処理

使用済核燃料の再処理方法には、湿式 PUREX 法とは異なり、水溶液を使用しない乾式 法もある。乾式再処理法としては、フッ化物揮発法(チェコなど)、酸化物の溶融塩電解法 (ロシア)、金属の溶融塩電解法(米国・日本など)が知られている[67]。

使用済の金属燃料を溶融塩中で電解精製して再生金属燃料とするシステムを、米国の ANL が 1980 年代に IFR 計画として提案した[68-69]。この計画は政権交代の影響で 1994 年に中止されたが[57]、ANL から改編されたアイダホ国立研究所(INL)が、廃棄物処理を主 目的として現在も研究を引き継いでいる[70-73]。使用済金属燃料の安定的な処分に乾式再 処理は有効との評価が、2000 年に米国科学アカデデミーから与えられた[74]。

すでに Fig. 1-3 に示したように、日本の核燃料サイクル計画は軽水炉も高速増殖炉も酸 化物核燃料を前提としている。電中研では、乾式再処理と金属燃料高速増殖炉を組み合わ せ、Fig. 1-10のような金属核燃料サイクルを提案してきた[75-78]。ANL [48]、ITU [79-83]、 JAEA [41, 84-102]などの機関と 1987 年から共同し、(U+Pu+MA)を用いた試験も行った。

金属燃料の乾式再処理には、以下の利点がある。まず、MA を U や Pu とともに回収す るため、廃棄物中の長半減期 MA を減量し、環境負荷低減に寄与する[75]。また、Pu と U を別々に回収する PUREX 法とは対照的に、Pu を U とともに回収するので、核兵器拡散の 防止につながる[103]。乾式再処理の溶媒は放射線劣化がほとんどない無機物の塩や Cd で あるから、有機溶媒や有機抽出剤を用いる湿式法に比べ、二次廃棄物の発生量が少ない[75]。 さらに小型の装置設計も可能で、バッチプロセスを主体とする小規模施設でも高い経済性 が見込める[104]。しかし、英国やフランスで軽水炉燃料の商業的再処理[105]に実用されて いる PUREX 法に比べて実績が少なく、高速増殖炉でも酸化物燃料の研究例が多い現状で ある。そのため、日本では「高速増殖炉サイクルの実用化戦略研究 フェーズ II 技術検討書 (2)燃料サイクルシステム」において、湿式再処理・酸化物燃料高速増殖炉サイクルが主流 とされ、Fig. 1-10 の乾式再処理・金属燃料高速増殖炉サイクルは副概念として位置づけら れている[104]。



Fig. 1-10 Pyrometallurgical technologies for the closed nuclear fuel cycle proposed by CRIEPI. Data taken from [75].

一方、海外における乾式再処理の研究は、米国のほか韓国、インド等で行われている[75]。 米国における 2006 年~2009 年のグローバルパートナシップ(GNEP)[106]では、高速増殖 炉用の再処理として湿式 1 件に対して乾式 2 件が採用された。しかし、政権交代の影響で 商業的再処理計画は中止され、INL と ANL の両国立研究所で乾式再処理の研究が続けられ ている[75]。米国との原子力協定で再処理が許可されていない韓国では、使用済核燃料の減 容化をめざしていたが、近年、核不拡散性に優れる乾式再処理を国家規模で推進し、U を 用いた模擬装置を稼働しているが[107]、使用済実燃料の再処理には未着手である[75]。経 済発展が著しく軽水炉が少ないインドは、積極的に高速増殖炉開発に取り組み、実験炉に 続いて 50 万 kW 級を建設中で、1990 年代から乾式再処理の研究にも着手している[108]。 このように、海外においては、乾式再処理と金属燃料高速増殖炉への取り組みが積極的に 行われている。

高速増殖炉用金属燃料 1 ton が燃焼履歴 135 GW・day、冷却履歴 4 年を経ると、Fig. 1-11 に示すように、Pu が 13 %、MA が 1 %となり、U は 73 %まで減少する[104]。Fig. 1-7 に 示した軽水炉の使用済酸化物燃料と比べて Pu と MA の含量が多いのは、Pu と MA が燃料 成分として高速増殖炉の燃料に加えられているためである。また、核分裂生成物も使用済 金属燃料の方が多い。希土類を比較すると、酸化物燃料 1.4 %に対して金属燃料 4 %であり、 他の貴金属(Zr や白金族)も金属燃料の方が多い。これらは使用済時点での燃焼履歴が、 高速増殖炉用では 135 GW・day・ton-1と軽水炉用での 45 GW・day・ton-1より多いためであ る。したがって、ことに金属燃料の再処理では、核分裂生成物とアクチノイド(U、Pu、 MA)との高い分離能が要求される。



Fig. 1-11 Simulated elemental content in one ton of nuclear metal fuel spent in an FBR plant (135 GW \cdot day \cdot ton⁻¹) after stored 4 years. Data taken from [104].

電中研が提案する乾式再処理プロセスを、Fig. 1-12 に示した[75-78]。使用済金属燃料棒 を機械的に切断して、電解精製の陽極バスケットに入れ、溶融塩の電解浴中へ酸化溶解さ せる。溶解しない金属成分はそのまま金属粉として集め、溶解成分のうち U 種の大部分は 鉄の固体陰極上へ選択的に金属として電着・回収する。また Pu 種や MA 種を一部の U 種 とともに液体 Cd 陰極内に合金として回収する。このとき、溶出した核分裂生成物種はその まま浴中に残す。

固体陰極上で回収した金属 U には電解液塩が付着し、Cd 陰極は電解液塩が混入した Cd-Pu-U-MA 合金に変化するため、電解液塩や Cd を揮発・除去する。このように使用済 燃料から回収された金属 U と Pu-U-MA を、金属燃料組成に調製して石英ガラス(モール ド)に射出鋳造し、高速増殖炉の再生金属燃料棒とする。

電解精製浴中には崩壊熱の多い ¹³⁷Cs や ⁹⁰Sr もしだいに蓄積され、温度制御が困難とな る。そこで、電解浴塩をリフレッシュするため、アクチノイド(U、Pu、MA)を Cd 中へ 還元・抽出したのち、核分裂生成物の希土類、Cs、Sr をゼオライトに吸着・除去する。電 解精製浴中アクチノイド濃度低下を避けるため、Cd 相からアクチノイドを塩化カドミニウ ムで酸化溶出させ、電解浴へもどす。核分裂生成物が吸着したゼオライトは、ソーダガラ ス化して固体廃棄物とする。



Fig. 1-12 The CRIEPI plan for pyrometallurgical reprocessing of spent nuclear metal fuels. Data taken from [78].

1-6 乾式分離と乾式再処理における課題と本研究の目的

Fig. 1-9 に示した乾式分離プロセスを確立するまでには、さまざまな課題が残っているが、 そのうち塩素化工程と還元・抽出工程については、以下の問題点がある。まず塩素化工程 は 973 K の高温塩素雰囲気中での化学反応[64-65]のため、塩素による材料腐食が障害とな る。酸化物から塩化物への転換反応温度を低下できれば、使用する金属材料などの腐食抑 制にもつながる[109]。一方、還元・抽出工程については、混入するナトリウム(Na)の影響 を評価する必要がある。この Na 源は湿式再処理での洗浄に使用されたもので、高レベル廃 液から導いたアクチノイドなどの塩化物中に、NaCl として混入する[63]。本研究では、乾 式分離プロセスにおける以上 2 つの課題に取り組んだ。

一方、これまでの乾式再処理に関わる研究では、電解をはじめとする個々の工程がおも な検討対象とされ[79-81, 84, 87-88, 110-111]、一連の工程を連続プロセスとして実証した 例はほとんどない。そこで本研究では、小規模な連続プロセス試験を行い、その実現可能 性を検証した。

さらに、プロセスの確立に求められるのは、化学的あるいは電気化学的な物質変換ばかりではない。日本原子力委員会の「分離変換技術に関する研究開発の現状と今後の進め方」では、溶融塩や液体 Cd の輸送技術の開発が乾式分離の課題とされている[62]。また、「高

速増殖炉サイクルの実用化戦略研究フェーズⅡ技術検討書 (2)燃料サイクルシステム」で も、装置工学的技術が乾式再処理の課題にあげられている[104]。

大量の溶融塩や溶融金属を扱う乾式分離や乾式再処理を実用プロセス化するには、冷却・再加熱や凝固体ハンドリングの煩雑さを避けるため、これら高温融体を液体のまま次のステップに移送することが望まれる。これまでに大規模(~数m³/min)な高温融体輸送については、高速増殖炉内の液体 Na [112]や溶融塩原子炉内の溶融塩[113]、太陽光発電システム用の溶融塩熱媒体[114-117]などの研究例がある。しかし、再処理プラントで要求される少流量かつ高揚程での高温融体輸送を検討した例は多くない[118-125]。そこで本研究では、高温融体(LiCl-KCl 溶融塩、金属粉が分散した溶融塩スラリー、液体 Cd)の流動特性を把握したうえで、少量輸送手法を検討した。さらに、これらの知見をもとに実用に近い規模のプロセス装置を構築し、高効率かつ迅速な乾式再処理を検証した。

以上の課題解決は、再処理金属燃料の高速増殖炉での利用を前提として、Puの燃料利用 (かつ単離 Puの拡散防止)、長半減期 MAの燃料利用(かつ核種変換による廃棄物環境負 荷の低減)、さらに需要に応じて増設可能な経済的小規模再処理施設の準備にもつながる。

1-7 本論文の構成

第2章では、乾式分離の塩素化工程における材料腐食を抑制するため、従来より低温で酸化物を塩化物に転換する可能性を検討した。酸化物からOが脱離し、代わりにClが侵入すれば塩化物となるが、一般的にはカーボンなどの還元剤で脱酸素したのち、Cl2ガスと反応させる。この場合、とくに酸化物 | カーボン固相間の反応速度を上げるには、どうしても高温が要求される。そこで本研究では、脱酸素と塩素付加の二重機能が期待できる五塩化モリブデン(MoCl5)に注目し、低温度で塩化物に変える可能性を検討した[126]。模擬酸化物として二酸化ジルコニウム(ZrO2)や三酸化二ネオジム(Nd2O3)を選び、MoCl5による塩化物転換反応の速度や反応機構を調べ、副生成物の分離についても検討した。

第3章では、乾式分離の還元・抽出工程に与える混入 Na の影響を調べるため、LiCl-KCl 共晶二元系と LiCl-NaCl 二元系の2種の溶融塩について、溶融塩 | 液体 Cd 二相間の希土 類/アクチノイド分配比を比較・検討した[127]。

第4章では、乾式再処理における電解精製・蒸留精製ステップの連続性を実証するため、 小規模な連続プロセス試験を実施した。UやPu金属(調達不能のため各酸化物を還元して 調製)を陽極にして電解し、固体Fe陰極上と液体Cd陰極中にUやPuを回収した。さら に、回収物に混在する電解液塩やCdを蒸留で除去して純金属を得る連続プロセスについて、 物質収支などを検討して実現性を評価した[128]。

第5章では、乾式分離や乾式再処理のプロセス設計に不可欠な要素技術として、高温の 溶融塩[129]や液体 Cd[130]の少量輸送を検討した。融体の温度(したがって粘性率)、ポ ンプ出力、配管の抵抗など輸送に関わるパラメータに注目し、最適化も図った。また、電 解精製の陽極に含まれる不溶性の貴金属(Zr や白金族)の一部が粉末として陽極バスケッ トから落ち、電解液塩中に混入する。この粉末を溶融塩とともに輸送することが望ましい ため、溶融塩中での粒子の分散挙動と配管内での流動についても検討した[131]。これらの 結果をふまえて、溶融塩や液体 Cd の輸送機能を備えた電解精製システムを実用に近い規 模で構築し、物質収支や輸送時間などの評価にもとづいて、このシステムの有効性を実証 した[132]。 第1章の参考文献

- [1] W. Marshal 編, 内藤奎爾監訳, "原子力の技術 燃料サイクル上", 筑摩書房 (1987).
- [2] A Joint Report by the OECD NEA and IAEA, "Uranium 2007: resource, production, and demand", OECD/NEA (2008).
- [3] 資源エネルギー庁、"エネルギー白書 2013" (2013).
- [4] M. Benedict, T. H. Pigford, and H. W. Levi, 清瀬量平訳, "原子力化学工学第 I 分冊核 燃料サイクルの化学工学", 日刊工業新聞社 (1983).
- [5] 日本原燃株式会社ホームページ: http://www.jnfl.co.jp/.
- [6] M. Benedict, T. H. Pigford, and H. W. Levi, 清瀬量平訳, "原子力化学工学第 VII 分冊 ウラン濃縮の化学工学", 日刊工業新聞社 (1983).
- [7] 日本原子力委員会,"原子力の研究、開発および利用に関する長期計画",平成 12 年 11月 (2000).
- [8] S. Glasstone and A. Sesonske, "Nuclear Reactor Engineering (third ed.)", Krieger Publishing, Malabar, Florida, USA (1981).
- [9] L. L. Bennett, "Recommended fission product chain for use in reactor evaluation studies", No. ORNL/TM-1658 (1966).
- [10] W. H. Walker, "Fission product data for thermal reactors", AECL-3037, Part I&II (1973).
- [11] 日本原子力研究開発機構 原子力基礎工学研究部門燃料・材料工学ユニット 湿式分離 プロセス化学グループ,"再処理プロセス・化学ハンドブック第 2 版", JAEA-Reviw-2008-037 (2008).
- [12] 資源エネルギー庁,日本原子力研究開発機構,"高レベル放射性廃棄物及び TRU 廃棄 物の地層処分基盤研究開発に関する全体計画",(2010).
- [13] 北本朝史, "消滅処理技術の現状", 日本原子力学会編, 72 (1994).
- [14] A. Kitamoto, "Grouping in partitioning of HLW for burning and/or transmutation by nuclear reactors", J. Nucl. Sci. Technol., 32, 6, 565 (1995).
- [15] A. Kitamoto, "Grouping of HLW in partitioning for B/T (burning and/or transmutation) treatment with neutron reactors based on three criteria", Ann. Nucl. Energy., 22, 697 (1995).
- [16] G. Friedlander, J. W. Kennedy, E. S. Macias, and J. M. Miller, "Nuclear Radiochemistry (third ed.)", John Willey & Sons, New York, USA (1981).
- [17] 井上 正,坂田昌弘,宮代 一,松本俊一,日下部 武,倉田正輝,坂村義治,松村哲 夫,笹原昭博,八田 洋,"長半減期核種の乾式分離,消滅処理基礎技術の開発",電力 中央研究所総合報告,T15 (1990).
- [18] H. Oigawa, K. Nishihara, and T. Yokoo, "Partitioning and transmutation technology in Japan and its benefit on high-level waste management", *Proc. GLOBAL 2007*, September 9-13, Boise, USA, 434 (2007).

- [19] 久保田益充, "高レベル廃液の群分離の研究開発", 日本原子力学会誌, 29,9,775 (1987).
- [20] 久保田益充, "高レベル放射性廃棄物の群分離技術の開発の現状", 原子力工業, **31,** 4, 51 (1985).
- [21] M. Kubota, I. Yamaguchi, Y. Morita, Y. Kondo, K. Shirahashi, I. Yamagishi, and T. Fujiwara, "Development of a partitioning process for the management of high-level waste", *Proc. GLOBAL 1993*, September 12-17, Seattle, Washington, USA, 588 (1993).
- [22] K. Nomura, Y. Koma, M. Ozawa, and T. Kawata, "Japanese experience in application of the TRUEX process to high-level waste from reprocessing", *ibid.*, 595 (1993).
- [23] S. Watanabe, T. Suzuki, A. Shibata, Y. Koma, and Y. Nakajima, "MA recovery experiments from genuine HLLW by extraction chromatography", *Proc. GLOBAL* 2011, December 11-16, Makuhari, Japan, 387433 (2011).
- [24] A. Croff, J. O. Blomeke, and B. C. Finney, "Actinide partitioning-transmutation final report I overall assessment", No. ORNL-5566 (1980).
- [25] E. P. Hoewitz, D. G. Kalina, H. Diamond, and G. F. Vandegrift, "The TRUEX process –a process for the extraction of the transuranic elements from nitric acid waste utilizing modified PUREX solvent", *Solvent Extr. Ion Exch.*, 3, 1&2, 75 (1985).
- [26] S. Bourg, E. Touron, C. Caravaca, C. Ekberg, E. Gaubert, and C. Hill, "ACSEPT: a new FP7-Euratom Collaborative Project in the field of partitioning processes for advanced fuel cycles", *Proc. ATALANTE 2008*, May 19-22, Montpellier France, O1-02 (2008).
- [27] S. Bourg, S. Bouvet, C. Caravaca, L. Cassayre, G. de Angelis, C. Ekberg, A. G. Espartero, A. Geist, Ph. Guilbaud, M. Harrison, F. Klaassen, R. Malmbeck, G. Modolo, N. Ouvrier, C. Rhodes, and R. Taylor, "ACSEPT the current European project on actinide recycling", *Proc. GLOBAL 2011*, December 11-16, Makuhari, Japan, 357353 (2011).
- [28] D. Haas, "Fuel cycle back-end and recycling strategies in Europe and related EURATOM research", Proc. 12th Information Exchange Meeting on Partitioning and Transmutation 2012, September 24-27, Prague, Czech Republic, OECD/NEA, 23 (2013).
- [29] J. Y. Barre, J. Bouchard, "French R & D strategy for the back end of the fuel cycle", Proc. GLOBAL 1993, September 12-17, Seattle, Washington, USA, 27 (1993).
- [30] C. Chabert, A. Leudet, A. Saturun, G. Mathonnier, G.-M. Gautieri, B. Boulli, C. C-Pascal, S. Gabriel, E. Gagnier, R. Gireud, J.-L. Girotto, H. Hancok, F. Jasserand, F. Legee, M. Meyeri, J. F. Milot, C. P. Salanon, P. Sarrat, L. V. D. Durpel, T. Duquesny, M. C. Charles, B. Carlier, J.-C. Lefevre, C. Garzenne, P.

Barbrault, F. Laugier, and B. Ganne, "Comparison of different options for minor actinide transmutation in the frame of the French law for waste management", *Proc. GLOBAL 2011*, December 11-16, Makuhari, Japan, 387490 (2011).

- [31] C. Madic, J. Bourges, and J. F. Dozol, "Overview of the long-lived radionuclide separation process developed in connection with CEA's SPIN program", Proc. 3rd Information Exchange Meeting on Partitioning and Transmutation 1994, December 12-14, Cadarache, France, OECD/NEA, Section 5.1 (1994).
- [32] M. Miguirditchian, L. Chareyre, X. Heres, C. Hill, P. Baron, and M. Masson, "GANEX: adaptation of the DIAMEX-SANEX process for the group actinide separation", *Proc. GLOBAL 2007*, September 9-13, Boise, USA, 550 (2007).
- [33] B. F. Myasoedov, M. K. Chutova, I. V. Smirov, and A. Y. Shadrin, "Isolation of actinides and separation from rare earth elements and selected fission products by bidentate neutral organophosphrous compound", *Proc. GLOBAL 1993,* September 12-17, Seattle Washington USA, 581 (1993).
- [34] Y. Zhu and R. Jiao, "Chinese experience on the removal of actinide from highly active waste by trialkyl phosphine oxide extraction", *ibid.*, 44 (1993).
- [35] T. Inoue, M. Sakata, H. Miyashiro, T. Matsumoto, A. Sasahara, and N. Yoshiki, "Development of partitioning and transmutation technology for long-lived nuclides", *Nucl. Technol.*, **93**, 206 (1991).
- [36] C. L. Krueger, T. S. Storvick, J. J. Roy, L. F. Grantham, L. R. MaCoy, T. Inoue, H. Miyashiro, and N. Takahashi, "Measurement of the standard potential of the Np(III)/Np(0) couple in LiCl-KCl eutectic", J. Electrochem. Soc., 138, 4, 1186 (1991).
- [37] J. J. Roy, L. F. Grantham, L. R. MaCoy, C. L. Krueger, T. S. Storvick, T. Inoue, H. Miyashiro, and N. Takahashi, "Standard potentials of lanthanide and actinide trichlorides in molten eutectic LiCl-KCl electrolyte", *Materials Science Forum*, 73-75, 547 (1991).
- [38] D. L. Grimmett, J. J. Roy, L. F. Grantham, C. L. Krueger, T. S. Storvick, P. R. Sharp, D. A. Sorrel, J. W. Cooper, T. Inoue, Y. Sakamura, and N. Takahashi, "Cyclic voltammetry of lanthanide and actinide chlorides in LiCl-KCl eutectic", *Proc. Electrochem. Soc.*, Honolulu, Hawaii, USA (1993).
- [39] J. J. Roy, L. F. Grantham, D. L. Grimmett, S. P. Fusselman, C. L. Krueger, T. S. Storvick, T. Inoue, Y. Sakamura, and N. Takahashi, "Thermodynamic properties of U, Np, Pu, and Am in molten LiCl-KCl eutectic and liquid cadmium", J. Electrochem. Soc., 143, 8, 2487 (1996).
- [40] S. P. Fusselman, J. J. Roy, D. L. Grimmett, L. F. Grantham, C. L. Krueger, C. R. Nabelek, T. S. Storvick, T. Inoue, T. Hijikata, K. Kinoshita, Y. Sakamura, K. Uozumi, T. Kawai, and N. Takahashi, "Thermodynamic properties for rare earths

and americium in pyropartitioning process solvents", *J. Electrochem. Soc.*, **146**, 7, 2573 (1999).

- [41] Y. Sakamura, O. Shirai, T. Iwai, and Y. Suzuki, "Thermodynamics of neptunium in LiCl-KCl eutectic / liquid bismuth systems", J. Electrochem. Soc., 147, 2, 642 (2000).
- [42] Y. Sakamura, T. Inoue, T. S. Storvick, and L. F. Grantham, "Development of pyropartitioning process separation of transuranium elements from rare elements in molten chlorides solution: electrorefining experiments and estimation by using the thermodynamic properties", *Proc. GLOBAL 1995*, September 11-14, 2, Versailles, France, 1185 (1995).
- [43] D. L. Grimmett, S. P. Fusselman, J. J. Roy, R. L. Gay, C. L. Krueger, T. S. Storvick, T. Inoue, T. Hijikata, and N. Takahashi, "Separation of actinides from lanthanides utilizing molten salt electrorefining", *Proc. Light Metals 1996*, ed. by Wayne Hale Minerals, Metals & Materials Society, 1215 (1996).
- [44] Y. Sakamura, T. Hijikata, K. Kinoshita, T. Inoue, T. S. Storvick, C. L. Krueger, L. F. Grantham, S. P. Fusselman, D. L. Grimmett, and J. J. Roy, "Separation of actinides from rare earth elements by electrorefining in LiCl-KCl eutectic salt", J. Nucl. Sci. Technol., 35, 1, 49 (1998).
- [45] Y. Sakamura, T. Hijikata, K. Kinoshita, T. Inoue, T. S. Storvick, C. L. Krueger, J. J. Roy, D. L. Grimmett, S. P. Fusselman, and R. L. Gay, "Measurement of standard potentials of actinides (U, Np, Pu, Am) in LiCl–KCl eutectic salt and separation of actinides from rare earths by electrorefining", J. Alloys. Compd., 271-273, 592 (1998).
- [46] T. Kato, Y. Sakamura, and T. Inoue, "Development of pyrometallurgical partitioning technology for TRU in high level radioactive wastes –recovery of rare-earth elements from molten salt by reductive extraction and electrorefining–", *Proc. GLOBAL 1997*, October 5-10, 2, Yokohama, Japan, 806 (1997).
- [47] M. Sakata, M. Kurata, T. Hijikata, and T. Inoue, "Equilibrium distribution of rare earth elements between molten KCl–LiCl eutectic salt and liquid cadmium", J. Nucl. Mater., 185, 56 (1991).
- [48] T. Koyama, T. R. Johnson, and D. F. Fischer, "Distribution of actinides in molten salt / cadmium metal system", J. Alloys. Compd., 189, 37 (1992).
- [49] M. Kurata, Y. Sakamura, and T. Inoue, "Pyrometallurgical partitioning of minor actinides and lanthanides in LiCl-KCl eutectic molten salt / liquid metal system", *Proc. 3rd International Information Exchange Meeting on Actinide and Fission Product Partitioning and Transmutation 1994*, December 12-14, Cadarache, France (1994).

- [50] K. Kinoshita, M. Kurata, K. Uozumi, and T. Inoue, "Estimation of material balance in pyrometallurgical partitioning process for TRUs from HLLW", 5th International Information Exchange Meeting on Actinide and Fission Product Partitioning and Transmutation, Mol, Belgium, OECD/NEA (1998).
- [51] K. Kinoshita, M. Kurata, and T. Inoue, "Estimation of material balance in pyrometallurgical partitioning process of transuranic elements from high-level liquid waste", J. Nucl. Sci. Technol., 37, 1, 75 (2000).
- [52] M. Kurata, Y. Sakamura, "Thermodynamic assessment of actinide-Cd or Bi systems", J. Nucl. Sci. Technol., Supplement 3 (Proc. Actinide 2001), 607 (2002).
- [53] K. Kinoshita, T. Inoue, S. P. Fusselman, R. L. Gay, C. L. Krueger, T. S. Storvick, and N. Takahashi, "Separation of TRUS from rare earth elements by multistage extraction in LiCl-KCl/Bi System", *Proc. GLOBAL 1997*,. October 5-10, 2, Yokohama, Japan, 820 (1997).
- [54] K. Kinoshita, T. Inoue, S. P. Fusselman, D. L. Grimmett, J. J. Roy, R. L. Gay, C. L. Krueger, C. R. Nabelek, and T. S. Storvick, "Electrorefining experiments to recover uranium with a cadmium-lithium anode and their theoretical evaluation", *J. Nucl. Sci. Technol.*, **36**, 3, 288 (1999).
- [55] K. Uozumi, K. Kinoshita, T. Inoue, S. P. Fusselman, D. L. Grimmett, J. J. Roy, T. S. Storvick, C. L. Krueger, and C. R. Nabelek, "Pyrometallurgical partitioning of uranium and transuranic elements from rare earth elements by electrorefining and reductive extraction", J. Nucl. Sci. Technol., 38, 1, 36 (2001).
- [56] J. Uhliř, "Progress in R&D on pyrochemical partitioning technology in the Czech Republic", Proc. 12th Information Exchange Meeting on Partitioning and Transmutation 2012, September 24-27, Prague, Czech Republic, OECD/NEA, 46 (2013).
- [57] 金属燃料サイクル技術研究専門委員会, "金属燃料サイクル技術ーその現状と将来の 見通し-", 日本原子力学会 (1995).
- [58] L. Buiron, B. Fontaine, and M. Pelletier, "Transmutation abilities of a 3600 MWth SFR core", *Proc. GLOBAL 2011*, December 11-16, Makuhari, Japan, 357351 (2011).
- [59] 高野秀機, "高レベル廃棄物処分としての加速器駆動核変換技術の現状と展望", RST ニュース, 35, 2 (2003).
- [60] 分離核変換工学専門委員会, "総説分離変換工学", 日本原子力学会, (2004).
- [61] IAEA, "Implications of partitioning and transmutation in radioactive waste management", *Technical Report Series No. 430*, Vienna, Austria (2004).
- [62] 日本原子力委員会, "分離変換技術に関する研究開発の現状と今後の進め方", 平成 21 年4月(2009).

- [63] 井上 正, 倉田正輝, 坂村義治, 土方孝敏, 木下賢介, 魚住浩一, 加藤徹也, "超ウラン 元素の乾式分離技術の開発-分離プロセスの改良と実証-", 電力中央研究所総合報 告, T57 (1998).
- [64] K. Uozumi, M. Iizuka, M. Kurata, T. Inoue, T. Koyama, M. Ougier, R. Malmbeck, and J.-P. Glatz, "Demonstration of pyropartitioning process to recover TRUs from genuine high-level liquid waste", *Proc. GLOBAL 2009*, September 6-11, Paris, France, 9086 (2009).
- [65] M. Kurata, K. Kinoshita, T. Hijikata, and T. Inoue, "Conversion of simulated high-level liquid waste to chloride for the pretreatment of pyrometallurgical partitioning process", J. Nucl. Sci. Technol., 37, 682 (2000).
- [66] T. Hijikata, M. Kurata, and T. Inoue, "Low temperature chlorination of lanthanide oxide by using molybdenum chloride", *CIMTEC 2000, Mass and Charge Transport in Inorganic Materials*, Lido di Jesolo, Venice, Italy 1395 (2000).
- [67] OECD/NEA, "Pyrochemical separations in nuclear applications", A Status Report, No. 5427 (2004).
- [68] Y. I. Chang, "The integral fast reactor", Nucl. Technol., 88, 129 (1989).
- [69] C. E. Stevenson, "The EBR-II fuel cycle story", La Grange Park, IL, American Nuclear Society (1987).
- [70] K. M. Goff, R. W. Benedict, K. L. Howen, G. M. Teske, and T. A. Johnson, "Pyrochemical treatment of spent nuclear fuel", *Proc. GLOBAL 2005*, October 9-13, Tsukuba, Japan, 364 (2005).
- [71] R. W. Benedict, C. Solbrig, B. Westphal, T. A. Johnson, S. X. Li, K. Marsden, and K. M. Goff, "Pyroprocessing progress at Idaho National Laboratory", *Proc. GLOBAL 2007*, September 9-13, Boise, USA, 741 (2007).
- [72] K. M. Goff and M. F. Simpson, "Dry processing of used nuclear fuel", Proc. GLOBAL 2009, September 6-11, Paris, France, 9516 (2009).
- [73] M. Simpson, "Developments of spent nuclear fuel pyroprocessing technology at Idaho National Laboratory", INL/EXT-12-25124 (2012).
- [74] National Research Council, "Electrometallurgical techniques for DOE spent fuel treatment: final report", National Academy Press, Washington DC (2000).
- [75] 小山正史,尾形孝成,"変化する将来に柔軟に対応するリサイクルオプション乾式サイ クル技術・金属燃料 FBR",シリーズ解説 21,日本原子力学会誌,52,28 (2010).
- [76] T. Inoue, "Actinide recycling by pyro-process with metal fuel FBR", Prog. Nucl. Energy, 40, 3-4. 547 (2002).
- [77] T. Koyama, Y. Sakamura, T. Ogata, and H. Kobayashi, "Pyroprocess and metal fuel development for closing actinide fuel cycle with reduced waste burden", *Proc. GLOBAL 2009*, September 6-11, Paris, France, 9247 (2009).
- [78] T. Koyama, T. Ogata, M. Myochin, and Y. Arai, "Japanese programs in development of pyro-processing fuel cycle technology for sustainable energy

supply with reduced burdens", *Proc. GLOBAL 2011*, December 11-16, Makuhari, Japan, Pa-II-3 (2011).

- [79] T. Koyama, K. Kinoshita, T. Inoue, M. Ougier, J-P. Glatz, and L. Koch, "Study of electrorefining of U–Pu–Zr alloy fuel", J. Nucl. Sci. Technol., Supplement 3 (Proc. Actinide 2001), 765 (2002).
- [80] T. Koyama, K. Kinoshita, T. Hijikata, T. Inoue, M. Ougier, R. Malmbeck, J.-P. Glatz, and L. Koch, "Demonstration of pyrometallurgical processing for metal fuel and HLW", *Proc. GLOBAL 2001*, September 8-11, Paris, France, 170 (2001).
- [81] K. Kinoshita, T. Koyama, T. Inoue, M. Ougier, and J.-P. Glatz, "Separation of actinides from rare earth elements by means of molten salt electrorefining with anodic dissolution of U-Pu-Zr alloy fuel", *J. Phys. Chem. Solids*, 66, 619 (2005).
- [82] M. Kurata, T. Inoue, J. Serp, M. Ougier, and J.-P. Glatz, "Electrochemical reduction of MOX in LiCl", J. Nucl. Mater., 328, 97 (2004).
- [83] M. Iizuka, T. Inoue, M. Ougier, and J. P. Glatz, "Electrochemical reduction of (U, Pu)O₂ in molten LiCl and CaCl₂ electrolytes", *J. Nucl. Sci. Technol.*, 44, 5, 801 (2007).
- [84] Y. Sakamura, T. Inoue, O. Shirai, T. Iwai, Y. Arai, and Y. Suzuki, "Studies on pyrochemical reprocessing for metallic and nitride fuels: behavior of transuranium elements in LiCl-KCl/liquid metal systems", *Proc. GLOBAL 1999*, August 29-September 3, Jackson Hole, Idaho, USA (1999).
- [85] M. Iizuka, K. Uozumi, T. Inoue, T. Iwai, O. Shirai, and Y. Arai, "Behavior of plutonium and americium at liquid cadmium cathode in molten LiCl-KCl electrolyte", J. Nucl. Mater., 299, 32 (2001).
- [86] O. Shirai, K. Uozumi, T. Iwai, and Y. Arai, "Recovery of U by electrolysis of UN in LiCl–KCl eutectic melts", J. Nucl. Sci. Technol., Supplement 3 (Proc of Actinide 2001), 745 (2002).
- [87] T. Kato, K. Uozumi, T. Inoue, O. Shirai, T. Iwai, and Y. Arai, "Recovery of plutonium and uranium into liquid cadmium cathodes at high current densities", *Proc. GLOBAL2003*, November 16-20, New Orleans, USA, 1591 (2003).
- [88] K. Uozumi, M. Iizuka, T. Kato, T. Inoue, O. Shirai, T. Iwai, and Y. Arai, "Electrochemical behaviors of uranium and plutonium at simultaneous recoveries into liquid cadmium cathodes", J. Nucl. Mater., 325, 2, 34 (2004).
- [89] O. Shirai, K. Uozumi, T. Iwai, and Y. Arai, "Electrode reaction of the Np³⁺/Np couple at liquid Cd and Bi electrode in LiCl-KCl eutectic melts", J. Appl. Electrochem., 34, 32, (2004).
- [90] O. Shirai, T. Kato, T. Iwai, Y. Arai, and T. Yamashita, "Electrochemical behaviors of PuN and (U, Pu)N in LiCl-KCl eutectic melts", J. Phys. Chem. Solids, 66, 456 (2005).

- [91] Y. Sakamura, T. Inoue, T. Iwai, and H. Moriyama, "Chlorination of UO₂, PuO₂ and rare earth oxides using ZrCl₄ in LiCl–KCl eutectic melt", *J. Nucl. Mater.*, **340**, 39 (2005).
- [92] T. Kato, M. Iizuka, T. Inoue, T. Iwai, and Y. Arai, "Distillation of cadmium from uranium-plutonium-cadmium alloy", J. Nucl. Mater., 340, 219 (2005).
- [93] T. Hijikata, T. Koyama, T. Usami, S. Kitawaki, T. Shinozaki, and T. Kobayashi, "Integrated experiments to demonstrate electrometallurgical pyroprocess of metal and oxide fuel", *Proc. GLOBAL2003*, November 16-20, New Orleans, LA, USA, 763 (2003).
- [94] S. Kitawaki, T. Shinozaki, M. Fukushima, T. Hijikata, T. Usami, T. Koyama, "Recovery test of metal product from oxide fuel by electrometallurgical pyroprocess", *Proc. GLOBAL2005*, October 9-13, Tsukuba, Japan, 395 (2005).
- [95] T. Koyama, T. Hijikata, T. Usami, T. Inoue, S. Kitawaki, T. Shinozaki, M. Fukushima, and M. Myochin, "Integrated experiments of electrometallurgical pyroprocessing using plutonium oxide", *J. Nucl. Sci. Technol.*, 44, 382 (2007).
- [96] S. Kitawaki, M. Fukushima, N. Yahagi, and M. Kurata, "Mass balance and separation factor of actinides through series process test on pyroproccess", *Proc. Gobal 2007*, September 9-13, Boise, Idaho, USA, 165 (2007).
- [97] S. Kitawaki, T. Shinozaki, M. Fukushima, T. Usami, N. Yahagi, and M. Kurata, "Recovery of U-Pu alloy from MOX using a pyroprocess series", *Nucl. Technol.*, 162, 118 (2008).
- [98] M. Kurata, N. Yahagi, S. Kitawaki, A. Nakayoshi, and M. Fukushima, "Electrochemical reduction of MOX pellets in molten lithium chloride based on a practical operating condition", *Nucl. Technol.*, **164**, 433 (2008).
- [99] M. Kurata, N. Yahagi, S. Kitawaki, A. Nakayoshi, and M. Fukushima, "Sequential electrolysis of U-Pu alloy containing a small amount of Am to recover U- and U-Pu-Am-products", J. Nucl. Sci. Technol., 46, 2, 175 (2009).
- [100] M. Kurata, T. Murakami, S. Kitawaki, A. Nakayoshi, and M. Fukushima, "Sequential electrolysis in a LiCl-KCl-(U, Pu, Am)Cl₃ molten salt bath, simulating practical operation conditions", *Proc. NuMat2010*, ZKM, Karlsruhe, Germany (2010).
- [101] T. Murakami, Y. Sakamura, N. Akiyama, S. Kitawaki, A. Nakayoshi, and M. Fukushima, "Anodic behaviour of a metallic U–Pu–Zr alloy during electrorefining process", J. Nucl. Mater., 414, 194 (2011).
- [102] T. Murakami, Y. Sakamura, N. Akiyama, S. Kitawaki, A. Nakayoshi, and M. Fukushima, "Electrochemical measurement of diffusion coefficient of U in liquid Cd", *Proc. Molten Salt Chemistry and Technology MS9*, June 5-9, Trondheim, Norway (2011).

- [103] USDOE, TOPS Task Force of the Nuclear Energy Research Advisory Committee (NERAC), "Technological opportunities to increase the proliferation resistance of global civilian nuclear power systems", January (2001).
- [104] 日本原子力研究開発機構 次世代原子力システム研究開発部門 FBR 燃料サイクルユニット FBR サイクル総括ユニット "高速増殖炉サイクルの実用化戦略研究 フェーズⅡ技術検討書 (2)燃料サイクルシステム", JAEA-Research 2006-043 (2006).
- [105] 高橋啓三, "再処理技術の誕生から現在に至るまでの解析および考察",日本原子力学 会和文論文誌, 5, 2, 152 (2006).
- [106] J. J. Laidler, "Advanced spent fuel processing technologies for the united states GNEP programs", Proc. 9th Information Exchange Meeting on Partitioning and Transmutation 2006, September 25-29, Nimes, France, OECD/NEA, 156 (2006).
- [107] H. Lee, J. Hur, D. Ahn, I. Kim, and J. Lee, "Development of pyroprocessing technology at KAERI", Proc. GLOBAL2009, September 6-11, Paris, France, 9144 (2009).
- [108] K. V. Govindan, P. R. Vasudeva, and R. Baldev, "Current status of the development of the fast reactor fuel cycle in India", *Proc. GLOBAL2009*, September 6-11, Paris, France, 9547 (2009).
- [109] B. D. Craig and D. S. Anderson, "Handbooks of Corrosion Data" ASM International, Metals Park, OH (1983).
- [110] T. Koyama, M. Iizuka, Y. Shoji, R. Fujita, H. Tanaka, T. Kobayashi, and M. Tokiwai, "An experimental study of molten salt electrorefining of uranium using solid iron cathode and liquid cadmium cathode for development of pyrometallurgical reprocessing", J. Nucl. Sci. Technol., 34, 384 (1997).
- [111] M. Iizuka, T. Koyama, N. Kondo, R. Fujita, and H. Tanaka, "Actinides recovery from molten salt/liquid metal system by electrochemical method", *J. Nucl. Mater.*, 247, 183 (1997).
- [112] I. J. Karassik, W. C. Krutzsch, W. H. Fraser, and J. P. Messina, "Pump handbook", MacGraw-Hill Inc., New York (1976).
- [113] W. R. Huntley and M. D. Silverman, "System design description of forcedconvection molten-salt corrosion loops MSR-FCL-3 and MSR-FCL-4", No. ORNL/TM-5540 (1976).
- [114] J. E. Pacheco, S. Shower, and W. J. Kolb, "Development of a molten-salt thermocline thermal storage system through plants", *Proc. Solar Forum 2001*, April 21-25, Washington DC, USA (2001).
- [115] D. L. Barth, J. E. Pacheco, W. J. Kolb, and E. E. Rush, "Development of a high-temperature, long-shafted, molten-salt pump for power tower applications", *J. Sol. Energy Eng.*, 124, 170 (2002).
- [116] E. E. Rush, J. M. Chavez, and C. W. Matthews, "An interim report on testing the molten salt pump and valve loops", SAND-89-2964 (1990).

- [117] G. H. Egger and J. R. Schuster, "Solar molten salt heat transfer loop final report", GA-A-1573 (1981).
- [118] E. L. Carls, R. J. Blaskovitz, T. R. Johnson, and T. Ogata, "Tests of prototype salt stripper system for IFR fuel cycle", *Proc. GLOBAL1993*, September 12-17, Seattle, USA (1993).
- [119] B. Hanson, P. Hopins, and N. Donaldson, "Pyrochemistry: a program for industrialization", *Proc. GLOBAL2003*, November 16-20, New Orleans, USA (2003).
- [120] H. Hashimoto, K. Amagai, Y. Hosono, and M. Takahashi, "Evaluation of molten-salt flow rate measurement", *Modern Techniques and Measurement in Fluid Flow*, Academic Press, 418 (1989).
- [121] H. Hashimoto, K. Anagai, H. Hiyama, and K. Yamamoto, "Design and performance of simplified test loop for molten-salt flow" *Proc. 7th Int. Symp. Molten Salts*, The Electrochem. Soc., 671 (1990).
- [122] 溶融塩・熱技術研究会, "溶融塩・熱技術の基礎", アグネ技術センター (1993).
- [123] 橋本弘之, 佐藤六郎, 檜山浩国, "垂直振動管による揚液効果に関する研究", 日本機械 学会論文集 B, 53, 491, 2041 (1987).
- [124] 橋本弘之,渡辺英夫,庵原昭夫,森山貴幸,桧山浩国,天谷啓児,"空気アクチュエー タ駆動による高温融体用ポンプの試作",日本機械学会論文集 B, 60, 579, 318 (1994).
- [125] 渡辺英夫,橋本弘之,片岡一成,湯 白敏,"溶融塩振動ポンプの高温性能向上",日本 機械学会論文集 B, 62, 602, 3649 (1996).
- [126] T. Hijikata and M. Kurata, "Novel chlorination of zirconium dioxide at low temperature, *Electrochemistry*", 77, 702 (2009).
- [127] T. Hijikata, M. Sakata, H. Miyashiro, K. Kinoshita, T. Higashi, and T. Tamai, "Development of pyrometallurgical partitioning of actinides from high level radioactive waste using a reductive extraction step", *Nucl. Technol.*, **115**, 114 (1996).
- [128] T. Hijikata, T. Koyama, T. Usami, S. Kitawaki, T. Shinozaki, and M. Fukushima, "Recovery of uranium and plutonium metals through cathode processing of electrodeposits from reduced oxide fuel anodes", The Royal Society of Chemistry 'Recent Advances in Actinide Science', 650 (2006).
- [129] T. Hijikata and T. Koyama, "Development of high temperature molten salt transport technology for pyrometallurgical reprocessing", J. Power Energy Syst., 3, 170 (2009).
- [130] T. Hijikata and T. Koyama, "Development of high temperature transport technologies for liquid cadmium in pyrometallurgical reprocessing", J. Eng. Gas Turbines Power, 141, 042902/1 (2009).
- [131] T. Hijikata and T. Koyama, "Development of high-temperature transport technologies of molten salt slurry in pyrometallurgical reprocessing", J. Power Energy Syst., 4, 202 (2010).
- [132] T. Hijikata, T. Murakami, and T. Koyama, "Development of high-temperature transport technologies for liquid Cd cathode of pyro-reprocessing", Proc. FR 09, December 7-11, Kyoto, Japan, (2009).

第2章 アクチノイド酸化物から塩化物への低温変換

2-1 背景:アクチノイド酸化物から塩化物への転換

使用済の酸化物核燃料を湿式再処理して U と Pu を取り出すと、長半減期核種の MA (Minor actinoid: Np、Am、Cm)を含む高レベル廃液が残る。現行の計画では、この廃液成 分をホウ珪酸ガラスの固化体として深地層に廃棄処分することになっている。電中研では 将来の技術として、高レベル廃液中の MA を溶融塩と液体金属を用いる乾式法で分離・回 収し、高速増殖炉用の金属核燃料に混合して MA をより短半減期の核種に変換し、核燃料 サイクル内に閉じ込めることを提案している[1]。

Fig. 1-9 に示した乾式分離プロセスでは、硝酸溶液である高レベル廃液を加熱して MA の 酸化物にまず転換する(核燃料再処理の分野では、脱硝工程と呼ばれている)。塩化物溶融 塩(LiCl-KCl 系共晶塩)中での還元・抽出工程へ移す前に、MA 酸化物を塩化物に変える 必要があり(核燃料再処理の分野では、塩素化工程と呼ばれている)、塩素と炭素を用いる 溶融塩中での塩化物転換がこれまで検討されてきた[2-3]。

高レベル廃液の脱硝で得られる MA の混合酸化物を模擬した固体試料を、973 K の溶融 LiCl-KCl 系共晶溶融塩中に入れ、そこに炭素チューブから Cl₂ ガスを吹き込めば、塩化物 に転換できることが知られている[2]。しかし 973 K の高温では、蒸気圧の比較的高いモリ ブデン塩化物やジルコニウム塩化物などが蒸発するため、それらの回収も必要となる[2]。

また、高レベル実廃液から得た酸化物を対象とした ITU における試験でも、グラファイ トるつぼ内の溶融塩に脱硝酸化物を投入して 923 K の Cl₂ ガス雰囲気に曝すことで、MA 塩 化物に転換できた[3]。これらの報告から、炭素と Cl₂を用いる溶融塩中での高温(923~973 K)反応によって、高レベル廃液からの脱硝酸化物を塩化物に転換できる(反応時間は 10 ~32 時間程度)ことが示された。

一方、高温の Cl₂ 雰囲気中における金属材料の腐食が懸念されている。Fig. 2-1 のように、 mm・year⁻¹ 単位で表記した各種金属表面の後退速度は、Cl₂中で高温になるほど上昇する。 許容上限の腐食速度は、容器(赤実線)で 0.76 mm・year⁻¹、配管系(赤点線)で 0.50 mm・ year⁻¹ とされているため[4]、高耐食性の Ni 系材料を使用した装置内において 773 K 以下 で塩化物転換することが要求される。

MA 塩化物への転換法として、これとは別の化学反応も利用できる。たとえば四塩化ジル コニウム(ZrCl4)との以下の反応を利用して、773 Kの LiCl-KCl 共晶系溶融塩中で二酸化ウ ラン(UO₂)や二酸化プルトニウム(PuO₂)を塩化物に転換した報告例がある[5]。

 $UO_2 + (3/4)ZrCl_4 + (1/4)Zr \rightarrow UCl_3 + ZrO_2$ (2-1)

 $PuO_2 + (3/4)ZrCl_4 + (1/4)Zr \rightarrow PuCl_3 + ZrO_2$ (2-2)



Fig. 2-1 Corrosion rate of various metals in chlorine gas. Data taken from [4].



Fig. 2-2 Vapor pressures of various Mo-O-Cl compounds compared with actinoid chlorides. Data taken from [6-9].

しかしこの反応では、ZrCl4から副生する二酸化ジルコニウム(ZrO2)と主生成物であるア クチノイド塩化物との分離が容易ではない。Fig. 2-2 に関係する化合物群の蒸気圧曲線[6-9] を示すが、ZrCl4 とほぼ同等の蒸気圧をもつ五塩化モリブデン(MoCl5)も、塩化物転換剤と しての利用が見込める。さらに、モリブデンオキシクロライド(MoO2Cl2)が副生する反応条 件を確立できれば、その蒸気圧がアクチノイド塩化物より高いため、蒸留法で主生成物・ 副生成物を容易に分離できる。以上のことから、MoCl5を用いる MA 酸化物から塩化物へ の転換を検討した。

本研究では、転換対象酸化物を模擬する物質として、アクチノイド酸化物より反応の進行が困難な ZrO₂をあえて選び、MoCl₅との反応でこれを ZrCl₄に転換する過程を調べた。 さらに、反応後における目的塩化物の単離にも注目して、PuCl₃と同程度の蒸気圧をもつ塩 化ネオジム(NdCl₃)が主生成物となる反応系を選び、生成系に混入する Mo 副生物の揮発除 去について検討した[10]。

2-2 塩化物への転換反応に関する熱力学的検討

まず予備的調査として、MoCl₅を利用した各酸化物の塩化物転換反応や副生 Mo 種を MoCl₅に再生する化学反応に対して、標準ギブズ自由エネルギー変化 ΔG を検討した。各化 学種の標準生成ギブズ自由エネルギーをもとに、熱力学データベース Malt-2 [11]で算出さ れた各化学反応の 500 K での ΔG_{500} °を、Table 2-1~2-5 にまとめた。これらの値から反応 進行の可能性を判定した。

Table 2-1 Standard Gibbs free energy changes of various reactions in the UO_2 -MoCl₅ system at 500 K. Data taken from [11].

No.	Reactions	ΔG_{500} °/ kJ·mol ⁻¹
U-1	$UO_2[s] + (2/5)M_0Cl_5[l] = UOCl_2[s] + (1/5)M_0O_2[s] + (1/5)M_0O_3[s]$	-32.5
U-2	$UO_2[s] + (2/5)MoCl_5[g] = UOCl_2[s] + (1/5)MoO_2[s] + (1/5)MoO_3[s]$	-40.5
U-3	$UO_2[s] + (1/2)M_0Cl_5[l] = UOCl_2[s] + (1/5)M_0O_2[s] + (1/4)M_0O_2Cl_2[g]$	-42.0
U-4	$UO_2[s] + (1/2)MoCl_5[g] = UOCl_2[s] + (1/5)MoO_2[s] + (1/4)MoO_2Cl_2[g]$	-52.0
U-5	$UO_2[s] + MoCl_5[l] = UOCl_2[s] + (1/2)MoCl_4[s] + (1/2)MoO_2Cl_2[g]]$	-61.3
U-6	$UO_2[s] + MoCl_5[g] = UOCl_2[s] + (1/2)MoCl_4[s] + (1/2)MoO_2Cl_2[g]$	-81.4
U-7	$UOCl_2[s] + (2/5)M_0Cl_5[l] = UCl_4[s] + (1/5)M_0O_2[s] + (1/5)M_0O_3[s]$	-7.3
U-8	$UOCl_2[s] + (2/5)MoCl_5[g] = UCl_4[s] + (1/5)MoO_2[s] + (1/5)MoO_3[s]$	-1.3
U-9	$UOCl_{2}[s] + (1/2)M_{0}Cl_{5}[l] = UCl_{4}[s] + (1/4)M_{0}O_{2}[s] + (1/4)M_{0}O_{2}Cl_{2}[g]$	-10.8
U-10	$UOCl_2[s] + (1/2)M_0Cl_5[g] = UCl_4[s] + (1/4)M_0O_2[s] + (1/4)M_0O_2Cl_2[g]$	-20.8
U-11	$UOCl_2[s] + MoCl_5[l] = UCl_4[s] + (1/2)MoCl_4[s] + (1/2)MoO_2Cl_2[g]$	-30.1
U-12	$UOCl_2[s] + MoCl_5[g] = UCl_4[s] + (1/2)MoCl_4[s] + (1/2)MoO_2Cl_2[g]$	-50.1
U-13	$UO_2[s] + (4/5)MoCl_5[l] = UCl_4[s] + (2/5)MoO_2[s] + (2/5)MoO_3[s]$	-33.8
U-14	$UO_2[s] + (4/5)MoCl_5[g] = UCl_4[s] + (2/5)MoO_2[s] + (2/5)MoO_3[s]$	-49.8
U-15	$UO_2[s] + MoCl_5[l] = UCl_4[s] + (1/2)MoO_2[s] + (1/2)MoO_2Cl_2[g]$	-52.7
U-16	$UO_2[s] + MoCl_5[g] = UCl_4[s] + (1/2)MoO_2[s] + (1/2)MoO_2Cl_2[g]$	-72.8
U-17	$UO_{2}[s] + 2MoCl_{5}[l] = UCl_{4}[s] + MoCl_{4}[s] + MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-91.4
U-18	$UO_2[s] + 2MoCl_5[g] = UCl_4[s] + MoCl_4[s] + MoO_2Cl_2[g]$	-131.5

[s]: solid state, [l]: liquid state, [g]: gas state

No.	Reactions	ΔG_{500} °/ kJ \cdot mol $^{-1}$
Np-1	$NpO_{2}[s] + (2/5)MoCl_{5}[l] = NpOCl_{2}[s] + (1/5)MoO_{2}[s] + (1/5)MoO_{3}[s]$	-48.8
Np-2	$NpO_{2}[s] + (2/5)MoCl_{5}[g] = NpOCl_{2}[s] + (1/5)MoO_{2}[s] + (1/5)MoO_{3}[s]$	-56.8
Np-3	$NpO_{2}[s] + (1/2)MoCl_{5}[l] = NpOCl_{2}[s] + (1/5)MoO_{2}[s] + (1/4)MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-58.3
Np-4	$NpO_{2}[s] + (1/2)MoCl_{5}[g] = NpOCl_{2}[s] + (1/5)MoO_{2}[s] + (1/4)MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-68.3
Np-5	$NpO_{2}[s] + MoCl_{5}[l] = NpOCl_{2}[s] + (1/2)MoCl_{4}[s] + (1/2)MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-77.6
Np-6	$NpO_{2}[s] + MoCl_{5}[g] = NpOCl_{2}[s] + (1/2)MoCl_{4}[s] + (1/2)MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-97.7
Np-7	$NpOCl_{2}[s] + (2/5)MoCl_{5}[l] = NpCl_{4}[s] + (1/5)MoO_{2}[s] + (1/5)MoO_{3}[s]$	-6.0
Np-8	$NpOCl_{2}[s] + (2/5)MoCl_{5}[g] = NpCl_{4}[s] + (1/5)MoO_{2}[s] + (1/5)MoO_{3}[s]$	-14.0
Np-9	$NpOCl_2[s] + (1/2)MoCl_5[l] = NpCl_4[s] + (1/4)MoO_2[s] + (1/4)MoO_2Cl_2[g]$	-15.4
Np-10	$NpOCl_{2}[s] + (1/2)MoCl_{5}[g] = NpCl_{4}[s] + (1/4)MoO_{2}[s] + (1/4)MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-25.4
Np-11	$NpOCl_{2}[s] + MoCl_{5}[l] = NpCl_{4}[s] + (1/2)MoCl_{4}[s] + (1/2)MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-34.7
NP-12	$NpOCl_2[s] + MoCl_5[g] = NpCl_4[s] + (1/2)MoCl_4[s] + (1/2)MoO_2Cl_2[g]$	-54.8
Np-13	$NpO_{2}[s] + MoCl_{5}[l] = NpCl_{3}[s] + MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-62.9
Np-14	$NpO_{2}[s] + MoCl_{5}[g] = NpCl_{3}[s] + MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-83.0
Np-15	$NpO_{2}[s] + (4/5)MoCl_{5}[l] = NpCl_{4}[s] + (2/5)MoO_{2}[s] + (2/5)MoO_{3}[s]$	-54.8
Np-16	$NpO_{2}[s] + (4/5)MoCl_{5}[g] = NpCl_{4}[s] + (2/5)MoO_{2}[s] + (2/5)MoO_{3}[s]$	-70.8
Np-17	$NpO_{2}[s] + MoCl_{5}[l] = NpCl_{4}[s] + (1/2)MoO_{2}[s] + (1/2)MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-73.7
Np-18	$NpO_{2}[s] + MoCl_{5}[g] = NpCl_{4}[s] + (1/2)MoO_{2}[s] + (1/2)MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-93.7
Np-19	$NpO_{2}[s] + 2MoCl_{5}[l] = NpCl_{4}[s] + MoCl_{4}[s] + MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-112.4
Np-20	$NpO_{2}[s] + 2MoCl_{5}[g] = NpCl_{4}[s] + MoCl_{4}[s] + MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-152.5

[s]: solid state, [l]: liquid state, [g]: gas state

Table 2-3 Standard Gibbs free energy changes of various reactions in the PuO_2 -MoCl₅ system at 500 K. Data taken from [11].

No.	Reactions	ΔG_{500} °/ kJ·mol ⁻¹
Pu-1	$PuO_{2}[s] + (1/3)MoCl_{3}[l] = PuOCl[s] + (1/3)MoO_{3}[s]$	-5.9
Pu-2	$PuO_{2}[s] + (1/3)M_{0}Cl_{3}[g] = PuOCl[s] + (1/3)M_{0}O_{3}[s]$	-49.7
Pu-3	$PuO_{2}[s] + (1/2)M_{0}Cl_{4}[l] = PuOCl[s] + (1/2)M_{0}O_{2}Cl_{2}[g]$	+2.1
Pu-4	$PuO_{2}[s] + (1/2)M_{0}Cl_{4}[g] = PuOCl[s] + (1/2)M_{0}O_{2}ClO_{2}[g]$	-13.6
Pu-5	$PuOCl[s] + (2/5)M_0Cl_5[l] = PuCl_3[s] + (1/5)M_0O_2[s] + (1/5)M_0O_3[s]$	-78.4
Pu-6	$PuOCl[s] + (2/5)M_0Cl_5[g] = PuCl_3[s] + (1/5)M_0O_2[s] + (1/5)M_0O_3[s]$	-86.4
Pu-7	$PuOCl[s] + (1/2)M_0Cl_5[l] = PuCl_3[s] + (1/4)M_0O_2[s] + (1/4)M_0O_2Cl_2[g]$	-87.9
Pu-8	$PuOCl[s] + (1/2)MoCl_{5}[g] = PuCl_{3}[s] + (1/4)MoO_{2}[s] + (1/4)MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-97.9
Pu-9	$PuOCl[s] + MoCl_5[l] = PuCl_3[s] + (1/2)MoCl_4[s] + (1/2)MoO_2Cl_2[g]$	-107.2
Pu-10	$PuOCl[s] + MoCl_{5}[g] = PuCl_{3}[s] + (1/2)MoCl_{4}[s] + (1/2)MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-127.3
Pu-11	$(1/2)Pu_2O_3[s] + (3/5)MoCl_5[s] = PuCl_3[s] + (3/10)MoO_2[s] + (3/10)MoIO_3[s]$	-201.4
Pu-12	$(1/2)Pu_2O_3[s] + (3/5)MoCl_5[g] = PuCl_3[s] + (3/10)MoO_2[s] + (3/10)MoIO_3[s]$	-213.4
Pu-13	$(1/2)Pu_2O_3[s] + (3/4)MoCl_5[s] = PuCl_3[s] + (3/8)MoO_2[s] + (3/8)MolO_2Cl_2[s]$	-215.6
Pu-14	$(1/2)Pu_2O_3[s] + (3/4)MoCl_5[g] = PuCl_3[s] + (3/8)MoO_2[s] + (3/8)MolO_2Cl_2[s]$	-230.6
Pu 15	$(1/2)Pu_2O_3[s] + (3/2)M_0Cl_5[s] = PuCl_3[s] + (3/4)M_0Cl_4[s] + (3/4)M_0O_2Cl_2[g]$	-244.6
Pu-16	$(1/2)Pu_2O_3[s] + (3/2)MoCl_5[g] = PuCl_3[s] + (3/4)MoCl_4[s] + (3/4)MoO_2Cl_2[g]$	-274.7
Pu-17	$PuO_{2}[s] + MoCl_{5}[l] = PuCl_{3}[s] + MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-105.1
Pu-18	$PuO_{2}[s] + MoCl_{5}[g] = PuCl_{3}[s] + MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-125.2

 $[\mathbf{s}]$: solid state, $[\mathbf{l}]$: liquid state, $[\mathbf{g}]$: gas state

(1) UO₂- MoCl₅系での化学反応

MoCl₅ と UO₂ 間の反応としては、U-1~U-18 が想定される。UOCl₂ が生成する U-1~U-6 の部分的塩化物化反応およびそれにつづく U-7~U-12 の UCl₄までの塩化物化反応の ΔG_{500} °はすべて負で、二段階での塩化物転換も熱力学的には 500 K で進行可能である。UO₂ から UCl₄が直接生成する U-13~U-18 いずれの反応も ΔG_{500} ° < 0 となるが、U-18 の反応 が自由エネルギー的にもっとも有利である。U-13~U-16 の反応副生物に含まれる MoO₂ の分離は容易でないため、MoCl₄ への反応 (U-17 と U-18) を選択することが望ましいと 判断された。この場合の副生成物である MoO₂Cl₂ や MoCl₄は、UCl₄より蒸気圧が高いの で蒸留で分離できる。

(2) NpO₂- MoCl₅系での化学反応

MoCl₅と NpO₂間の反応としては、Np-1~Np-20 が想定される。UO₂の場合と同様に、 Np-1~Np-6 の部分的塩化物化と Np-7~Np-12 で NpOCl₂から NpCl₄ が生成する反応の ΔG_{500} °はすべて負であり、二段階で NpCl₄ に転換することも可能と判断される。一方、四 塩化ネプツニウム(NpCl₄)を直接生成する Np-15~Np-20 の反応や、三塩化ネプツニウム (NpCl₃)を直接生成する Np-13~Np-14 の反応も ΔG_{500} °<0 負となり、Np-20 の反応で ΔG_{500} °の減少が最多となった。分離困難な MoO₂が副生する Np-15~Np-18 の反応を避け、 MoCl₄ への反応 (Np-19~Np-20) や MoCl₃ への反応 (Np-13~Np-14) を選択することが 望ましいと判断された。この場合の副生成物である MoO₂Cl₂や MoCl₄ は、NpCl₄より蒸気 圧が高いので蒸留で分離できる。

(3) PuO₂-MoCl₅系および(1/2)Pu₂O₃-MoCl₅系での化学反応

MoCl₃、MoCl₄または MoCl₅を用いるプルトニウム酸化物((1/2)Pu₂O₃および PuO₂)の 塩化物転換反応に関しては、Pu-1~Pu-18の反応が想定される。PuOCl までの部分塩化物 化は MoCl₃や MoCl₄でも可能で(Pu-1~Pu-2、Pu-4)、その後 MoCl₅を用いて PuCl₃まで の二段階塩化物転換がこの場合も可能と判断される。一方、MoCl₅を用いる(1/2)Pu₂O₃か ら PuCl₃への直接転換(Pu-11~Pu-16)や PuO₂から PuCl₃への直接転換(Pu-17~Pu-18) も可能で、前者では Pu-16 後者では Pu-18 の ΔG_{500} 。減少が著しい。PuCl₃よりも蒸気圧が 高く分離容易な MoO₂Cl₂や MoCl₄が副生物となるよう、Pu-15~Pu-18 の反応を選択すべ きである。

(4) ZrO₂- MoCl₅ 模擬系での化学反応

 $ZrCl_4$ を用いて UO_2 や PuO_2 の酸化物を塩化物に転換する際、 ZrO_2 が生成する[5]。した がって、Zr-O 間の親和力はアクチノイド-O 間の親和力より大きい。そこで、 $MoCl_5$ を用 いる酸化物から塩化物への転換反応の検討にあたって、アクチノイド酸化物より O を引き 抜きにくい ZrO_2 を模擬物質に選んだ。

MoCl₅ と ZrO₂間には、Zr-1~Zr-10の反応が想定される。このうち Zr-1、Zr-5、Zr-7の 反応はこの温度で進行しない。これら以外の反応では ΔG_{500} < 0 となるが、熱力学的には Zr-10の選択が望まれた。また、主生成物と分離しにくい MoO₂や MoO₃が副生する反応は 選択できない。

No.	Reactions	ΔG_{500} °/ kJ·mol-1
Zr-1	$ZrO_{2}[s] + (4/5)MoCl_{5}[l] = ZrCl_{4}[s] + (2/5)MoO_{2}[s] + (2/5)MoO_{3}[s]$	+14.7
Zr-2	$\rm ZrO_2[s] + (4/5)MoCl_5[g] = ZrCl_4[s] + (2/5)MoO_2[s] + (2/5)MoO_3[s]$	-1.3
Zr-3	$\rm ZrO_2[s] + MoCl_5[l] = ZrCl_4[s] + (1/2)MoO_2[s] + (1/2)MoO_2Cl_2[g]$	-4.2
Zr-4	$\rm ZrO_2[s] + MoCl_5[g] = ZrCl_4[s] + (1/2)MoO_2[s] + (1/2)MoO_2Cl_2[g]$	-24.3
Zr-5	$ZrO_{2}[s] + (4/3)MoCl_{5}[l] = ZrCl_{4}[s] + (1/3)MoCl_{2}[s] + MoO_{2}Cl_{2}[g]$	+4.7
Zr-6	$ZrO_{2}[s] + (4/3)MoCl_{5}[g] = ZrCl_{4}[s] + (1/3)MoCl_{2}[s] + MoO_{2}Cl_{2}[g]$	-22.0
Zr-7	$ZrO_{2}[s] + (3/2)MoCl_{5}[l] = ZrCl_{4}[s] + (1/2)MoCl_{3}[s] + MoO_{2}Cl_{2}[g]$	+2.5
Zr-8	$\rm ZrO_2[s] + (3/2)MoCl_5[g] = ZrCl_4[s] + (1/2)MoCl_3[s] + MoO_2Cl_2[g]$	-24.7
Zr-9	$\mathrm{ZrO}_2[s] + 2\mathrm{MoCl}_5[l] = \mathrm{ZrCl}_4[s] + \mathrm{MoCl}_4[s] + \mathrm{MoO}_2\mathrm{Cl}_2[g]$	-42.9
Zr-10	$\mathrm{ZrO}_2[\mathbf{s}] + 2\mathrm{MoCl}_5[\mathbf{g}] = \mathrm{ZrCl}_4[\mathbf{s}] + \mathrm{MoCl}_4[\mathbf{s}] + \mathrm{MoO}_2\mathrm{Cl}_2[\mathbf{g}]$	-83.0

Table 2-4 Standard Gibbs free energy changes of various reactions in the ZrO_2 -MoCl₅ system at 500 K. Data taken from [11].

[s]: solid state, [l]: liquid state, [g]: gas state

(5) モリブデン副生成物から MoCl₅への再生反応

Table 2-5 Standard Gibbs free energy changes (at 500 K) for the $MoCl_5$ reforming reactions from possible byproducts upon chloride conversion. Data taken from [11].

No.	Reactions	$\Delta G_{\!500}^{\circ}$ / kJ·mol-1
R-1	$MoCl_2[s] + (3/2)Cl_2[g] = MoCl_5[l]$	-144.6
R-2	$MoCl_2[s] + (3/2)Cl_2[g] = MoCl_5[g]$	-124.5
R-3	$MoCl_3[s] + Cl_2[g] = MoCl_5[l]$	-91.8
R-4	$MoCl_3[s] + Cl_2[g] = MoCl_5[g]$	-71.8
R-5	$MoCl_4[s] + (1/2)Cl_2[g] = MoCl_5[l]$	-0.6
R-6	$MoCl_4[s] + (1/2)Cl_2[g] = MoCl_5[l]$	+19.5
R-7	$MoO_2Cl_2[g] + C[s] + (3/2)Cl_2[g] = MoCl_5[l] + CO_2[g]$	-256.3
R-8	$MoO_2Cl_2[g] + C[s] + (3/2)Cl_2[g] = MoCl_5[g] + CO_2[g]$	-157.8
R-9	$MoO_2[s] + C[s] + (5/2)Cl_2[g] = MoCl_5[l] + CO_2[g]$	-177.8
R-10	$MoO_2[s] + C[s] + (5/2)Cl_2[g] = MoCl_5[g] + CO_2[g]$	-236.3
R-11	$MoO_3[s] + (3/2)C[s] + (5/2)Cl_2[g] = MoCl_5[l] + (3/2)CO_2[g]$	-222.4
R-12	$MoO_3[s] + (3/2)C[s] + (5/2)Cl_2[g] = MoCl_5[g] + (3/2)CO_2[g]$	-313.6

[s]: solid state, [l]: liquid state, [g]: gas state

上記(1)~(4)での検討から、MoCl₅によるアクチノイド酸化物から塩化物への転換反応で の副生成物として MoCl₂、MoCl₃、MoCl₄、MoO₂Cl₂、MoO₂および MoO₃が想定される。 炭素や Cl₂ガスを利用してこれらを MoCl₅に再生する反応として、R-1~R-12 が考えられ るが、R-6 の例外を除いて ΔG_{500}° < 0 となり、自発的な進行が期待できる。MoCl₂からの再 生反応は、MoCl₃や MoCl₄からの再生に比べて熱力学的に有利である。また、C + Cl₂を用 いてオキシ塩化物 MoO₂Cl₂を MoCl₅に再生することも、MoO₂や MoO₃の酸化物を MoCl₅ に再生することも可能である。以上の結果、アクチノイド酸化物の塩化物転換で予想されるいずれの Mo 生成物も、MoCl₅に再生可能と熱力学的には判断された。

2-3 ZrO₂から ZrCl₄への転換反応に関する報告例

ジルコニウムの精錬と関連して、 ZrO_2 から $ZrCl_4$ への転換反応は広く研究され、エネル ギーコストや装置コストの低減を図るため、低温での反応速度向上がおもに注目された[12]。 炭素などの還元剤共存下で $ZrO_2 \varepsilon ZrCl_4$ に転換する反応の速度論的研究をはじめ[13-14]、 ZrO_2 [12-15]やジルコン($ZrSiO_2$) [16-17]から $ZrCl_4$ への転換反応が、各種還元剤(炭素、 CO、CCl₄など)の共存下で検討された。

ZrO₂-Cl₂系の直接反応を充分な反応速度で進行させるには、1000 K 以上の高温が必要と されている[13-14]。塩化物への転換温度を下げるには、炭素を利用し、金属酸化物--炭素間 の固体接触を向上させることが有効とされている[13]。また、Cl₂ に代わる塩素源として CCl₄を利用する反応は、650 K 以下でも進行することが報告されている[12]。

2-4 MoCl₅を用いる ZrO₂から ZrCl₄への転換反応

2-4-1 実験方法: MoCl₅を用いる ZrO₂から ZrCl₄への転換反応

2-4-1-1 用いた試薬と試料の調製

MoCl₅とZrO₂の粉末はレアメタリック社から購入した。MoCl₅の純度は99%以上、ZrO₂の純度は99.9%以上が保証された。水分濃度2ppm以下かつ酸素濃度2ppm以下に保ったアルゴンガス雰囲気(以下、アルゴン雰囲気)中において、ZrO₂粉末を573Kで約5時間加熱・脱水した。一方、ZrO₂の焼結体として、YSZ(5wt%イットリア(Y₂O₃)安定化ジルコニア)の球(直径1.5mm)をニッカト社から購入した。X線回折分析の比較試料として、モリブデンオキシクロライド(MoO₂Cl₂)をアルドリッチ社から購入した。

すべての反応実験は、MoCl₅と ZrO₂の混合粉末 200~300 mg をパイレックス管内に真 空封入してから行った。MoCl₅の潮解性が高いため、試薬粉末の混合や充填はすべてアル ゴン雰囲気中で行った。MoCl₅/ZrO₂の反応物モル比 *R*_Fを次式で定義する。

$$R_{\rm F} = \frac{\text{moles of MoCl}_5}{\text{moles of ZrO}_2}$$
(2-3)

2-4-1-2 示差熱分析による反応開始温度の検討

示差熱分析(DTA)に用いた装置の概要を Fig. 2-3 に示す。参照物質は三酸化モリブデン (MoO₃)とした。反応試料を封入したパイレックス管および参照物質を封入したパイレック ス管を Fig. 2-3(b)の輻射式電気炉内に置いた。このとき、各ガラス封管の底部にくぼみを設 け、そこに熱電対(呼称 K)の先端を挿入した(Fig. 2-3(a)参照)。室温と 673 K 間の加熱・ 冷却サイクルを 2 回繰り返し、反応試料と参照物質間の温度差を測定した。昇降温の速度 は 2 K・min⁻¹に設定した。



(a) Cross-section of reaction ampule



(b) Two ampules in DTA furnace

Fig. 2-3 Differential thermal analysis for the ZrO_2 -MoCl₅ system (reference substance: MoO₃) [18 by permission].

2-4-1-3 定温反応実験

 $MoCl_5/ZrO_2$ の反応物モル比 R_F を 0.2~4.0 に設定し、468~781 K 間の一定温度に保っ た電気炉内で反応させた。また、 ZrO_2 の単位面積当たりの反応速度を評価するため、 ZrO_2 粉末の代わりに焼結 ZrO_2 球(厳密には YSZ の焼結球)を対象酸化物とする実験も行った。 このときには、焼結球 2~3 個とともに R_F = 3 程度に相当する量の $MoCl_5$ 粉末をガラス管 に封入した。一連の定温反応の実験条件を Table 2-6 にまとめた。

Table 2-6 Various	reaction	conditions	for	the	ZrO_2 – $MoCl_5$	system	[18	by
permission].								

Run	Form of ZrO_2	$ m MoCl_5/ZrO_2$ molar ratio $R_{ m F}$	Reaction temp. (K)	Reaction time (h)
ZC-1	Powder	0.2, 0.5, 1.5, 2.5, 5.3	468	91
ZC-2	Powder	0.2, 0.4, 0.6, 1.2, 2, 3, 2.8, 4.1	571	17
ZC-3	Powder	0.1, 0.5, 0.6, 2.0, 2.6, 3.7	685	21
ZC-4	Powder	0.05, 0.15, 0.3, 0.4, 1.0, 1.1 1.9, 3.0 3.5	781	20
ZC-5	Powder	2.6	473	0.5, 1.0, 2.0, 7.7, 91
ZC-6	Powder	2.6	561	0.5, 2.2, 3.9, 7.8, 24
ZC-7	Powder	2.6	668	0.5, 1.0, 4.0, 7.6, 24
ZC-8	Powder	2.6	773	0.5, 1.0, 2.0, 4.2, 7.8, 24,32
ZC-9	Sphere	2.3 - 3.0	640	0.3, 4.0, 7.8, 8.0, 16.4
ZC-10	Sphere	2.8 - 2.9	674	2.0, 2.5, 3.7, 6.3, 7.8
ZC-11	Sphere	2.5 - 3.1	723	0.3, 0.8, 1.0, 1.5, 2.0, 3.6, 5.0

2-4-1-4 X線粉末回折による反応生成物の同定

反応生成物を X 線回折装置(リガク社製、RINT・2500V)で調べた。定温反応後の試料 を封入管から X 線分析ホルダーへアルゴン雰囲気中で移し、ホルダーごとポリエチレンフ ィルムでカバーすることによって、試料の潮解を防止した。また一部の実験では、封入管 の下部を 760 K に加熱しながら上部の冷却を 7 時間続け、蒸気圧の高い生成物を蒸留でア ンプル上部に分離・回収したのち、同様に X 線回折で調べた。実測された回折ピーク群か ら、JCPDS (Joint Committee of the Power Diffraction Standard) データをもとに物質同 定した。

2-4-1-5 反応生成物の定量分析

上述したように、この反応後の試料中には未反応物も含めて ZrO₂、ZrCl₄、MoO₂、MoO₃、 MoCl₂、MoCl₃、MoCl₄、MoCl₅、MoOCl₃、MoO₂Cl₂の混在が予想される。このうち MoOCl₃ は、熱力学データベース(Malt-2)に収録されていないが、モリブデンオキシ塩化物の一 種として報告されている[6]。

定温反応後の試料を Fig. 2-4 に示す手順で定量分析した。一連のモリブデン化合物はす べて水溶性のため分別困難であるが、ジルコニウムについては、ZrO₂ が水に難溶なのに対 して ZrCl₄ は水溶性のため、水溶液中で ZrCl₄ を定量分析できる。したがって、ZrO₂ から ZrCl₄ への転換効率も決定できる。

そこで、反応後の試料を封入管から取り出し、質量測定してから、純水中に投入した。 これを 0.45 µm のフィルタで固液分離し、ろ過液には硝酸を加えて 1 mol・L⁻¹ HNO₃溶液 とした。一方、フィルタ上の溶解残渣に硝酸を滴下して一部を溶解させ、同様にフィルタ でろ過したのち 1 mol・L⁻¹ HNO₃溶液とした。硝酸でも溶解しなかったフィルタ上の残渣 を乾燥後、質量を測定して未反応 ZrO_2 量とした。さらに、第一ろ過液および第二ろ過液中 に含まれる Zr を ICP-発光分析装置(島津製、ICP-1000)でそれぞれ定量した。生成系か ら検出された全 Zr 量は、封管中に入れた ZrO_2 反応物の量とおおむねつりあった(しかし 一部の実験では、アンプル溶封点より吸引ポンプ側に反応試薬が残ったため、生成系/反 応系での Zr 物質量比が 60~80 %程度まで低下した)。

このため、 ZrO_2 反応物量ではなく生成系で検出された全Zr量をベースとして、 ZrO_2 から $ZrCl_4$ への転換率 α を次式のように算出した。

$$\alpha_{Zr} \text{ (molar fraction)} = \frac{Zr \text{ (water soluble)}}{Zr \text{ (water soluble)} + Zr \text{ (acid soluble)} + Zr \text{ (residue)}}$$
(2-4)



MoCl₅ system) [18 by permission].

2-4-2 実験結果および考察: MoCl₅を用いる ZrO₂から ZrCl₄への転換反応

2-4-2-1 反応開始温度に関する検討

Fig. 2-5(a)のように、塩化物転換剤に使用した MoCl₅ (m.p. 463 K [19])を単独で示差熱分 析すると、融解に伴う吸熱ピークが 470 K 付近から認められた。一方、混合比 $R_{\rm F}$ = 1.1 の 反応物の DTA 曲線(Fig. 2-5(b))では、MoCl₅ 融解の吸熱が同様に現れたたのち、500 K 付 近から発熱が開始された。これらの吸熱・発熱は同じ試料を 2 回目に昇温した場合には認 められないことから、1 回目の昇温過程で不可逆的な変化が起こると判断される。1 回目昇 温時の 500 K 付近からの発熱は、MoCl₅ と ZrO₂ 間の反応熱と推定され、Table 2-5 中で ΔG_{500} °<0 を与えた反応 (Zr-2、Zr-3、Zr-4、Zr-6、Zr-8、Zr-9、Zr-10) が予想された。以 上の結果から、MoCl₅ と ZrO₂ 間の反応は、約 500 K で始まることがわかった。



Fig. 2-5 DTA curves for (a) $MoCl_5$ and (b) $MoCl_5$ -ZrO₂ mixture (R_F =1.1) [18 by permission].

2-4-2-2 反応生成物の特定

反応物、生成物 ($R_{\rm F}$ = 1.1 の混合物を 781 K、20 h 反応後)、さらにこの生成物を蒸留 (760 K、7 h)後に残った物質の X 線回折図を、Fig. 2-6 に比較した。ここには MoO₂Cl₂ 試薬の 回折図(a)も加えた。生成物の回折図(c)では、MoCl₅ の消失とともに、MoCl₄ と MoO₂Cl₂ の生成が確認できる。一方、(c)でははっきり確認できないが、生成物から揮発した成分(d)は、MoO₂Cl₂ と ZrCl₄ が主体であった。これらの結果から、MoCl₅を用いる ZrO₂から ZrCl₄ への転換反応(781 K)では、MoCl₄、MoO₂Cl₂、ZrCl₄が生成すると判断された。



Fig. 2-6 XRD patterns of (a) reagent MoO_2Cl_2 , (b) reactant mixture ($R_F = 1$), (c) reaction products after 20 h at 781 K, and (d) the volatile products after distillated at 750 K for 7 h 18 [by permission]. The maximum intensity of each XRD pattern is denoted by I_{MAX} .

生成物の定量分析結果をもとに算出した ZrO_2 から $ZrCl_4$ への転換率 α を Fig. 2-7に示す。 これらのデータは Table 2-6 中 ZC-1~ZC-4 の反応条件下で得られたもので、図の横軸は $MoCl_5/ZrO_2$ 混合比 R_F とした。 R_F の上昇にしたがい ZrO_2 から $ZrCl_4$ への転換率 α も増加す るが、 $R_F = 2$ 以上では $\alpha = 1$ の完全転換が実現された。また、この関係は 468~781 K の範 囲で反応温度に依存しなかった。 $MoCl_5[1]$ が 543 K で蒸発する[19]ことを考慮すると、 ZrO_2 と反応するのが $MoCl_5[1]$ でも $MoCl_5[g]$ でも同じ転換率を与えることが示唆された。

そこで、ZrO2と MoCl5との反応を、あらたに式 2-5~2-11 のように記述した。

$$ZrO_2 + (4/5)M_0Cl_5 = ZrCl_4 + (2/5)M_0O_2 + (2/5)M_0O_3$$
 (2-5)

$$ZrO_{2} + MoCl_{5} = ZrCl_{4} + (1/2)M_{0}O_{2} + (1/2)M_{0}O_{2}Cl_{2}$$
(2-6)

$$ZrO_{2} + (4/3)MoCl_{5} = ZrCl_{4} + (1/3)MoCl_{2} + MoO_{2}Cl_{2}$$
(2.7)

$$ZrO_2 + (3/2)MoCl_5 = ZrCl_4 + (1/2)MoCl_3 + MoO_2Cl_2$$
 (2-8)

$$ZrO_2 + 2MoCl_5 = ZrCl_4 + MoCl_4 + MoO_2Cl_2$$
(2-9)

$$ZrO_2 + 2MoCl_5 = ZrCl_4 + 2MoOCl_3$$
(2-10)

 $ZrO_2 + 3MoCl_5 = ZrCl_4 + MoCl_3 + 2MoOCl_4$ (2-11)

Fig.2-7 において $R_{\rm F} = 2$ 以上の反応物混合比で $\alpha = 1$ の完全転換が達成された結果は、反応式 2-9 または 2-10 を支持する。一方、生成物の X 線回折で MoO₂Cl₂の生成が確認されたことから、ここでの反応式としては式 2-9 が妥当と考えられた。



Fig. 2-7 Relationship between the starting $MoCl_5/ZrO_2$ ratio R_F and the conversion ratio α of ZrO_2 to $ZrCl_4$ at various reaction temperatures [18 by permission].

2-4-2-3 反応速度の温度依存性

 $MoCl_5/ZrO_2 反応物モル比 R_F = 2.6 一定の条件下において、ZrO_2から ZrCl_4 への転換率の$ $経時的上昇を種々の反応温度で比較し、Fig. 2-8 に示した。ZrCl_4 への完全転換<math>\alpha$ = 1 まで に要する反応時間は 473 K で約 100 h、668 K では約 0.5 h となった。MoCl_5 の沸点 543 K [19]をまたぐ温度区間で見られた反応速度の温度変化は、単なる活性化ばかりではなく、 $MoCl_5[g] \ge ZrO_2 \ge co反応が MoCl_5[l] \ge ZrO_2 \ge co反応よりも速いことを示唆した。また、$ $C+Cl_2を用いた ZrO_2 の塩化物転換反応よりも MoCl_5[g] \ge ZrO_2 \ge co反応が極めて速く、668$ K では温度が安定する時間等の実験条件の制約により 0.5 h 以下のでの実験は困難であった。

 $ZrO_2[s]-C[s]$ のような固体間接触を必要としない CCl_4 を用いる ZrO_2 から $ZrCl_4$ への転換 反応の場合、固相内での拡散が反応速度を支配し、650~675 K の温度範囲では Jander の 式に従うことが報告されている[12]。Jander の式 2-12 は、反応物粒子を球とみなし、その 内部へ向かう拡散が律速する場合の反応速度式である [20]。

$$\left(1 - \left(1 - X\right)^{1/3}\right)^2 = kt$$
 (2-12)

X:反応時間 tにおける反応物のモル分率

k:反応速度定数(時間-1)



Fig. 2-8 Producing of ZrO_2 conversion to $ZrCl_4$ with the reaction time at various temperatures ($R_F = 2.6$) [18 by permission].



Fig. 2-9 Kinetic Jander's plots at various reaction temperatures ($R_{\rm F} = 2.6$) [18 by permission].

そこで、本実験で得た反応速度論的データを Fig. 2-9 に Jander プロットしたが、反応温度 473 K については原点を通る直線関係を満たし、561~668 K の反応温度についてはデータ の点数が少ないものの原点を通る直線関係が成立すると判断した。この結果から、ZrCl4~ の転換反応の律速過程は、ZrO2反応物粒子の表面から内部へ向かう球面拡散と推論された。

さらに、Fig. 2-9 の直線の傾きから各反応温度での速度定数 k を算出し、Fig. 2-10 に Arrhenius プロットした。3 つのプロットは一直線に並び、その傾きから反応の活性化エネ ルギーを計算したところ、67 kJ・mol⁻¹であった。



Fig. 2-10 Arrhenius plots for the heterogeneous rate constant determined from Jander's equation ($R_{\rm F} = 2.6$) [18 by permission].

2-4-2-4 他の塩化物転換反応との比較

ZrO₂から ZrCl₄へのいくつかの転換反応について、活性化エネルギーなどを Table 2-7 に比較した。本研究で対象とした MoCl₅を用いる反応の活性化エネルギーは、CCl₄を用いる同反応温度域での反応や、C+Cl₂を用いる反応に比べて小さいことがわかる。また、MoCl₅を用いる反応は、他の反応に比べもっとも低温で進行することもわかる。

Table 2-7 Comparison of proposed conversion reactions of ZrO_2 to $ZrCl_4$ [18 by permission].

Reactions	$ m ZrO_2$ reactant	Reagents	Kinetic equation	Reaction temp. (K)	Activation energy (kJ•mol ⁻¹)	Ref.
$ZrO_2 + C + Cl_2 =$	Powder	$\mathrm{C}+\mathrm{Cl}_2$	C + Cl ₂ $kt = 1 - (1 - X)^{1/3}$		231	[15]
$\operatorname{ZrCl}_4 + \operatorname{CO}_2$	Powder	$C + Cl_2$	$kt = \ln(1 - X)$	1400-1700	93	[14]
		CCl_4	$kt = (1 - (1 - X)^{1/3})^2$	650 - 675	278	[12]
$ZrO_2 + COI_4 =$ ZrCl + CO	Powder		$kt = 1 - (1 - X)^{1/3}$	700-750	154	[12]
			kt = X	775 - 825	54	[12]
$\label{eq:cl_s} \begin{split} \mathbf{ZrO}_2 + \mathbf{MoCl}_5 = \\ \mathbf{ZrCl}_4 + \mathbf{MoCl}_4 + \\ \mathbf{MoO}_2\mathbf{Cl}_2 \end{split}$	Powder	${ m MoCl}_5$	$kt = (1 - (1 - X)^{1/3})^2$	473–668	67	This work



Fig. 2-11 The mass gain rates upon ZrCl_4 conversion of ZrO_2 spheres at high temperatures. Broken; with C + Cl₂ (325 mesh)][13], Solid; this work with MoCl₅[18 by permission].

さらに、焼結 ZrO₂ (YSZ で模擬) 球体と MoCl₅間の反応実験(Table 2-6 中の ZC-9~ ZC-11)の結果を、焼結 ZrO₂ 球体と C + Cl₂間での反応報告例[13]と比較、検討した。ここ では、単位 ZrO₂ 表面積あたりの反応速度を ZrO₂/ZrCl₄ 変換時の質量増加速度に換算し、 Fig. 2-11 に比較した。この速度の目標を 10 mg・h⁻¹・cm⁻²に設定すると、C + Cl₂ との反 応では 1300 K 程度の高温が要求されるのに対して、MoCl₅ との反応ではずっと低い約 700 K であった。したがって、MoCl₅による塩化物転換反応は、ZrO₂[s]–C[s]のような固体間接 触を必要としないため、速度論的優位性をもつ。

2-4-3 まとめ: MoCl₅を用いる ZrO₂から ZrCl₄への転換反応 MoCl₅を用いる ZrO₂から ZrCl₄への転換反応に関して、以下の結論を得た。

- この反応は 500 K 付近から始まり、668 K では約 30 分間で ZrO₂ 粉末を ZrCl₄に全面 転換できた。
- (2) ZrCl₄への全面転換には、MoCl₅/ZrO₂の反応物モル比として 2 以上が必要である。転換反応は、主として次式で表せる。

 $ZrO_2 + 2MoCl_5 = ZrCl_4 + MoCl_4 + MoO_2Cl_2$

(3) 反応速度の時間依存性は、反応物固体表面から内部へ向かう球面拡散を律速とした Jander の式にしたがい、活性化エネルギーは 67 kJ・mol⁻¹ と決定された。MoCl₅[1] または MoCl₅[g]が ZrO₂[s]に作用するこの反応は、固体反応物間の接触が要求されない ため、比較的低温でも実用的な反応速度が期待できた。 以上により、MoCl₅を用いる ZrO₂から ZrCl₄への転換反応は、従来より低温度域におい て平衡論的要件と速度論的要件をともに満足することがわかった。

2-5 MoCl₅を用いる(1/2)Nd₂O₃から NdCl₃への転換反応および Mo 副生成物の除去

2-5-1 実験方法: MoCl₅を用いる(1/2)Nd₂O₃から NdCl₃への転換反応および Mo 副生成物の除去

2-5-1-1 用いた試薬と試料の調製

MoCl₅とNd₂O₃の粉末は、レアメタリック社から購入した。MoCl₅の純度は99%以上、Nd₂O₃の純度は99.9%以上が保証された。Nd₂O₃粉末は、酸素濃度と水分濃度が2ppm以下のアルゴン雰囲気中で約5時間加熱(573 K)・脱水してから用いた。すべての実験は、所定比のMoCl₅とNd₂O₃の混合粉末(計200~300 mg)をパイレックス管内に真空封入して行った。MoCl₅の潮解性が高いため、試薬粉末の混合や充填はすべてアルゴン雰囲気中で 行った。MoCl₅/Nd₂O₃の反応物モル比*R*_Fを次式で定義した。

$$R_{\rm F} = \frac{\text{moles of MoCl}_5}{\text{moles of Nd}_2 O_3}$$
(2-13)

2-5-1-2 反応熱の示差測定、高温反応および反応生成物の分析

ZrO2を対象酸化物とした前述の 2-4-1-2 および 2-4-1-3 とまったく同様に、Nd2O3に 対しても一連の実験を行った。封管内での示差熱分析(DTA)、高温反応、反応生成物の同定 と分離定量のいずれについても、同じ実験手法で行った。主生成物の NdCl3 に混入した揮 発性 Mo 副生物の除去は Fig.2-12 に示す蒸留装置で行ったが、その詳細は後述する。

Fig.2-13に示すように、この場合の生成系には未反応物も含めてNd₂O₃、NdOCl、NdCl₃、 MoO₂、MoO₃、MoCl₂、MoCl₃、MoCl₄、MoCl₅、MoOCl₃、MoO₂Cl₂の混在が予想される。 一連のモリブデン化合物はすべて水溶性のため分別困難であるが、ネオジムについては、 Nd₂O₃とNdOClが水に難溶なのに対してNdCl₃は水溶性のため、水溶液中でNdCl₃をICP 定量分析でき、Nd₂O₃からNdCl₃への転換率 *a* を次式で同様に算出した。

$$\alpha_{\rm Nd} \text{ (molar fraction)} = \frac{\rm Nd (water soluble)}{\rm Nd (water soluble) + Nd (acid soluble) + Nd (residue)}$$
(2-14)



Fig. 2-12 Distillative separation of volatile reaction byproducts in a sealed ampule.





2-5-1-3 生成系における揮発性物質の蒸留分離

NdCl₃への完全転換が期待される MoCl₅/Nd₂O₃モル比 $R_{\rm F}$ = 3.2 の混合物(合計約 100 mg)をアンプル中に封入して 473 K で 1 時間反応させた後、生成系内の揮発性成分を Fig. 2-12 にようにしてアンプル上部に蒸留分離した。Table 2-8 に示す一連の実験では、アンプル下部の加熱温度、加熱時間に加えて、反応物封入時の圧力も変化させた。さらにアンプル上部・下部の Mo をそれぞれ ICP で定量し、Mo 副生成物の揮発除去率 $S_{\rm V}$ を次式で計算した。

S (molar fraction) –	Mo (topampule)	(2-15)
S_V (inot	molar maction) =	Mo (topampule) + Mo (bottomampule)	(2 10)

Table 2-8 Distillation conditions for the reaction products in the Nd_2O_3 -MoCl₅ system.

Run	$R_{ m F}$	Pressure at reactant loading (kPa)	Distilation temp. (K)	Distilation time (h)
NRb-1	3.2	0.5	482,574,678,749,823	7.7
NRb-2	3.2	0.4, 4.2, 7.5, 14.1, 27.3, 53.5	664	3.7
NRb-3	3.2	0.5	574	0.9, 2.0, 8.0
NRb-4	3.2	0.5	669	0.4, 1.1, 5.3, 7.5
NRb-5	3.2	0.5	821	3.0, 3.9, 7.4

2–5–2 実験結果および考察: MoCl₅を用いる Nd₂O₃から NdCl₃への転換反応および Mo 副生成物の除去

2-5-2-1 反応開始温度の検討と反応生成物の特定

混合比 *R*_F = 3.2 の反応物の DTA 曲線(Fig. 2-14(b))では、MoCl₅ の融点(444 K) [19]を下 回る 433 K 付近から発熱が認められた。同一試料を 2 回目に昇温した場合にはこの発熱が 認められないことから、1 回目の昇温過程で不可逆的な変化が起こったと判断される。1 回 目昇温時の 433 K 付近からの発熱は、MoCl₅ と Nd₂O₃ 間の反応熱と推定される。

MoCl₅とNd₂O₃間で予想される化学反応の ΔG_{500} °を熱力学データベース Malt-2[11]で計算し、Table 2-9 に示した。O と Cl の部分置換体にあたる NdOCl の生成反応 Nd-1~Nd-2、 この部分置換体と完全置換体 NdCl₃の両方が生成する反応 Nd-3~Nd-4、さらに完全置換体のみが生成する反応 Nd-5~Nd-8 の ΔG_{500} °はすべて負で、熱力学的には 500 K で進行可能である。433 K をピークとする発熱は、Nd-1~Nd-8 いずれかの反応熱であるが、この段階で反応の特定は困難である。MoCl₅ の融点以下から発熱が認められたので、MoCl₅[s]とNd₂O₃[s]の両固相間で反応が開始されると判断できる。



Fig. 2-14 DTA curves of (a) $MoCl_5$ and (b) $MoCl_5$ -Nd₂O₃ mixture ($R_F = 3.2$).

Table	2-9	Standard	Gibbs	free	energy	changes	of	various	reactions	in	the
Nd ₂ O ₂	₃ –Mo	$\mathrm{Cl}_5\mathrm{system}$	n at 50	0 K. 1	Data tal	ken from	[11].			

No.	Reactions	ΔG_{500} °/ kJ·mol ⁻¹
Nd-1	$(1/2)Nd_2O_3[s] + (1/5)M_0Cl_5[l] = NdOCl[s] + (1/10)M_0O_2[s] + (1/10)M_0O_3[s]$	-113.6
Nd-2	$(1/2)Nd_2O_3[s] + (1/5)M_0Cl_5[g] = NdOCl[s] + (1/10)M_0O_2[s] + (1/10)M_0O_3[s]$	-117.6
Nd-3	$ \begin{array}{l} (1/2)\mathrm{Nd}_2\mathrm{O}_3[\mathbf{s}] + (1/2)\mathrm{MoCl}_5[\mathbf{l}] \\ = (1/2)\mathrm{NdCl}_3[\mathbf{s}] + (1/2)\mathrm{NdOCl}[\mathbf{s}] + (1/4)\mathrm{MoO}_3[\mathbf{s}] + (1/4)\mathrm{MoO}_2\mathrm{Cl}_2[\mathbf{s}] \end{array} $	-165.8
Nd-4	$ \begin{array}{l} (1/2)\mathrm{Nd}_2\mathrm{O}_3[\mathbf{s}] + (1/2)\mathrm{MoCl}_5[\mathbf{g}] \\ = (1/2)\mathrm{NdCl}_3[\mathbf{s}] + (1/2)\mathrm{NdOCl}[\mathbf{s}] + (1/4)\mathrm{MoO}_3[\mathbf{s}] + (1/4)\mathrm{MoO}_2\mathrm{Cl}_2[\mathbf{s}] \end{array} $	-175.8
Nd-3	(1/2)Nd ₂ O ₃ [s] + $(3/5)$ MoCl ₅ [l] = NdCl ₃ [s] + $(3/10)$ MoO ₂ [s] + $(3/10)$ MoO ₃ [s]	-199.3
Nd-4	(1/2)Nd ₂ O ₃ [s] + $(3/5)$ MoCl ₅ [g] = NdCl ₃ [s] + $(3/10)$ MoO ₂ [s] + $(3/10)$ MoO ₃ [s]	-211.1
Nd-5	$(1/2)Nd_2O_3[s] + (3/4)M_0Cl_5[l] = NdCl_3[s] + (3/8)M_0O_2[s] + (3/8)M_0O_2Cl_2[g]$	-213.2
Nd-6	$(1/2)Nd_2O_3[s] + (3/4)MoCl_5[g] = NdCl_3[s] + (3/8)MoO_2[s] + (3/8)MoO_2Cl_2[g]]$	-228.3
Nd-7	$(1/2)Nd_2O_3[s] + (3/2)MoCl_5[1] = NdCl_3[s] + (3/4)MoCl_4[s] + (3/4)MoO_2Cl_2[g]$	-244.0
Nd-8	$(1/2)Nd_2O_3[s] + (3/2)MoCl_5[g] = NdCl_3[s] + (3/4)MoCl_4[s] + (3/4)MoO_2Cl_2[g]$	-272.3

[s]: solid state, [l]: liquid state, [g]: gas state

 $R_{\rm F} = 0.14 \sim 2.3$ の MoCl₅/Nd₂O₃ 混合物を 2 K・min⁻¹の速度で 640 K まで昇温して反応 させた後、773 K で 5 時間蒸留して揮発成分を除去した試料の X 線回折図を Fig. 2-15 に比 較した。 $R_{\rm F} = 0.14$ の場合(a)には未反応 Nd₂O₃および NdOCl が、また $R_{\rm F} = 0.50$ の場合(b) には NdCl₃ と NdOCl が検出された。 $R_{\rm F} = 1.6$ の場合(c)には NdCl₃ 生成量が増加し、NdOCl のピークは小さくなった。さらに $R_{\rm F} = 2.3$ の場合(d)には NdCl₃ だけとなり、NdOCl は検 出されなかった。したがって、 $R_{\rm F} = 2.3$ の混合物を 640 K で反応させれば、Nd₂O₃ から NdCl₃ への完全転換が可能と判断された。

生成系から揮発成分を除去後に残った物質群中では、Mo化合物を特定できなかった。そこで、 $R_{\rm F} = 3.2$ の場合の生成物を蒸留分別することなくそのままX線回折測定したところ(Fig.2-16)、NdCl₃の他にMoCl₄とMoO₂Cl₂の存在が確認された。以上の結果から、MoCl₅



を用いる Nd₂O₃から NdCl₃への完全転換反応(*R*_F = 3.2、640 K)では、少なくとも MoCl₄ と MoO₂Cl₂が副生することがわかった。

Fig. 2-15 XRD patterns of $MoCl_5-Nd_2O_3$ reaction products with starting molar ratios of $R_F = (a) 0.14$, (b) 0.5, (c) 1.6, and (d) 2.3 after removing volatile components by distillation at 773 K for 5 h. The reaction temperature was elevated to 640 K at a rate of 2 K \cdot min⁻¹. The maximum intensity of each XRD pattern is denoted by I_{MAX} .



Fig. 2-16 XRD pattern of the as-obtained reaction products in the $MoCl_5-Nd_2O_3$ system ($R_F = 3.2$) before distillation. The maximum intensity of each XRD pattern is denoted by I_{MAX} .

生成物の定量分析結果をもとに算出した Nd₂O₃から NdCl₃への転換率 α を Fig. 2-17 に示 す。ここでも、Nd₂O₃に対する転換剤 MoCl₅のモル比 $R_{\rm F}$ を図の横軸とした。 $R_{\rm F}$ の上昇に したがい Nd₂O₃から NdCl₃への転換率 α も増加するが、 $R_{\rm F}$ = 1.5 以上では α = 1 の完全転換 が実現された。Nd₂O₃ と MoCl₅ との反応を、あらたに式 2-16~2-19 のように記述した。

- $(1/2)Nd_2O_3 + (3/4)M_0Cl_5 = NdCl_3 + (3/8)M_0O_2 + (3/8)M_0O_2Cl_2$ (2-16)
- $(1/2)Nd_2O_3 + (3/2)MoCl_5 = NdCl_3 + (3/4)MoCl_4 + (3/4)MoO_2Cl_2$ (2-17)
- $(1/2)Nd_2O_3 + (3/2)M_0Cl_5 = NdCl_3 + (3/2)M_0OCl_3$ (2-18)

 $(1/2)Nd_2O_3 + 2MoCl_5 = NdCl_3 + (1/2)MoCl_2 + (3/2)MoOCl_4$ (2-19) NdCl₃への完全転換だけを考えれば、 $R_F = 1.5$ の転換剤混合比で充分であるが、その場合の 反応式 2-16 では、蒸気圧の低い MoO₂が副生する。さらに、揮発分離の際に一部の MoO₂ と NdCl₃の間で再酸化して NdOCl を形成(Fig.2-16 (c) : R_F=1.6)が推定されたので、 $R_F = 3$ とさらに多量の転換剤を必要とするが、反応式 2-17 を利用すれば、MoCl₅から生成するの は蒸気圧の高い MoCl₄ と MoO₂Cl₂ となり、蒸留で目的生成物 NdCl₃ と分離できる。MoCl₄ と MoO₂Cl₂の生成は、 $R_F = 3.2$ で反応させたアンプル中で実際に確認された(Fig.2-16)。以 上から、 $R_F = 3$ 以上の転換剤混合比で MoCl₄ と MoO₂Cl₂を副生する条件を選ぶことが、も っとも目的にかなうと判断された。



Fig. 2-17 Increases in the conversion ratio α from (1/2)Nd₂O₃ to NdCl₃ with the starting MoCl₅/Nd₂O₃ ratio $R_{\rm F}$ at 640 K.

2-5-2-2 揮発性 Mo 副生物と NdCl₃ との蒸留分離

(1) 蒸留温度の影響

以下では、*R*_F = 3.2、473 K、1 hの反応条件で得たアンプル内の生成物に対して、揮発性 Mo 副生物の蒸留除去を検討した。蒸留温度に相当するアンプル下部の加熱温度を482~824 Kの範囲に設定し、約 8 h 蒸留した。Fig. 2-18 に見られるように、加熱温度482 K

では Mo 化合物はほとんど揮発しなかったのに対して、574 K 以上ではほとんどすべての Mo 種がアンプル上部へ移動した。



Distillation temp. / K

Fig. 2-18 Distillatory separated percentage of Mo components from the reaction products ($R_{\rm F} = 3.2, 773$ K) at various evaporation temperatures.

アンプル上部へ移動した物質中およびアンプル下部に残留した物質中の Mo と Nd の分布 を Table 2-10 に示す。蒸留温度によらずアンプル下部では水溶性の Nd が 97~99 %を占め、 主生成物 NdCl₃ と考えられる。一方の Mo は、482 K の加熱ではほとんど揮発せず、97 % がアンプル下部に残留した。蒸留温度を 574 K 以上にすると、Mo の 90~98 %程度は揮発 してアンプル上部に移行し、最多 10 %がアンプル下部に残留した。Mo 残留物の大部分は 水に難溶で硝酸には溶解したことから、MoCl₃または MoCl₂のいずれかと推定される。

	Mo					Nd				
Temp. (K)	Top of ampule		Bottom of ampule		Total	Top of ampule		Bottom of ampule		Total
	W	Ν	W	Ν	- (%) -	W	Ν	W	Ν	(70)
482	2.5	0.6	93.0	3.9	100.0	1.6	0.0	98.1	0.3	100.0
574	73.5	21.0	0.4	5.1	100.0	1.4	0.1	97.9	0.6	100.0
678	65.0	25.0	0.5	9.5	100.0	2.2	0.5	97.0	0.3	100.0
750	58.2	33.5	0.3	8.0	100.0	0.9	0.8	97.4	0.8	100.0
824	65.6	32.8	0.4	1.2	100.0	0.6	0.2	99.0	0.2	100.0

Table 2-10 Distribution of Mo and Nd after distillation for 7.7 h at various temperatures.

W: water soluble, N: nitric acid soluble



Fig. 2-16 XRD pattern of the as-obtained reaction products in the $MoCl_{5}$ - $Nd_{2}O_{3}$ system ($R_{\rm F} = 3.2$) before distillation. The maximum intensity of each XRD pattern is denoted by $I_{\rm MAX}$. The maximum intensity of each XRD pattern is denoted by $I_{\rm MAX}$.

793 K で 4 時間蒸留後のアンプル底部残留物 X 線回折を Fig. 2-19 に示す。蒸留前の反応 生成物中でのモリブデン種の大部分は MoO₂Cl₂ と MoCl₄ であった(Fig.2-16)が、蒸留後の Fig. 2-19 からは MoCl₃ が主体と判断される。蒸留に際して MoCl₃ が生ずる原因としては、 MoCl₄の不均化反応 2-20 が予想され、MoCl₄ より蒸気圧の低い MoCl₃ が蒸留後のアンプル 底部に残ったと考えられる。

 $2MoCl_4 = MoCl_3 + MoCl_5$ (2-20)

塩化物転換反応式 2-17 を前提として、生成したすべての MoCl₄ が蒸留時に揮発すること なく不均化すると仮定した場合には、Mo 全量の 25 %が MoCl₃ としてアンプル底部に残る はずである(MoCl₅は揮発)。しかし、574~824 K での蒸留後に実測された Mo 残留率はこ れよりかなり低かったことから、蒸留時に MoCl₄ の過半が揮発、残部が不均化したものと 考えられる。また、最高蒸留温度 824 K で最低 Mo 残留率 1.6 %を与えた結果は、高温ほど MoCl₄の不均化が進まない[21]ことに関連している。

(2) アンプル内圧力の影響

反応物をアンプル内に封入する際の圧力だけを変化させた(0.4~53.5 kPa)一連の生成 系を、一定蒸留条件(664 K、3.7 時間)で分別した。これらの実験で求まった Mo 種の揮 発率 Sv を封入圧力に対して Fig. 2-20 に示した。この図に見られるように、Mo 種の揮発率 は約 90 %で、封入圧力による有意差はない。また、揮発しなかった約 10 %の Mo 種の大部 分は、硝酸溶解性の MoCl₃ (MoCl₄の不均化反応で生じた)である。

51



Fig. 2-20 Effects of the pressure at ampule sealing on the distillative separation of Mo products at 664 K for 3.7 h.

(3) 蒸留時間の影響



Fig. 2-21 Effects of the distillation time on the evaporation of Mo products at 664 K.

さらに、Mo種の揮発率に対する蒸留時間の影響も調べ、Fig. 2-21 に示した。574 または 821 K で蒸留した場合には Mo種の揮発率が経時的にわずかに上昇するのに対して、669 K 蒸留では時間によらず約 90 %で一定となった。669 K で蒸留後の不揮発性 Mo種は、蒸留 時間によらず硝酸溶解性の MoCl₃ がほとんどあった。Fig. 2-21 の実験結果は、Mo生成物 の一つである MoCl₄ の揮発/不均化に関わる速度論的バランスを反映したものと推論され る。また、高い温度(820 K 程度)で8時間程度蒸留すれば、主生成物 NdCl₃に混入する Mo種の98%を分離除去可能であることがわかった。

673 K で 8 時間蒸留後のアンプルの写真を Fig. 2・22 に示した。空冷された管上部(A)の内 壁面には、下部から揮発した Mo 化合物と推定される黒色の凝集物が認められる。一方、蒸 留時加熱ブロック内に挿入されていた部分は、赤褐色の最下部(C)と白色の中部(B)とに分か れた。これらの各領域から採取した物質を分析し、Table 2・11 に結果を示した。上部(A)で は水溶性の MoO₂Cl₂と硝酸溶解性の MoCl₄が共存し、両者で 99 %以上を占めた。中部(B) では水溶性の主生成物 NdCl₃が 99 %を占めた。下部(C)でも、水溶性の主生成物 NdCl₃が 92 %を占め、残部の大半は硝酸溶解性の MoCl₃であった。MoCl₃[s]は溶融することなく熱 分解することが知られている[6]ので、不均化で生じた MoCl₃が固体として下部(C)に残った と推定される。

管中部(B)では、99%を上回る純度で NdCl₃を回収できた。アンプル底面に近いほど、 MoCl₄の揮発が阻害されて不均化が優勢になり、下部(C)にMoCl₃が混在したと推論できる。 したがって、塩化物転換反応後の生成物を蒸発面積が大きく薄い粉体層になるよう工夫す れば、副生成物 MoCl₄をほとんど不均化させることなく揮発除去可能と期待できる。



Fig. 2-22 A photograph of an ampule after distillation at 673 K for 8 h.

Table 2-11 Distributions	of Mo	and l	Nd in	sample	after	distillation	at	at	673
K for 8 h.									

	Ν	ſo	Ν	$T_{-+-1}(0/)$	
	W	Ν	W	Ν	- 10tal (%)
Upper (A)	72.1	27.1	0.7	0.1	100.0
Middle (B)	0.3	0.1	99.6	0.1	100.0
Bottom (C)	0.4	7.7	91.9	0.1	100.0

W: water soluble, N: nitric acid soluble

2-5-3 まとめ: MoCl₅を用いる(1/2)Nd₂O₃から NdCl₃への転換反応と Mo 副生物の蒸留 除去

MoCl₅を用いる(1/2)Nd₂O₃から NdCl₃への転換反応を検討し、以下の結論を得た。 (1) 433 K 付近から開始されるこの反応で、(1/2)Nd₂O₃から NdCl₃へ完全転換できる。 (2) 塩化物転換反応として、

(1/2)Nd₂O₃ + (3/4)MoCl₅ = NdCl₃ + (3/8)MoO₂ + (3/8)MoO₂Cl₂ を利用すれば、MoCl₅/Nd₂O₃ モル比 1.5 で完全転換できるが、蒸気圧の低い MoO₂が 副生し、目的生成物 NdCl₃ との分離が容易ではない。

一方、塩化物転換反応として、

(1/2)Nd₂O₃ + (3/2)MoCl₅ = NdCl₃ + (3/4)MoCl₄+ (3/4)MoO₂Cl₂ を利用すれば、MoCl₅/Nd₂O₃ モル比 3 以上が必要となるが、副生物はともに揮発性の MoCl₄ と MoO₂Cl₂ に限定できる。

(3) MoO₂Cl₂は 673 K、0.5 h 程度の蒸留で、目的塩化物 NdCl₃から揮発分離できる。一 方の MoCl₄ も揮発分離可能だが、MoCl₃ と MoCl₅ への不均化も並行して進行し、不揮 発性の MoCl₃ は蒸留で分離できない。MoCl₄ 不均化の抑制には高い蒸留温度(820 K 以上)が適する。

以上により、MoCl₅を用いる Nd₂O₃から NdCl₃ へ完全転換が可能であるが、副生成物の 一つである MoCl₄の不均化の抑制が、NdCl₃の単離には不可欠と結論された。

2-6 MoCl5を用いるアクチノイド酸化物の塩化物変換プロセスに対する期待

C + Cl₂を利用する既存の塩化物転換法と比べて、本研究における MoCl₅を用いた ZrO₂ から ZrCl₄への転換反応は、より低温でも進行可能で、低温でもある程度の速度を維持した。 アクチノイド-O 間の親和力は Zr-O より弱いと予測される。このため、MoCl₅を用いる酸 化物から塩化物への転換反応ついては、模擬対象とした ZrO₂よりアクチノイド酸化物(UO₂、 PuO₂、NpO₂)の方が熱力学的に有利と期待できる。

Nd₂O₃を模擬対象にした MoCl₅による塩化物転換では、副生する MoO₂Cl₂と MoCl₄を 揮発分離することで、純度 99%以上の生成物 NdCl₃を得た。NdCl₃と比べて一連のアクチ ノイド塩化物は同程度の蒸気圧をもつので、アクチノイド塩化物の蒸留精製も可能と見込 まれる。

本章で提案した MoCl₅を用いる酸化物から塩化物への転換反応は、低温でも充分な速度 で進行する要件を満足し、さらに主生成物に混入する Mo 副生物の大部分を揮発分離できた ことから、既報の方法より優れたアクチノイド酸化物(UO₂、PuO₂、NpO₂)の塩化物転換プ ロセスとして期待できる。

本章に関わる著者の原著論文

T. Hijikata and M. Kurata, "Novel chlorination of zirconium dioxide at low temperature", *Electrochemistry*, **77**, 702 (2009).

第2章の参考文献

- T. Inoue, M. Sakata, H. Miyashiro, T. Matsumoto, A. Sasahara, and N. Yoshiki, "Development of partitioning and transmutation technology for long-lived nuclides", *Nucl. Technol.*, 93, 206 (1991).
- [2] M. Kurata, K. Kinoshita, T. Hijikata, and T. Inoue, "Conversion of simulated high-level liquid waste to chloride for the pretreatment of pyrometallurgical partitioning process", J. Nucl. Sci. Technol., 37, 682 (2000).
- [3] K. Uozumi, M. Iizuka, M. Kurata, T. Inoue, T. Koyma, M. Ougier, R. Malmbeck, and J. -P. Glatz, "Demonstration of pyropartitioning process to recover TRUs from genuine high-level liquid waste", *Proc. Global 2009*, Paris, France, Sept. 6-11, Paper 9086 (2009).
- [4] B. D. Craig and D. S. Anderson, "Handbooks of Corrosion Data" ASM International, Metals Park, OH (1983).
- [5] Y. Sakamura, T. Inoue, T. Iwai, and H. Moriyama, "Chlorination of UO₂, PuO₂ and rare earth oxides using ZrCl₄ in LiCl–KCl eutectic melt", *J. Nucl. Mater.*, **340**, 39 (2005).
- [6] I. Haas, S. Jäger, H. Katscher, D. Schneider, J. Wagner, "Gmellin Handbook of Inorganic and Organometallic Chemstry (8th Ed.) Mo Molybdenum", B6, Splinger-Velrger, New York (1980).
- [7] O. K. Kubachewski and C. B. Alock, "Metallurgical thermochemistry (5th Ed.)", Pergamon Press (1979).
- [8] L. Brewer, L. A. Bromley, P. W. Dilles, and N. L. Lofgren, "The chemistry and metallurgy of miscellaneous materials: thermodynamics", *Natl. Nucl. Energy Ser. Div. IV*, B19 (1950).
- [9] R. P. Burns, G. Demaria, J. Drowart, and R. T. Grimely, "Mass spectrometric investigation of sublimation of molybdenum dioxide", *J. Chem. Phys.*, **32**, 1363 (1960).
- [10] 土方孝敏, 倉田正輝, "五塩化モリブデンを用いた低温塩素化技術の開発(II)-ネオジ ム酸化物の塩素化最適条件と副生成物(モリブデンオキシクロライド)の分離-", 電 中研研究報告, T99084 (1997).
- [11] MALT-2 : "Materials-oriented Little Thermodynamic Database for Personal Computers, Ver.2", Kagaku-Gijutsusha (1990).
- [12] P. K. Jena, E. A. Brochhi, and T. F. Villela, "Studies on kinetics of low-temperature chlorination of ZrO₂ by gaseous carbon tetrachloride", *Metall. Mater. Trans.*, B26, 235 (1995).
- [13] A. Landsberg, C. L. Hoatson, and F. E. Block, "The chlorination kinetics of zirconium dioxide in the presence of carbon and carbon monoxide", *Metall. Trans.*, 3, 517 (1972).
- [14] O. Bicerolu and W. H. Gauvin, "The chlorination kinetics of zirconium dioxide in the presence of carbon", *Can. J. Chem. Eng.*, 58, 357 (1980).

- [15] A. J. Oreilly I. D. Doig and J. S. Ratcliffe, "The kinetics of the chlorination of zirconium dioxide in static bed with carbon and chlorine", *J. Inorg. Nucl. Chem.*, 34, 2487 (1972).
- [16] A. A. Manieh, D. S. Scott, and D. R. Spink, "Electrothermal fluidized bed chlorination of zircon", *Can. J. Chem. Eng.*, 52, 507 (1974).
- [17] A. A. Manieh and D. R. Spink, "Chlorination of zircon sand", *Can. Metal. Q.*, 12, 331 (1973).
- [18] T. Hijikata and M. Kurata, "Novel chlorination of zirconium dioxide at low temperature", *Electrochemistry*, **77**, 702 (2009).
- [19] 佐伯雄造, 松崎糸両子, "五塩化モリブデンの二、三の熱化学的性質", 電気化学および 工業化学, 33, 155 (1965).
- [20] A. Khawam and D. R. Flanagan, "Solid-state kinetic models: basics and mathematical fundamentals", J. Phys. Chem., B, 110, (35) 17315 (2006).
- [21] R. Matsuzaki and Y. Saeki, "Chemical properties of gaseous molybdenum tetrachloride", *J. Less- Common Met.*, **29**, 427 (1972).

第3章 アクチノイドと希土類金属(燃料毒)の分離

3-1 還元・抽出分離の背景

Fig. 3-1 に高レベル廃液中での金属組成(wt%)を示したが、MA(Minor actinoid: Np、
Pu、Am、Cm)総計の10倍にも相当する23%の希土類(RE: Y、La、Ce など)が含まれる[1]。したがって再処理の過程で、希土類を除去することなくアクチノイド(AN: U、Np、
Pu、Am、Cm)酸化物から塩化物への転換を行うと、多量のRE 塩化物が混入する。

原子炉内の中性子との衝突で核分裂してエネルギーを放出する AN に対して、中性子を 吸収する RE が多くなりすぎると、核燃料としての性能が低下する。したがって、AN と RE を分離する技術が、不可欠なものとして要求される。



Fig. 3-1 Metal composition (wt%) in the high level waste. Data taken from [1].

これまで検討された分離技術には、溶融塩中に溶解した金属イオン種を電解還元析出で 固体電極上や液体電極内へ選択的にとり出す方法や、リチウム還元で生成する金属 M を第 二の液相へ選択的に抽出する方法などがある。溶融塩中に溶解した金属イオンの還元をと もなうこれらの分離法では、金属種による M | M^{z+}間平衡電極電位の相違(還元されやすさ の相違)がまず重要な指標となる。LiCl--KCl 系共晶溶融塩(773 K)中の M^{z+}と M の間の平 衡電位を、AN と RE について Fig. 3-2 に示した[2-3]。電位の基準は Ag | Ag+である。M^{z+} の溶融塩中での活量(*a*_{Mz}+)によっても平衡電位は変化するが、*a*_{Mz}+ = 0.001 で比較すると、 U;約-2.0 V、Np;約-2.2 V、Pu;約-2.3 V、Am;約-2.4 V に対して、希土類は Gd;約-2.5 V 以下 La;約-2.7 V まで並ぶ。

もっとも卑な AN である Am と RE との電位差は最大でも 200 mV とわずかで、実際の 分離に際しては RE/AN の濃度比が 1 よりかなり大きくなるため、平衡電位差はさらに小さ くなる。このため、相対的に貴な AN だけをめっきのように固体電極上に電着させて、RE と分離することは容易でない。そこで、溶融塩中の AN 種を酸化数 0 の金属までリチウム で還元し、第二の液相(金属 Cd)内へ選択的に抽出する分離法が注目されている[1]。Cd 以外にも第二の液相に用いる金属は亜鉛やビスマスなどがあるが、亜鉛は鉄の溶解度が大 きく容器材料として鉄系金属が使用できず、ビスマスは蒸気圧が低く揮発分離によるアク チノイド金属の精製回収が難しい。したがって、鉄の溶解度が小さく、蒸気圧の高い Cd は 第二の液相の溶媒として最も適している。



Fig. 3-2 Equilibrium potentials of $M | M^{z+}$ in 59LiCl-41KCl binary melt at 773 K. Data taken from [2-3].



Fig. 3-3 Fundamental concepts for the AN/RE separation by reductive extraction in a molten salt | molten Cd two-phase system.

この分離法の概略を Fig. 3-3 に示した。まず、分離対象とする塩化物群を溶融塩に溶解 させる。これを Cd-Li 系合金の第二液相と接触させ、撹拌で液 | 液界面を拡げながら、溶 融塩中の対象金属種を 0 価の金属までリチウム還元する。このとき、界面での酸化還元反 応によって生成する金属は、Cd-Li 液相内に合金化して抽出される(厳密には、一部は溶 融塩相中に金属粒子として分散し、三相系となる可能性も考えられる)。リチウム還元の容 易さが金属の種類によって異なることを利用して、AN と RE の分離をはかる。

一方、湿式再処理プロセス中に NaCO₃や NaOH による洗浄が含まれるため、高レベル 廃液には Na が混入し、Fig. 3-1 のように約 20 wt%にものぼる。その後の酸化物転換や塩 化物転換の上流工程では、この Na がほぼそのまま随伴される。したがって、AN と RE の 分離を主目的とする還元・抽出過程でも、系内に混入する NaCl の影響を検討する必要があ る。

このような還元・抽出分離法に関連して、これまで多くの基礎的検討が LiCl-KCl 溶融塩 |液体 Cd の系で行われてきた[4-8]が、LiCl-KCl-NaCl | Cd の現実的な系での報告例はほ とんどない。そこで本研究においては、LiCl-NaCl | Cd 系で還元・抽出を行ったのち、両 液相に対する AN の分配比と RE の分配比を調べ、LiCl-KCl | Cd 系での結果と比較するこ とによって、混入 Na⁺イオンの影響を考察した。

3-2 実験方法:溶融塩 | Cd-Li 合金界面での還元・抽出による AN と RE の分離

3-2-1 用いた試薬と試料の調製

(1) 塩化物

ポーラログラフィックグレードの 59LiCl-41KCl (mol%)共晶組成塩、LiCl、NaCl、希土 類塩化物、塩化カドミウム(CdCl₂)は、すべて APL (Anderson Physics Laboratories)社から 購入した。これらの純度は 99.9%が保証された。全率固溶の LiCl-NaCl 二元系でも、最低 融点を与える 71LiCl-29NaCl 組成を選んだ。これらの塩化物は潮解性が高いため、アルゴ ン雰囲気 (水、酸素ともに 1 ppm 以下)のグローブボックス内で取り扱った。

(2) 金属

金属 Cd は和光純薬から購入し、純度 99.999 %が保証された。金属 Li は高純度化学研究 所から購入し、純度 99.9 %が保証された。金属 U は、表面の酸化物を研磨除去してから用 いた。また、金属 U を中性子照射(京大原子炉、フラックス 2×10¹³ n・cm⁻²・s⁻¹, 照射時間 1 h)したものを ²³⁹Np として用いた。

(3) 還元剤 Cd-Li 合金

アルゴングローブボックス内において、90Cd-10Li 合金を以下のように準備した。金属 Cd をアルミナるつぼ(SSA-S)中で融解してから(約773K)、所定量の金属 Li を投入した。 この液状合金をパイレックス管(6 mm)内に吸い上げてから冷却し、90Cd-10Li の合金棒 とした。

3-2-2 還元·抽出実験装置

水分の混入や金属の酸化を防止するため、アルゴングローブボックス内の電気炉に Fig. 3・4 の還元・抽出実験装置をセットした。実験雰囲気は、H2O も O2 も濃度 1 ppm 以下とな るよう維持した。銅の均熱ブロックで囲んだアルミナ製るつぼ(SSA-S、内径 24 mm)中 に塩と Cd を入れ、所定の温度で溶融した。パイレックス製吸引管の先端位置を調節するこ とで、塩液と Cd 液を分別採取した。還元剤の Cd-Li 棒や酸化剤の CdCl2粉末は、アルミ ナ製(SSA-S)導入管から系内に投入した。必要に応じて攪拌羽根(軸:鉄またはアルミナ製、 羽根:鉄または Ta 製)で系内を攪拌(95 rpm)した。アルミナ製(SSA-S)保護管に入れた K 熱電対で、系の温度を計測・制御した。



Fig. 3-4 Reductive extraction experiments in an alumina crucible [9 by permission].

3-2-3 実験手順の詳細

実験条件の詳細を Table 3-1 にまとめた。71LiCl-29NaCl 組成の混合塩計 74g(あるいは 59LiCl-41KCl 組成の混合塩 70g(PEx-1)、95g(PEx-2)) に対して、0.5~2gの AN 塩 化物と RE 塩化物を加えた。これをアルミナるつぼ中に入れ、所定温度まで昇温した。均一な溶融塩相となったのち、るつぼ内に金属 Cd を投入し、溶融した。

PEx-1 と PEx-2 では LiCl-KCl | Cd 系での分配を、また SEx-1 と SEx-2 では LiCl-NaCl | Cd 系での分配を調べた。PEx-1 の実験温度は 59LiCl-41KCl 共晶組成での報告データが豊富な 723 K に、また PEx-2、SEx-1~SEx-2 の実験温度は、LiCl-NaCl 系の

溶融温度が高いため 873 K 付近を選んだ。さらに、分離対象に U と Np も加える PEx-1 と SEx-2 の場合には、これらの塩化物が入手できないため、金属 U や金属 Np を Cd 液相に 合金化したのち、溶融塩相側に酸化溶解(酸化剤として溶融塩相中に CdCl₂ を添加)させた。

以上の初期状態に対して、所定量の Cd-Li 合金を系内に加え、還元剤となる Li を Cd 液 相に導入した。その後、4h以上撹拌下(SEx-2 を除く)で、溶融塩相と Cd 相を接触させ た。静置後の両相から試料をそれぞれ採取した。これらを純水溶解性と硝酸溶解性の成分 に分けた(硝酸でも難溶な残査はほとんど認められなかった)。溶解したウラン種と希土 類種は、ICP-AES(誘導プラズマ発光分析装置)で定量した。また、²³⁹Np をガンマースペ クトロメトリーで定量した。さらに、Li⁺、K⁺、および Na⁺を原子吸光分析装置で定量した。

Table 3-1 Experimental conditions for reductive extraction experiments [9 by permission].

Run	Amount of salt (mol)	Amount of Cd (mol)	Initial composition of the salt mixture (molar fraction)	Temperature (K)
PEx-1	1.26	2.23	LiCl–KCl / $[UCl_3, NpCl_3, LaCl_3, CeCl_3]$ 0.9964 / $[0.0020, 4.7 \times 10^{-13}, 0.0016, 0.0016]$	724
PEx-2	1.71	1.78	LiCl–KCl / [YCl ₃ , LaCl ₃ , CeCl ₃ , NdCl ₃] 0.9815 / [0.0048, 0.0045, 0.0046, 0.0046]	857
SEx-1	1.58	1.78	LiCl–NaCl / [YCl ₃ , LaCl ₃ , CeCl ₃ , NdCl ₃] 0.9815 / [0.0050, 0.0050, 0.0051, 0.0052]	865
SEx 2	1.58	1.96	$LiCl-NaCl / [UCl_3, NpCl_3, YCl_3, LaCl_3, CeCl_3, NdCl_3]$ 0.9810 / [0.0004, 2.03 × 10 ⁻¹³ , 0.0049, 0.0047, 0.0046, 0.0044]	863

3-3 結果と考察:溶融塩 | Cd-Li 合金界面での還元・抽出による AN と RE の分離

3-3-1 LiCl-KCl 溶融塩 | 液体 Cd-Li 二相界面での還元・抽出

(1) 二相接触系における酸化還元平衡

CdCl₂を用いて LiCl-KCl 溶融塩中に導入される U 種や Np 種は+3 の酸化状態が安定で あり[4-5]、希土類(Y、La、Ce、Nd)も酸化数+3 の塩化物として溶融塩に加えた。これ らを Cd 相内の金属リチウムで還元する。この二液相接触系の平衡状態は、溶融塩中の全酸 化体と Cd 相中の全還元体が関与する酸化還元平衡で規定される。

考慮の対象とすべき還元 | 酸化対は、Li | Li⁺、U | U(III)、Np | Np(III)、Y | Y(III)、 La | La(III)、Ce | Ce(III)、および Nd | Nd(III)である。Cl- | (1/2)Cl₂は Cd 相が Cl₂に対する 溶解度をもたないため、K | K⁺は K が Cd 相中で検出されなかったため、Cd | Cd(II)は Cd(II) が溶融塩相中で検出されなかった (ただし、U(III)や Np(III)を溶融塩相に導入するために CdCl₂を加えた場合を除く)ため、それぞれ無関係とみなした。つまり Cl-、K⁺、Cd は安 定な成分として両相中に存在するが、酸化還元には関わらないとした。これらの還元体 | 酸化体はすべて混合物中の成分であるので、厳密には平衡電位を活量で議論する必要があ る。この場合、それぞれの平衡電位は

$$E_{\rm Li} = E_{\rm Li}^{\circ} + \frac{RT}{F} \ln \frac{a_{\rm Li(I,MS)}}{a_{\rm Li(0,Cd)}}$$
(3-1-Li)

$$E_{\rm U} = E_{\rm U}^{\circ} + \frac{RT}{3F} \ln \frac{a_{\rm U(III,MS)}}{a_{\rm U(0,Cd)}}$$
(3-1-U)

$$E_{\rm Np} = E_{\rm Np}^{\circ} + \frac{RT}{3F} \ln \frac{a_{\rm Np(III,MS)}}{a_{\rm Np(0,Cd)}}$$
(3-1-Np)

$$E_{\rm Y} = E_{\rm Y}^{\circ} + \frac{RT}{3F} \ln \frac{a_{\rm Y(III,MS)}}{a_{\rm Y(0,Cd)}}$$
(3-1-Y)

$$E_{\rm La} = E_{\rm La}^{\circ} + \frac{RT}{3F} \ln \frac{a_{\rm La(III,MS)}}{a_{\rm La(0,Cd)}}$$
(3-1-La)

$$E_{\rm Ce} = E_{\rm Ce}^{\circ} + \frac{RT}{3F} \ln \frac{a_{\rm Ce(III,MS)}}{a_{\rm Ce(0,Cd)}}$$
(3-1-Ce)

$$E_{\rm Nd} = E_{\rm Nd}^{\circ} + \frac{RT}{3F} \ln \frac{a_{\rm Nd(III,MS)}}{a_{\rm Nd(0,Cd)}}$$
(3-1-Nd)

のように表すことができ、各式右辺の第一項はそれぞれの標準電位である。これらの平衡 電位がすべて同一となったとき、全酸化還元種についての平衡状態が成立する。

したがって、還元・抽出を開始する前の平衡状態において、aLi(0,Cd)、aU(0,Cd)、aNp(0,Cd)、 aY(0,Cd)、aLa(0,Cd)、aCe(0,Cd)、aNd(0,Cd)は有限で、厳密にゼロではない。この初期平衡状態に対 する外乱として、Li-Cd 合金を Cd 相に加えた。以下では、新たな平衡状態が還元・抽出操 作終了時に成り立つものとして、還元・抽出後における各化学種iの物質量の変化を検討す る。

Cd-Li 合金が Cd 相に添加され、Li(0,Cd)が増加すると、

$$M(III, MS) + 3Li(0, Cd) = M(0, Cd) + 3Li(I, MS)$$
(3-2)

の酸化還元平衡は右に片寄り、新たな平衡状態へと向かう。なお、溶融塩相中の還元対象 金属種M(III,MS)は M^{3+} の単独イオンではなく、 $MCl_3 \ge Cl$ -イオンの間で形成される錯イオ ン(例: MCl_6^{3-})として溶存する。

(2) 酸化還元反応前後の物質収支と二液相への分配

還元・抽出の前後で、全元素について[MS 相内 + Cd 相内]合計の存在量が保存されるべきである。また各酸化還元種 i のモル数を *m* と表記すれば、Li 投入前後における酸化還元反応のバランスとして、

$$\Delta n_{U(0,Cd)} + \Delta n_{Np(0,Cd)} + \Delta n_{Ce(0,Cd)} + \Delta n_{La(0,Cd)} = -3\Delta n_{Li(0,Cd)}$$
(3-3)
の化学量論的関係が成り立つ。

各化学種 i の活量 a_iは、そのモル分率濃度 X_iと活量係数(モル分率ベース) γ_iとの積 X_iγ_i で表せるので、式 3-2 の平衡状態を活量ベースの平衡定数 K_M と見かけの平衡定数 K_{M,app} の関係は

$$K_{\rm M,app} = K_{\rm M} \frac{\gamma_{\rm M(II,MS)} \gamma_{\rm Li(0,Cd)}^3}{\gamma_{\rm M(0,Cd)} \gamma_{\rm Li(I,MS)}^3} = \frac{X_{\rm M(0,Cd)} X_{\rm Li(I,MS)}^3}{X_{\rm M(III,MS)} X_{\rm Li(0,Cd)}^3}$$
(3-4)
によって記述できる。ここで、Cd液相側への抽出に注目して、MとLiの二相間分配比Dを

$$D_{\rm M} = \frac{X_{\rm M(0,Cd)}}{X_{\rm M(III,MS)}}, \quad D_{\rm Li} = \frac{X_{\rm Li(0,Cd)}}{X_{\rm Li(I,MS)}}$$
 (3-5)

のように定義すれば、KM,appを以下のように書き換えられる。

$$\log K_{\rm M,app} = \log D_{\rm M} - 3\log D_{\rm Li} \tag{3-6}$$

活量係数γiがモル分率Xiによらず一定であるかぎり、KM,appは温度で決まる定数である。

しかし、とくに U (や Np) も含む系の最終状態では、 $X_{Li(0,Cd)}$ がかなり小さく、高い分 析精度で第二項の D_{Li} を決定できなかった。このため、 D_U と D_{Li} の実測値から式 3-6 で計 算された $K_{U,app}$ の値はかなりばらついた。

そこで、いずれの実験系内にも共存する Ce に対して、種々の最終状態で決定された Dce をもとに、

$$\log K_{\rm Ce,app} = \log D_{\rm Ce} - 3\log D_{\rm Li} \tag{3-7}$$

が一定と仮定して計算された DLiを、その条件下での DLiとした。これは、

$$\log \frac{D_{\rm M}}{D_{\rm Ce}} = \frac{K_{\rm M,app}}{K_{\rm Ce,app}}$$
(3-8)

の関係を仮定したことに他ならない。



Fig. 3-5 Amounts of target metals determined in LiCl-KCl and Cd phases after reductive extraction at various Li loads to Cd at 724 K ((a); in total, (b); separate phase) [9 by permission].

還元・抽出ののち、Cd 相と LiCl-KCl 相に分配された分離対象金属 M の定量結果を Fig. 3-5 に示した。(b)では各相別の M 量、(a)では両相合計の M 量をそれぞれ、M の初期仕込 み量との比として縦軸にとった。横軸には還元進行度の尺度として、Ce の分配比 Dce をと った。M の総和に対する Li 投入量を多くしたほど、最終状態の還元進行度が上がり、Dce も大きくなった。

Fig. 3-5(a)のように、還元・抽出前後における各金属の物質収支は 100 %に近く(85~115 %程度)、一連の実験データが有意であることを保証した。また Fig. 3-5(b)のように、いずれの金属量も還元進行度とともに溶融塩相では減少し、ほぼその分だけ Cd 相で増加した。

 $D_{\rm U}$ 、 $D_{\rm Np}$ 、 $D_{\rm La}$ と同一実験条件での $D_{\rm Ce}$ を、両対数プロットで Fig. 3-6 に示した。最小二 乗近似直線はそれぞれ

$\log D_{\rm U} = 1.051 \log D_{\rm Ce} + 1.748$	(3 - 9-U)
$\log D_{\rm Np} = 0.984 \log D_{\rm Ce} + 1.320$	(3-9-Np)

$$\log D_{\rm La} = 0.906 \log D_{\rm Ce} + 0.906 \tag{3-9-La}$$

で表され、いずれも傾き1と近似できる。したがって、(*D*_M/*D*_{Ce})の比は還元進行度にはよら ず、Mの種類で決まると判断できる。これらの直線の上下関係から、すなわち同一条件下で の*D*_Mの値から、U>Np>Ce>Laの順にCd相側への移行が進んでいることがわかる。これ はFig. 3-2に示した標準電位が高い順であり、平衡論的により還元されやすい貴な金属ほど、 酸化数0への還元と同時にCd側への抽出が進んだと推論できる。



Fig. 3-6 $D_{\rm U}$, $D_{\rm Np}$ and $D_{\rm La}$ compared with $D_{\rm Ce}$ after various reductive extraction conditions at LiCl-KCl|Cd-Li interface at 724 K [9 by permission].

さらに、この還元・抽出操作における各元素の二相分配能の指標として、Ce 基準の分離 係数を Table 3-2 に比較した。ここでは *D*_{Ce} = 1、すなわち Ce の 50 %が Cd 液相側へ移行 する条件下での $D_M を$ 、Mの分離係数と定義した。なお、これら D_M の値は Fig. 3-6 で傾き 1のフィッティング直線を引き直し、 $D_{Ce} = 1$ での切片とした。また、酸化還元平衡の成立 を前提として、これらの値から計算された $K_{M,app}$ も表中に記した。この表からも明らかな ように、この還元・抽出操作では、U > Np >> Ce > La の順に Cd 側への回収が進むので、 アクチノイドと希土類金属との分離への応用が期待された。

Table 3-2 The separation factors (Ce basis) for U, Np, and La upon reductive extraction at the LiCl-KCl|Cd-Li interface at 724 K with concerned apparent equilibrium constants $K_{M.app}$ [9 by permission].

М	${ m log}K_{\! m M,app}$	Separation factor
U	12.2	49
Np	11.8	22
La	10.1	0.41
Се	10.5 [2]	1.00

(3) DMの実測値と熱力学的推算値の比較

いま、すべての金属種に対して反応 3-2 の平衡が同時に成立しているので、Li に関する 項は共通である。したがって、*K*M,appの比は M に関する項だけとなり、Ce を基準に選べば、

$$\frac{K_{\rm M,app}}{K_{\rm Ce,app}} = \frac{X_{\rm M(III,MS)} X_{\rm Ce(0,Cd)}}{X_{\rm M(0,Cd)} X_{\rm M(III,MS)}} = \frac{K_{\rm M}}{K_{\rm Ce}} \frac{\gamma_{\rm M(III,MS)} \gamma_{\rm Ce(0,Cd)}}{\gamma_{\rm M(0,Cd)} \gamma_{\rm M(III,MS)}}$$
(3-10)

と書ける。反応 3·2 に対する活量ベースの平衡定数 KM は、その標準ギブズ自由エネルギー 変化ΔGM[°]と

$$-RT\ln K_{\rm M} = \Delta G_{\rm M}^{\circ} \tag{3-11}$$

の関係にあるので、KM/KCeの比は

$$-RT\ln\frac{K_{\rm M}}{K_{\rm Ce}} = \Delta G_{\rm M}^{\circ} - \Delta G_{\rm Ce}^{\circ}$$
(3-12)

で与えられる。Liに関する項はふたたび共通なので、MによるΔGM°の相違は

$$\Delta G_{\mathrm{M}}^{\circ} - \Delta G_{\mathrm{Ce}}^{\circ} = (\Delta G_{\mathrm{M(III,MS)}}^{\circ} - \Delta G_{\mathrm{M(0,Cd)}}^{\circ}) - (\Delta G_{\mathrm{Ce(III,MS)}}^{\circ} - \Delta G_{\mathrm{Ce(0,Cd)}}^{\circ})$$
(3-13)

で表せる。ここで、右辺におけるΔG°は化学種iの標準化学ポテンシャル(つまり標準生成 ギブズ自由エネルギー)であり、すべての温度においてΔGM(0)°をゼロと定める熱力学デー タベース[10]を用いたので、すべての温度で

$$\Delta G_{\rm M}^{\circ} - \Delta G_{\rm Ce}^{\circ} = \Delta G_{\rm M(III,MS)}^{\circ} - \Delta G_{\rm Ce(III,MS)}^{\circ}$$
(3-14)

となる。

以上の関係式を整理すると、

$$\log \frac{D_{\rm M}}{D_{\rm Ce}} = -\log \frac{\gamma_{\rm M(0,Cd)}}{\gamma_{\rm Ce(0,Cd)}} + \log \frac{\gamma_{\rm M(III,MS)}}{\gamma_{\rm Ce(III,MS)}} + \frac{\Delta G^{\circ}_{\rm M(III,MS)} - \Delta G^{\circ}_{\rm Ce(III,MS)}}{2.303 RT}$$
(3-15)

が導ける。右辺第3項分子のΔG゚は、各 MCl₃[l]の標準生成ギブズ自由エネルギーであるが、 これらは融点における MCl₃[s]のそれをデータベース[10]で調べ、MCl₃[l]を任意温度まで変 える際の変化分を加えて算出した。

また文献[11]にならって、種々のモル分率 XM(0,Cd)で電気化学セル

M[s]|LiCl-KCl-MCl₃[l]|Cd-M[l]|Ta[s] (3-16) の可逆起電力 U₃₋₁₆を測定し、

$$U_{3-16} = \frac{RT}{3F} \ln \frac{\gamma_{\rm M(0,Cd)} X_{\rm M(0,Cd)}}{1}$$
(3-17)

の関係式から Cd 相内の各金属 M の活量係数 ym(o, ca)を決定した。

さらに、種々のモル分率 XM(III,MS)で電気化学セル

$$M[s]|LiCl-KCl-MCl_{3}[l]|AgCl,Ag[s]$$
(3-18)

の可逆起電力 U_{3-18} を測定し、 $X_{M(III,MS)} = 1$ まで外挿した。この外挿値 $U_{X_{M(III,MS)}=1}$ と熱力学 データから計算される標準起電力 U° (すなわち $U_{aall=1}$)との差から、溶融塩相内の各 M(III) の活量係数₇M(III,MS)を次式で概算した(ここでは、 $X_{M(III,MS)} = 1$ において $a_{CI(-I,MS)} = 1$ との仮定 をおいた)。

$$U_{X_{\rm M(III,MS)}=1} - U^{\circ} = \frac{RT}{3F} \ln \frac{\gamma_{\rm M(III,MS)}}{1}$$
(3-19)

Table 3-3 にこれらの熱力学的データ(723 K)をまとめた。また、これらの値を用いて式 3-15 から算出される log*D*_{Ce}-log*D*_M 直線を、(*D*_{Ce},*D*_M)の実測値プロットと Fig. 3-7 で比較した。

UとLaについてこれらは、推算された直線上に実験値プロットがほぼ重なり、式 3-15 による予測が可能と考えられた。一方、Npについての実測値は推算値よりかなり小さかっ た。本研究では微量のNpを使用し、XNp(III,MS)=10-13程度の低濃度域で分配比を決定した ため、実験値のばらつきが大きく、測定誤差も大きくなった。

Table 3-3 Standard Gibbs free energies of formation of MCl_3 [1], the activity coefficient of MCl_3 in LiCl-KCl eutectic salt, and the activity coefficient of M in liquid Cd at 723 K [9 by permission].

М	$\Delta G_{ m MCl^3} ^{\circ}_{ m (kJ \cdot mol^{-1})}$	$\gamma_{\rm M(III.MS)}$	<i>Ү</i> м(0,Cd)
U	-687.8	$1.4\! imes\!10^{\!-\!2}$	$7\! imes\!10^1$
Np	-721.7	$3.5 imes 10^{-4}$	$7.3 imes 10^{-3}$
La	-875.7	$2.6 imes 10^{-2}$	$5.1 imes 10^{-10}$
Се	-858.1	$1.5 imes 10^{-2}$	$2.7 imes 10^{-9}$



Fig. 3-7 Thermodynamically predicted $\log D_{\rm M} - \log D_{\rm Ce}$ lines (slope = 1) compared with observed ($D_{\rm Ce}, D_{\rm M}$) plots after reductive extraction at the LiCl-KCl|Cd-Li interface at various Li loads at 723 K [9 by permission].

3-3-2 LiCl-NaCl 溶融塩 | 液体 Cd-Li 二相界面での還元・抽出
 Table 3-1中のSEx-1とSEx-2の実験から得られたデータを、それぞれFig. 3-8とFig. 3-9
 にまとめた。これらの図の横軸はLi金属の投入量とした。



Fig. 3-8 Amounts of target metals determined in LiCl-NaCl and Cd phases after reductive extraction at various Li loads to Cd at 865 K (SEx-1, (a); in total, (b); separate phase) [9 by permission].

Fig. 3-8(a)、Fig. 3-9(a)に見られるように、Uを除くNp、Y、La、Ce、Ndについては、還元・抽出前後での物質収支は、80%以上のほぼ満足できるレベルであった。これに対して、

とくに還元剤Liを少量加えた場合、Uの収支は60%近いレベルまで低下した。この主因は、 ICP-AES 分析のU測定波長(345 nm)におけるNdとの干渉誤差と推定される。



Fig. 3-9 Amounts of target metals determined in LiCl-NaCl and Cd phases after reductive extraction at various Li loads to Cd at 863 K (SEx-2 (a); in total, (b); separate phase) [9 by permission].



Fig. 3-10 $D_{\rm U}$, $D_{\rm Np}$, $D_{\rm Y}$, $D_{\rm La}$ and $D_{\rm Nd}$ compared with $D_{\rm Ce}$ after various reductive extraction conditions at LiCl-NaCl|Cd-Li interface at 863-865 K [9 by permission].

 $D_{\rm U}$ 、 $D_{\rm Np}$ 、 $D_{\rm La}$ 、 $D_{\rm Nd}$ と同一実験条件下での $D_{\rm Ce}$ を、両対数プロットでFig. 3·10に示した。希土類のY、La、Ndについては、UやNp不在下のSEx-1でのデータと、UとNp共在下のSEx-2でのデータとがほぼ一致している。つまり、希土類の二相分配に対して、UやNp共存の影響はないと判断できる。各金属に対する最小二乗近似直線は、それぞれ $\log D_{\rm Np} = 0.981 \log D_{\rm Ce} + 1.261$ (3·20-Np)

$-\log D_{\rm Y} = 1.003 \log D_{\rm Ce} - 1.423$	(3-20-Y)
$\log D_{\rm La} = 0.998 \log D_{\rm Ce} - 0.441$	(3-20-La)

 $\log D_{\rm Nd} = 0.991 \log D_{\rm Ce} + 0.125 \tag{3-20-Nd}$

で表され、いずれも傾き1と近似できた(前述の分析誤差のため、 D_{U} に対する同様の整理は 困難と判断した)。したがって、LiCl-NaCl|Cd系においても(D_{M}/D_{Ce})の比は還元進行度に はよらず、Mの種類で決まると判断できる。これらの直線の上下関係から、すなわち同一条 件下での D_{M} の値から、Np > Nd > Ce > La > Yの順にCd相への移行が進んでいることがわ かる。

そこで、この還元・抽出操作における各元素の二相分配能の指標として、Ce基準の分離 係数をTable 3-4に比較した。なお、これら D_M の値はFig. 3-10で傾き1のフィッティング直 線を引き直し、 $D_{Ce} = 1$ での切片とした。また、酸化還元平衡の成立を前提として、これら の値から計算された $K_{M,app}$ も表中に記した。この表からも明らかなように、この還元・抽出 操作ではNp >> Nd > Ce > La > Yの順にCd側への回収が進むので、LiCl-NaCl|Cd系の場 合もアクチノイドと希土類金属との分離に応用できる。

Table 3-4 The separation factors (Ce basis) for Np, Y, La, and Nd upon reductive extraction at the LiCl-NaCl|Cd-Li interface at 863 K with concerned apparent equilibrium constants $K_{M,app}$ [9 by permission].

Element	$\log\!K_{\mathrm{M,app}}$	Separation factor
Np	10.73	19.5
Y	8.04	0.04
La	9.00	0.37
Се	9.44	1.00
Nd	9.57	1.34

3-3-3 LiCl-NaCl | Cd-Li 系と同温度での LiCl-KCl | Cd-Li 系の比較

上述ではLiCl-KCl|Cd系とLiCl-NaCl|Cd系の実験温度が異なっていたので、ほぼ同じ 温度で比較するため、LiCl-KCl|Cd系での還元・抽出を860 K付近でも行った。Fig. 3-11 はほぼ同温度の両系における(*D*_{Li}, *D*_M)データを両対数プロットで比較したものである。Uや Npを含む系では還元進行度がさらに高く、*D*_{Li}を直接決定できなかったため、図中の対象金 属種は希土類のみである。

この図に見られるように、いずれの金属種に対するlog D_M もlog D_L とともに直線(傾き3) 的に上昇する傾向が認められ、式3-6の関係にほぼしたがった。またいずれの溶融塩系でも、 希土類のCd相側への移行は $D_{Nd} \ge D_{Ce} > D_{La} > D_Y$ の順に進み、分離選択性の序列は変わらな いが、LiCl-KCl|Cd系に比べLiCl-NaCl|Cd系での D_M の方が1桁程度小さい値となった。 このことは、UやNpのアクチノイドだけをCd相に抽出するという観点からは、 LiCl-KCl|Cd系の方が有利であることを示唆している(ただし、同じ温度での還元・抽出 を比較した場合)。

以上の結果を式3-6から考えると、(*K*_{M,app}/(*K*_{Li,app}³))の比を同温度で比較した場合、 LiCl-NaCl|Cd系の方が小さいことを示している。溶融塩中のNa+やK+が酸化還元反応に直 接関わることは考えにくく、LiCl-KCl塩とLiCl-NaCl塩でM種の活量係数の違いによる。 塩の組成により活量係数が変化した要因としては、たとえばカチオンサイズの相違により、 MCl5²⁻などのM(III)アニオンとの相互作用の強弱に差が生じた可能性などを考慮すべきで あろうが、本研究の視野からははずれる。





 D_{Li} の実測値は0.002~0.0001の領域にあり、とくに $X_{Li(0,Cd)}$ の値にあまり高い精度は期待 しにくい。そこで、ふたたびCeを基準として、両系での選択分離性を同温度で比較した。 LiCl-NaCl系についてのTable 3-4の比較対象として、860 K域のLiCl-KCl|Cd系における Ce基準の分離係数と $K_{M,app}$ をTable 3-5に示した。これらの表から、どちらの溶融塩系でも Ce基準の分離係数はほぼ同程度で、大きな相違はないことがわかる。 D_M の実測値が1から 大きくはずれる場合には、 $X_{M(0,Cd)}$ (とくに $X_{Y(0,Cd}$)や $X_{M(III,MS)}$ の値に分析誤差を見込む必 要がある。

以上の検討から、二相界面での還元・抽出における金属種(少なくとも溶融塩相中に残 したい希土類種)の二相分配比に対して、溶融塩Na+、K+の相違はほとんど影響しないと結 論した。

concerned apparent equilibrium constants $\Lambda_{M,app}$ by permission.							
Element $\log K_{M,app}$ Separation factor							
Y	9.10	0.02					
La	10.45	0.43					
Се	10.87	1.00					

10.90

1.07

Nd

Table 3-5 The separation factors (Ce basis) for Nd, Y, La and Nd upon reductive extraction at the LiCl-KCl|Cd-Li interface at 853 K with concerned apparent equilibrium constants K_{Max} [9 by permission].

最後に、本研究で求められたCe基準の分離係数を整理し、類似の二相界面における報告 例とTable 3-6に比較した。このうち59LiCl-41KClをMCl₃の溶媒とした773 K のデータは、 本著者の所属研究機関からの報告[6]で、本研究で得た値ときわめて近い(なお文献[6]は、 この学位論文に関わる原著論文に含まれていない)。また、多元系溶融塩溶媒での報告値[5] も773 Kにおけるもので、一方は23LiCl-10NaCl-32CaCl₂-35BaCl₂系、他方はLiCl-KCl- $7_{max}NaCl - 5_{max}CaCl_2 - 5_{max}BaCl_2$ 系である(wt%を使用して報告されているため、斜体数字 で組成表記を区別した)。

この表から、溶融塩 | Cd-Liの液相界面における金属Mの還元・抽出では、Ce基準で判断するかぎり、Cd側への抽出選択性がMの種類でおおむね決定され、溶融塩組成や温度の影響はあまり受けないものと考えられる。

	59	LiCl-41K	Cl	71LiCl– 29NaCl	23LiCl- 10 NaCl - 32 CaCl $_2$ - 35 BaCl $_2$	LiCl-KCl-NaCl $-CaCl_2-BaCl_2$
Temp.	$724~{ m K}$	773 K [6]	857 K	863 K	773 K [5]	773 K [5]
U	49	49			45	48
Np	22	26		20	21	
Pu		26			24	36
Am		45			15	17
Cm					13	21
Y		0.01	0.02	0.04		
La	0.41	0.37	0.43	0.37		
Ce	1	1	1	1	1	1
Nd		1.09	1.07	1.34	1.15	1.45

Table 3-6 Comparison of experimentally determined separation factors (Ce basis) for AN and RE elements at various molten salts | Cd–Li interface.

3-4 まとめ: 溶融塩 | Cd-Li 合金界面での還元・抽出による AN と RE の分離

溶融塩|液体 Cd-Li 界面での還元・抽出に関わる金属種の選択性を検討し、以下の結論 を得た。

- (1) 溶融塩相中の複数の酸化体金属種 M(III,MS)と Cd 相中の還元体リチウム Li(0,Cd)とが 界面で接触し、これらすべての酸化還元種に対する電子授受平衡が同時に成り立つ。標 準電位が高く貴な金属 M であるほど、(*a*M(III,MS)/*a*M(0,Cd))の活量比は小さく、M(0,Cd)と して Cd 側へ抽出分配される割合が多くなる。したがって、比較的貴なアクチノイドを Cd 側へ抽出し、比較的卑な希土類を溶融塩側に残す分離が原理的に可能である。
- (2) M の二相分配比である(X_{M(III,MS})/X_{M(0,Cd})のモル分率比は、標準生成ギブズ自由エネルギ ーおよび活量係数の熱力学データをもとに、計算で予測できる。
- (3) 溶媒溶融塩を構成する NaCl と KCl の違い、また還元・抽出温度の違いは、M の二相 分配比にほとんど影響を与えなかった。したがって、アクチノイドと希土類の塩化物に 随伴する NaCl (および報告例にあったアルカリ土類塩化物も含めて) は、LiCl-KCl 共晶塩を用いる還元・抽出において、金属分離性能を低下させることはないと判断され る。

3-5 還元・抽出による金属分離技術としての課題

希土類の中でもとくに比較的貴なものは、Cd 側への移行がかなり並行するため、現状の 操作条件では、単段の還元・抽出でアクチノイドと希土類を充分に分離できない。したが って、還元・抽出の多段化が不可欠であり、単段分離係数を用いたシミュレーションで多 段プロセスの分離能を推算した報告[7]がある。また、金属 Li に対する溶媒は異なるが、 LiCl-KCl|Bi-Li 系で 6 回操作を繰り返し、AN/RE = 2/1 まで分離した報告もある[8]。

高い金属最終分離能と高い効率を期待できるのは、溶融塩とCdの二流体を向流で接触させる装置であり、著者の所属機関で開発が現在進められている[14-15]。本論文の第5章では高温融体の流動と少量輸送をとり上げたが、そこで得られた知見は、向流方式の還元・抽出装置の設計にも有用である。

本章に関する投稿論文

T. Hijikata, M. Sakata, H. Miyashiro, K. Kinoshita, T. Higashi, and T. Tamai, "Development of pyrometallurgical parttioning of actinides from high level radioactive waste using a reductive extraction step", *Nucl. Technol.*, **115**, 114 (1996). 第3章の参考文献

- T. Inoue, M. Sakata, H. Miyashiro, T. Matsumoto, A. Sasahara, and N. Yoshiki, "Development of partitioning and transmutation technology for long-lived nuclides", *Nucl. Technol.*, 93, 206 (1991).
- [2] Y. Sakamura, T. Hijikata, K. Kinoshita, T. Inoue, T. S. Storvick, C. L. Kruger, J. J. Roy, D. L. Grimmett, S. P. Fusselman, and R. L. Gay, "Measurement of standard potentials of actinides (U, Np, Pu, Am) in LiCl–KCl eutectic salt and separation of actinides from rare earths by electrorefining", *J. Alloys. Compd.*, **592**, 271, (1998).
- [3] S. P. Fusselman, J. J. Roy, D. L. Grimmett, L. F. Grantham, C. L. Kruger, C. R. Nabelek, T. S. Storvick, T. Inoue, T. Hijikata, K. Kinoshita, Y. Sakamura, K. Uozumi, T. Kawai, and N. Takahashi, "Thermodynamic properties for rare earths and americium in pyropartitioning process solvents", *J. Electrochem. Soc.*, 146, 2573 (1999).
- [4] M. Sakata, M. Kurata, T. Hijikata, and T. Inoue, "Equilibrium distribution of rare earth elements between molten KCl–LiCl eutectic salt and liquid cadmium", J. Nucl. Mater., 185, 56 (1991).
- [5] T. Koyama, T. R. Johnson, and D. F. Fischer, "Distribution of actinides in molten salt / cadmium metal system", J. Alloys. Compd., 189, 37 (1992).
- [6] K. Kurata, Y. Sakamura, T. Hijikata, and K. Kinoshita, "Distribution behavior of uranium, neptunium, rare-earth elements (Y, La, Ce, Nd, Sm, Eu, Gd) and alkaline-earth metals (Sr, Ba) between LiCl–KCl eutectic salt and liquid cadmium or bismuth", J. Nucl. Mater., 227, 110 (1995).
- [7] K. Kinoshita, M. Kurata, and T. Inoue, "Estimation of material balance in pyrometallurgical paratitioning process of transuranic elements from high-level liquid waste", J. Nucl. Sci. Technol., 37, 75 (2000).
- [8] K. Uozumi, K. Kinoshita, T. Inoue, S. P. Fusselman, D. L. Grimmett, T. S. Storvick, C. L. Kruger, and C. R. Nabelek, "Pyrometallurgical partitioning of uranium and transuranic elements form rare earth elements by electrorefining and reductive extraction", *J. Nucl. Sci. Technol.*, **38**, 36, (2001).
- [9] T. Hijikata, M. Sakata, H. Miyashiro, K. Kinoshita, T. Higashi, and T. Tamai, "Development of pyrometallurgical partitioning of actinides from high level radioactive waste using a reductive extraction step", *Nucl. Technol.*, **115**, 114 (1996).
- [10] L. B. Pankratz, "Thermodynamic properties of halides", Bulletin 674, U.S. Bureau of Mines, Albany, OR(PB84-233329).
- [11] J. J. Roy, L. F. Grantham, D. L. Grimmett, S. P. Fusselman, C. L. Krueger, T. S. Storvick, T. Inoue, Y. Sakamura, N. Takahashi, "Thermodynamic properties of U, Np, Pu, and Am in Molten LiCl-KCl eutectic and liquid cadmium", *J. Electrochem. Soc.*, 143, 8, 2487 (1996).

- [12] L. Martinot and G. Duyckaerts, "Measure du potential standard du couple Np(III)/Np(0) dans l'eutecique LiCl-KCl enter 400 et 550 °C", Bull. Soc. Chim. Belg., 78, 495 (1969).
- [13] J. A. Plambeck, "Electromotive force series in molten salts", J. Chem. Eng. Data, 12, 77 (1967).
- [14] K. Kinoshita, T. Tsukada, and T. Ogata, "Single-stage extraction test with continuous flow of molten salt LiCl-KCl salt and liquid Cd for pyro-reprocessing of metal FBR fuel", J. Nucl. Sci. Technol., 44, 1557 (2007).
- [15] K. Kinoshita and T. Tsukada, "Countercurrent extraction test with continuous flow of molten salt LiCl-KCl salt and liquid Cd for pyro-reprocessing of metal FBR fuel", J. Nucl. Sci. Technol., 47, 211 (2010).

第4章 使用済金属燃料の電解精製と蒸留精製

4-1 背景:金属核燃料の乾式再処理

Fig. 1-10のように乾式分離では湿式再処理から発生する高レベル廃液中からMA(Minor actinoid: Np、Am、Cm)を乾式分離で塩化物に転換した後に、希土類と分離・回収して、 乾式再処理で金属燃料に混ぜて燃料に加工するが、本章ではその使用済金属燃料からUと PuおよびMAを回収して再生燃料とする乾式再処理について研究を行った。

使用済核燃料から核分裂生成物を分離後に回収される U と Pu は、原子炉燃料として再 利用できる。このような核燃料サイクルは、原子力発電による安定かつ持続的なエネルギ 一供給には欠かせない。現在商業的に行われている湿式再処理では、使用済酸化物→硝酸 塩→<精製、核分裂生成物除去>→酸化物の化学的プロセスで U や Pu が回収されている。

酸化物核燃料を対象とする湿式再処理サイクルに対して、金属核燃料の乾式再処理サイ クルも将来技術として注目されている[1]。水ではなく溶融塩を溶媒に使用する乾式再処理 では、使用済金属陽極→<溶融塩中で電解精製、核分裂生成物一部除去>→陰極上または 陰極内の析出金属→<揮発分離法で精製>→金属の化学的・電気化学的プロセスで U や Pu を回収する。その特長としては、① 装置の小型化が比較的に容易、② Pu を単離しにくい ので、核兵器拡散の抑制につながる、③ 長半減期核種の MA を廃棄することなく U や Pu とともに原子炉内に再度導き、より短半減期の核種に変換できるので、廃棄物の放射能レ ベル低下に有効、などがあげられている[2]。

すでに Fig. 1-12 に示したように、現在検討されている乾式再処理においては、高速増殖 炉の使用済金属燃料を陽極とし、核分裂生成物を溶融塩電解液中に残しながら、U を選択 的に固体(鉄)陰極上に電着させる。Pu は一部の U とともに液体(Cd)陰極内の合金成分と して回収する。固体陰極上の電析物に付着する電解液塩を揮発分離し、U 金属を得る。ま た、電解後の液体陰極から合金母体でもある Cd と混入した電解液塩とを揮発分離し、Pu-U 合金を得る。このようにして回収された U 金属と U-Pu 合金から高速増殖炉用の金属燃料 棒をつくる(溶融してから石英ガラスに射出鋳造)[2]。この乾式再処理に関しては、電解 をはじめ個々の工程を中心にこれまで研究が展開されており[3-4]、電解から蒸留までを連 続プロセスとして検討した報告例はほとんど見あたらない。

4-2 本研究の目的と概要

本研究では、上記の電解→蒸留の操作がひとつの連続プロセスとして成立することを実 証しようとした。

使用済金属燃料を模擬するには、AN(Actinoid:U、Np、Pu、Am、Cm)の金属が不可欠だが、金属 Pu は入手困難である。このため、金属 Li を用いて AN 酸化物を金属まで 還元する方法を選択した。Fig. 4-1 のように調製した金属 AN 混合物を模擬再処理対象として、電解精製から蒸留にいたる間の物質収支などを検討した。



Fig. 4-1 A series of material handling for U and Pu; (i) preparation of metallic U and Pu from their oxides, (ii) electrorefining of metals, and (iii) distillative purification of recovered metals. Data taken from [5].

4-3 実験方法:アクチノイド金属の調製、電解精製および蒸留精製

4-3-1 用いた試薬

59LiCl-41KCl (mol%)共晶組成塩、LiCl は APL(Anderson Physics Laboratories)社から 購入し、いずれも純度 99.9 %が保証された。Li 金属はレアメタリックから購入し、純度 99.9 %が保証された。UO₂および PuO₂は日本原子力研究開発機構から供給された。実験 に用いた塩化物は潮解性が高く、Li 金属も活性であるため、すべての操作をアルゴン雰囲 気 (水分、酸素 <1 ppm)のグローブボックス内で行った。

4-3-2 実験装置

(1) アクチノイド酸化物から金属への還元装置

溶融 LiCl 中での Li 還元によって、UO₂や PuO₂から金属 U や Pu が得られると報告さ れている[6-8]が、それらの実験規模は 10g以下であった。そこでさらに多くの金属 AN 収 量をめざして、Fig. 4-2 に示すような大小二重のタングステンるつぼ装置を構築し、アルゴ ングローブボックス内で Li 還元を行った。数+gの出発酸化物を入れた小るつぼを、大る つぼ内の LiCl 溶融塩中に浸漬したのち、金属 Li を溶融塩中に投入した。還元終了後、生 成金属の入った小るつぼを引き上げた。大るつぼ内の融液を撹拌し、酸化還元反応の促進 を図った。



Fig. 4-2 Chemical reduction of UO_2 and PuO_2 by Li metal in an LiCl molten salt [5 by permission].

(2) 電解精製装置

Fig. 4-3 に示す電解精製装置を、アルゴン雰囲気下の電気炉内にセットした。この装置では、固体鉄陰極と液体 Cd 陰極を切り替えることができ、AN 金属が生成した W 小るつぼをそのまま陽極に使用できる。有効電極表面積約 9 cm²の鉄棒を固体陰極とし、陰極面上に電着せずに落下した電析物を、ジルコニア製キャッチパンに回収した。また、窒化アルミニウム製るつぼに入れた液体 Cd 陰極の有効電極表面積は、8.5 cm²であった。Cd 表面上への電析を防止するため、Cd を撹拌(50 rpm)した。さらに、酸化溶出した U 種や Pu 種の濃度が陽極面付近で高くなるのを抑制するため、陽極るつぼを回転(100 rpm)させた。

Ag | [AgCl, Cl-] (59LiCl-41KCl 共晶塩に 1 wt%の AgCl を加えた三元系溶融塩中の Cl-) の可逆電極を溶融塩電解液に挿入し、電解中の陽極・陰極と Ag との電位差を測定した。以 下に示す電極電位は、すべてこの参照電極を基準としたものである。



Fig. 4-3 Electrorefining equipments with exchangeable solid Fe and liquid Cd two cathodes [5 by permission].

(3) 蒸留精製装置

乾式再処理における蒸留装置としては、下部加熱-上部回収のラボスケール装置[9-10] と、上部加熱-下部回収の工学スケール装置[11]がすでに検討されている。本実験では約 300gを揮発の対象とすることから、前者の下部加熱-上部回収方式を採用した。

Fig. 4-4 に示したように、蒸留精製装置を真空容器内にセットした。揮発用の加熱部は誘 導方式(10 kW、9.8 kHz)で、1870 Kまでの昇温能力をもつものを準備した。万一冷却 水が漏れて高温部と接触すると危険なため、無冷却で誘導コイルを使用した。誘導コイル の温度は最高実験温度でも773 K以下に維持され、熱的損傷のおそれは回避できた[6]。こ の装置の本体は①揮発部、②凝縮部、および③揮発部と凝縮部をつなぐ連結管の三つで構 成される。①では陰極析出物(固体鉄陰極上析出物と液体 Cd 陰極内析出物)を W るつぼ に入れ、誘導加熱の対象となる黒鉛で囲んだ。②では揮発上昇してきた塩や Cd を凝縮させ るコンデンサと、凝縮物を回収する底部のコレクターを配置した。揮発部、コンデンサ頂 上、およびコレクター部の温度を、それぞれ K 熱電対で計測した。

78



Fig. 4-4 Distillative purification system [5 by permission].

4-3-3 実験手順の詳細

(1) アクチノイド金属の調製

Fig. 4·2 に示したように、10~20 gの UO₂や PuO₂を入れた小 W るつぼを、大 W るつ ぼ内の 150 gの溶融 LiCl 中にしずめた。つぎに Li 金属を LiCl 中に入れて 10~30 時間反 応させたが、Li 量は AN 酸化物全量の還元に要する量の 110 %とした。UO₂ と PuO₂の Li 還元反応はつぎの反応式で記述できる。

$$UO_2 + 4Li = U + 2Li_2O \tag{4-1}$$

$$PuO_2 + 4Li = Pu + 2Li_2O \tag{4-2}$$

反応中の溶融塩をときどきサンプリングし、生成した Li₂O を定量することによって、反応進行度を経時的にモニターした。溶融塩中には Li₂O と Li 金属が溶解しているため、まず Li 金属と水との反応で発生した水素ガスをガスビュレットで定量した。また、この水相中の OH-イオンを塩酸標準溶液で中和滴定した。1 mol の Li 金属から 0.5 mol の H₂ と 1 mol の OH-が、また 0.5 mol の Li₂O から 1 mol の OH-が生成するので、[H₂, OH-]の分析データからサンプリング時点での Li₂O の物質量を計算した。

溶融塩中で Li₂O が増加しなくなった時点で反応終了と判断し、小るつぼを溶融塩から引き上げた。

(2) 電解精製

59LiCl-41KCl 共晶塩に約1 wt%の UCl₃を加えた三元系溶融塩約1 kg を、電解精製の 電解液に用いた。AN 金属の調製から電解精製にいたる実験の条件を Table 4-1 にまとめた。 UEd-1 から UEd-4 は UO₂の Li 還元から U 金属の電解精製(773 K)である。Fig. 4-3 に示 した固体鉄陰極を電解液中に浸漬し、陽極から酸化溶出した U 種を電気化学的に還元・析 させた。1Aの一定電流で電解したが、陽極電位が上昇(鉄の溶解開始電位を目安とした) してからは、50 mA まで徐々に電流を減少させた。

PEd-1 は PuO₂を対象としたもので、第一段階の電解では Pu を陽極溶出させると同時に、 溶存 U 種を固体鉄陰極上に選択的に電析した。U 種約 0.05 wt%、Pu 種約 0.8 wt%でスタ ートする第二段階の電解では、Pu の陽極溶出を続けると同時に、切り替えた液体 Cd 陰極 内に Pu を(一部の U とともに)に還元・収容した。陽極電位-1.3 V で 500 mA の電解条 件から陽極電位-0.7 V で 50 mA まで徐々に速度を下げながら、電流規制で精製を行った。

Run	Starting oxide	Theoretical amount of metal	Required amount of electricity (kC)
UEd-1	$\mathrm{UO}_2,10.3~\mathrm{g}$	U, 9.1 g	14.7
UEd-2	$\mathrm{UO}_2,10.3~\mathrm{g}$	U, 9.1 g	10.5
UEd-3	$\mathrm{UO}_2,10.0~\mathrm{g}$	U, 8.9 g	12.4
UEd-4	UO_2 , 10.4 g	U, 7.4 g *	11.8
UEd-5	$\mathrm{UO}_2,20.7~\mathrm{g}$	U, 18.3 g	_
PEd-1	PuO_2 , 18.4 g	Pu, 16.2 g	10.3

Table 4-1 Consecutive experiments from AN oxides to AN metals. Data taken from [12].

*: removed partially for analysis

(3) 蒸留精製

固体鉄陰極上の析出物を機械的に剥がし、蒸留用のWるつぼに移した。Fig. 4-4 に示し たように、このるつぼを黒鉛の発熱体内に置いて、連結管・コレクター・コンデンサを順 に積み上げた。蓋を取り付け、チャンバー内を1 kPa 以下まで減圧した。減圧状態を維持 しながら、揮発部を1273 Kまで昇温し、蒸発した塩を凝縮・回収した。電着したU金属 はデンドライト構造のため、内部に包含された塩も除去するため、1673 K(または1573 K) まで昇温し、30分間保持してから降温した。Wるつぼ、連結管、コンデンサ、およびコレ クターの蒸留前後での重量変化から、揮発量や不揮発残留量を求めた。

一方、電解精製時に AlN るつぼ内に収めた Cd 陰極は、溶融状態で蒸留用 W るつぼに移した。以後の操作は上と同様の手順で行った。

4-4 結果および考察:アクチノイド金属の電解精製および蒸留精製

- 4-4-1 LiCl-KCl 溶融塩中での電解精製
- Uの電解精製

UEd-2の電解精製中における陽極電位と陰極電位の経時変化を Fig. 4-5 に示した。陰極 電位は比較的変動せず、-1.54~-1.39Vの範囲にあった。この溶融塩中でUCla濃度が1wt% のとき、U|U³⁺平衡電位は約-1.4 V と報告されている[13]ことから、鉄陰極上では U(III) から U(0)への還元が進行していると判断できる。一方、陽極電位は-1.4~-0.8 Vまで変動 している。本実験では、陽極の W るつぼを 18-8 ステンレス鋼製の治具で固定しており、 ステンレスも電解液に直接触れている。U の酸化溶解が困難となり、陽極電位が上昇する 状況では、鉄の酸化溶解が並行するおそれがあるため、陽極電位が-0.8 V まで上昇した時 点で設定電解電流を小さくした(Fig. 4-5 上図)。さらに、開始4時間以降では陽極電位が 上下しているが、これらは電解を一時的に中断したことに起因する。酸化溶解した U(III) が陽極表面近くにとどまり、W るつぼ内の溶融塩でその濃度勾配が大きくなっているおそ れがあった。そこで、陽極電位が-0.8 V まで上昇した時点で電解を中断し、陽極るつぼを 回転させながら陽極開回路電位が U|U³⁺の平衡電位付近までもどるのを待ってから、電解 を再開した。このように陽極電位の変動が大きいのは、リチウム還元で用いた W るつぼを そのまま陽極としているために W るつぼ内と電解の浴塩と間に U の濃度勾配が生じること や持ち込まれた Li2O からの酸素により一部 U の酸化によるものと推定された。陽極 U の 初期量すべてが溶解・回収されたと判断できるまでに要した合計の通電電気量は、10.5 kC であった。

Uの陽極溶解・陰極析出反応は次式のように表せる。

Anode :
$$U(0,U) = U(III,MS) + 3e^{-}$$
 (4-3A)

Cathode : U(III,MS) +
$$3e^- = U(0,Fe)$$
 (4-3C)

このような3電子反応を前提に電解精製の合計通電電気量から陰極上へのU回収量を計算 すると、UEd-2では8.63gとなる。他のRunでもほぼ同様に電解精製を行った。



Fig. 4-5 Anode and cathode potentials during controlled-current electrorefining in an LiCl-KCl molten salt at 773 K (UEd-2).

Fig. 4-6 に示したように、鉄陰極上に得られた U 電析物はデンドライト状で、紫色や白色の塩が付着していた。Table 4-2 に示すように、陰極上に付着した物質の質量は、電解電気量から計算される U 析出量をかなり上回った。そこで、電解液塩を揮発除去したのち(蒸留精製の詳細は 4-4-2 に述べる)、U だけの析出量を調べ、電解精製における U(III)種の還元電着の電流効率を決定した。

この結果、陰極反応式 4-3C の電流効率は最低でも 68 %が確保されており、充分ではないがほぼ満足できるレベルにあった。また、電着 U 金属とほぼ同質量の電解質塩が陰極に付着していたが、付着塩/電着 U の比を下げるためには、電着する U 粒子群の形態に注目する必要がある。本研究の電解条件下では、陰極に析出した U はすべてデンドライト形状であったが、電解精製浴中の U 濃度を高く設定電圧を低くするほど、そのサイズは大きくなる傾向が認められた。U 析出物が粗大化するほど、その内部への電解質塩の巻き込みも少なくなった。

Table 4-2 Summary of electrorefining experiments for U and Pu. Data taken from [12].

Run	Theoretical deposit (g)*	Cathode mass gain (g)	Found deposit (g)	Cathode current efficiency (%)	Adhered salt on cathode (mass %)
UEd-1	12.1	15.5	8.6	71	45
UEd-2	8.6	16.6	7.1	83	57
UEd-3	10.2	17.7	6.9	68	61
UEd-4	9.7	20.9	9.1	94	56
PEd-1	8.5	11.7	6.5	76	_



* based on total amount of electrorefining charge

Fig. 4-6 A photograph of the obtained deposits on cylindrical iron cathode in UEd-1. Data taken from [12].

Pu の電解精製

PEd・1 の電解精製中における陽極電位と陰極電位の経時変化を Fig. 4-7 に示した。金属 Pu 回収前の処理として、電解液中に陽極から Pu(III)種を供給(約 0.8 wt%)すると同時に、 すでに溶存した U(III)種を鉄陰極上に還元・析出させて除去した。開始から約 15 min 後に 切り替えた Cd 陰極の電位は比較的変動せず、-1.36~-1.28 V の範囲にあった。これは Pu(III)から Pu(0)への還元電位とされている-1.35 V[13]に近く、Pu(0)が Cd 中に侵入して いると判断された。一方、陽極電位の上昇に対しては、U の電解精製の場合と同様の電流 調整を行った。陽極が限界電位-0.7 V に到達した時点で、電解電流を段階的に電流を小さ くした。また 7~9 時間後では、陽極電位-0.7 V 到達時点で電解中断・陽極るつぼ回転、-1.30 V 回復時点で電解再開、の操作を繰り返した。電解精製完了までの積分電気量は、10.3 kC であった。この場合、電解精製の陽極、陰極反応はそれぞれ以下のように表せる。

Anode :
$$Pu(0,Pu) = Pu(III,MS) + 3e^{-}$$
 (4-4A)

Cathode : Pu or U(III,MS) + $3e^-$ = Pu or U(0,Cd) (4-4C)

積分電気量から計算される金属 Pu (ごく一部 U が随伴)の陰極回収量は 8.5 g 程度であ るが、電解精製前後の陰極質量増加はこの値をかなり上回り、付着した電解質塩を除去し ないと定量的議論は困難であった。



Fig. 4-7 Anode and cathode potentials during controlled-current electrorefining in an LiCl-KCl molten salt at 773 K (PEd-1).

電解精製後に冷却・固化した Cd 陰極ユニットの写真を、Fig. 4-8 に示した。AlN 陰極る つぼ内部をさらに解体して調べると、デンドライト状の析出物は認められず、電解還元で 生成した Pu や U は Cd 中に合金化していると考えられる。この Cd 陰極合金と付着塩を一 部サンプリングし、硝酸で溶解後、ICP-AES 分析で定量した。Cd 合金中の U 濃度は 0.8 wt%、 Pu 濃度は 6.1 wt%で、(U/Pu)比は 0.13 となった。一方、電解液中の(U/Pu)金属比は 0.063 (= 0.05 wt%/0.8 wt%)であったので、Cd 陰極内への回収に際して U(III)の優先性が認められる。金属原子のみの質量 m を用いて Pu(III)に対する U(III)の選択的還元回収性を

 $F_{\rm U/Pu} = \frac{m_{\rm U(0,Cd)}}{m_{\rm Pu(0,Cd)}} / \frac{m_{\rm U(III,MS)}}{m_{\rm Pu(III,MS)}}$ (4-5)

のように表記すれば、この PEd-1 では 2.1 となる。類似の LiCl-KCl | Cd 系における U と Pu の競争的電析でも、これに近い 1.9~2.4 の値が報告されている[15]。このように、Pu より貴な U が優先的に Cd 陰極面で還元されたと判断される。

PEd-1 終了後、Cd 陰極中に電析・収容された金属の質量は、Table 4-2 のように 6.5 g であった(Cd 合金母体や付着塩の除去については 4-4-2 に後述する)。この大半(88 %)は Pu であるので、Pu 電析の電流効率を電解精製の合計電気量から概算すると、75 %程度で あった。この値は UEd-1 から UEd-4 で求まった U 電析の電流効率(68~94 %)と同程度 で、電解精製に実用可能なレベルと判断される。



Fig. 4-8 A photograph of the pulled-up Cd cathode unit in PEd-1 after cooling. Data taken from [12].

4-4-2 陰極析出金属の蒸留精製

(1) 鉄陰極上の析出金属 U の蒸留精製

UEd-1からUEd-4の電解精製後、鉄陰極から剥ぎとった析出物を蒸留した。また、UEd-5でUO2を金属Liで還元したのちのWるつぼを、そのまま蒸留装置に置いた。

Fig. 4-9 に揮発るつぼ温度、ノズル温度、内部圧力の経時変化の一例を示した。ここでの 対象は UEd-4 の電析物である。上図のように、間欠的な排気で圧力を1kPa以下に維持し た。陰極析出物の場合は、るつぼ温度 1250 K 付近でノズル温度の急上昇が起こった。これ は LiCl-KCl 共晶塩の揮発温度に近いので、るつぼがこの温度に達した時点で溶融塩成分の 揮発が始まったと判断される。金属 U の融点 1405 K [16]より高い 1673 K に保持し、U 粒 子を融解させた。

このほか、UEd-1~UEd-3、UEd-5の蒸留でも、ほぼ同じ温度で塩が揮発し、Uを1573~1673 K で融解させた。



Fig. 4-9 Distillative purification of the cathode deposits in UEd-4; temperature at the evaporation crucible, temperature at the nozzle, and the regulated chamber pressure by intermittent evacuation. Data taken from [12].

蒸留精製後の揮発るつぼの写真を Fig. 4-10 に示した。るつぼを U の融点 1405 K 以上ま で昇温したにもかかわらず、融解していない金属が認められた。とくに UEd-4 のるつぼで は、上部がスポンジ状の金属で覆われていた。この原因としては、UO2の混入による融解 温度の上昇が疑われる。U-UO2二元系の相図[17]によれば、UO2が 0.02 mol%混入すると 融解温度は 2073 K まで、2 mol%の場合は 2673 K まで高くなる。したがって、0.01 mol% 程度であっても、最高るつぼ温度 1673 K では融解しない可能性がある。



UEd-1 (1673K)

UEd-2 (1573K)

UEd-3 (1673K)

UEd-4 (1673K)

Fig. 4-10 The appearance of an evaporation W crucible after distillative purification in UEd-1, 2, 3 and 4. [12 by permission].

UO2混入の原因を以下のように推論した。UO2を出発物とする一連の本実験では、Li還 元で調製した U 金属を洗浄することなく電解精製陽極に用いた。このため、Fig. 4-11 に示 すように、Li 還元時の副生成物 Li2O が陽極に随伴し、電解精製の電解浴塩に溶解する。こ の Li₂O が電解精製浴中で O2-源となり、UO₂の生成をともなう U(III)の不均化

 $4UCl_3 + 6Li_2O \rightarrow U + 3UO_2 + 12 LiCl$

(4-6)

を促進した可能性がある。

とくに本研究では、電解精製の溶融塩浴を実験ごとに更新することなく用いたので、 UEd・1 から UEd・4 へと精製を進めるたびに、電解精製浴中に Li₂O が持ち込まれ、UO₂の 量は増加すると推論される。Fig. 4-10 の写真で右側のものほど融解しない金属粒子が顕著 に見られたことは、以上の推論を支持している。したがって、もしも U 酸化物→U 金属→ 電解精製→蒸留精製を連続プロセスとして考えるならば、Li 還元時に生成する Li₂O を何ら かの方法で除去し、最終的に U 金属のインゴットを得ることが望ましい。





(2) Cd 陰極内の析出金属 Pu の蒸留精製

PEd-1 の蒸留精製過程における諸条件を Fig. 4-12 に示した。この場合には、るつぼ温度 730 K 付近からノズル温度の上昇が始まった。Cd の沸点は 1040 K と知られているが[16]、 減圧条件下であるため、このるつぼ温度で Cd が揮発し始めたと判断した。るつぼ温度 1230 K 付近からノズル温度が再度上昇したが、これは上述の場合と同様に溶融塩成分の揮発に 起因する。Pu の融点 913 K [16]と U の融点 1405 K [16]より充分高い 1673 K で、揮発る つぼを 30 min 保持した。



Fig. 4-12 Distillative purification of the Cd cathode in PEd-1; temperature at the evaporation crucible, temperature at the nozzle, and the regulated chamber pressure by intermittent evacuation. Data taken from [12].

Fig. 4-13(a)のように、蒸留後の揮発るつぼ内面は金属でぬれており、金属塊の表面も平 滑であったことから、回収された合金 5.0 g は完全に融解したと判断できる。しかし、 Fig.4-13(b)のように、1.5 g の合金がノズル下面にも付着した。ノズルの位置まで合金が跳 ね上がった原因としては、誘導加熱で揮発るつぼを急激に昇温したため、溶融合金の突沸 が推定される。したがって、揮発るつぼからの目的金属の散逸は、蒸留精製条件の最適化 によって抑制できると予想される。





(a) Evaporation crucible (b) Nozzle (bottom surface) Fig. 4-13 The appearance of (a) evaporation crucible and (b) nozzle surface in PEd-1, blue arrows indicate Pu–U alloy.

4-4-3 リチウム還元・電解精製・蒸留精製の連続プロセスにおける金属収支 酸化物のリチウム還元、電解精製、蒸留精製の一連プロセスにおける物質収支を Table 4-3 にまとめた。このうち UEd-5 のみでは、リチウム還元の生成物を電解精製せず、そのまま

蒸留精製した。Uについては、出発酸化物中の約80%以上を揮発るつぼ内に残る金属として回収できた。各ステップごとのU収率は実験的に求めていないが、UEd-5の総合収率を見ると、リチウム還元ステップも蒸留精製ステップもほぼ100%のU収率を期待できる。 一方、電気量ベースで算出される電解精製ステップ以降の金属U収率は、Table 4-2のように70~95%前後であった。したがって、Uの総合収率が100%に達しない原因は、おもに電解精製ステップでのロスと推測される。とりわけ陽極電位の上昇が著しかったことは、電解精製完了の判定条件の見直しを含めて、さらに今後の検討が必要である。なお、UEd-4での総合収率が100%を大幅に超えてしまったが、リチウム還元生成物の分析に際して取り出したサンプル量を過大に見積もったおそれが考えられる。以上の結果から、UO2から精製U金属にいたる一貫プロセスを、80%近いU総合収率で実証することができた。

一方、PuO2から出発した PEd-1 では、Pu 総合収率が 40 %にも低下した。この主因も 電解精製ステップにあり、Pu 電析には電解浴中の塩組成を 59LiCl-41KCl-UCl₃ から 59LiCl-41KCl-UCl₃-PuCl₃にするが必要があり、Cd 陰極の前電解において U を固体鉄陰 極上に析出させ、塩中の Pu(III)濃度を上げた。したがって、陽極から溶出した Pu(III)の全 量が Cd 陰極内に収容されたわけではない。前電解分を除いた電気量ベースで算出された電 解精製ステップ以降の金属 Pu 収率は、Table 4-2 のように 75 %程度であった。この原因と しては、電解精製完了の判定条件とは別に、陰極 Cd 合金を移動する際のロスがある。

Table 4-3 Material balance in Integrated experiment of reduced UO_2 and PuO_2 . Data taken from [12].

Run	Starting oxide (g)	Metal, initial* (g)	Metal, after distillation (g)	Metal recovery in whole process (%)
UEd-1	UO_2 , 10.3	U, 9.1	U, 8.6	95
UEd-2	UO ₂ , 10.3	U, 9.1	U, 7.1	78
UEd-3	UO ₂ , 10.0	U, 8.9	U, 6.9	78
UEd-4	UO ₂ , 10.4	U, 7.4**	U, 9.1	123
UEd-5***	UO_2 , 20.7	U, 18.3	U, 19.5	106
PEd-1	PuO ₂ , 18.4	Pu, 16.2	Pu, 6.5	40

* calcd. based on complete reduction

** partially removed for analysis

*** chemically reduced products were distilled directly

Cd 合金を電解精製の陰極 AlN るつぼから蒸留用の W 揮発るつぼに移したが、全量の移動は困難で、Fig. 4-14 のように AlN るつぼに合金の一部が残留した。また比較的少量ではあるが、鉄製の陰極リード兼撹拌羽根の表面にも合金が付着した。固体鉄陰極、AlN 陰極るつぼ、さらに陰極リードから Pu の回収を図れば、Pu 総合収率の向上を期待できるが、現状では困難である。また本研究では、PuCl₃の入手が困難なため、UCl₃塩と前処理用鉄陰極を利用して Pu の電解精製を開始したが、この点にも改良の余地が残っている。以上の結果から、PuO₂から精製 Pu 金属にいたる一貫プロセスを、実用レベルには達しない Pu総合収率ではあるが、実証することができた。

88



(a) After electrorefining (b) After transportation Fig. 4-14 The appearance of AlN cathode crucible before and after Cd alloy transportation to an evaporation crucible.

4-5 まとめ:アクチノイド金属の電解精製および蒸留精製

金属核燃料の再処理を主目的として、アクチノイド金属の電解精製と蒸留精製の連続プ ロセス化を検討した。アクチノイド金属も酸化物から調製・準備したため、アクチノイド 酸化物のリチウム還元→電解精製→蒸留精製の三連続プロセスでの実験となった。したが って本章で得た以下の結論は、酸化物核燃料の再処理にも適用できる可能性がある。

- (1) リチウム還元→電解精製→蒸留精製の連続プロセスにより UO2や PuO2から金属 U や Puを回収できることを実証できた。本実験における金属の総合収率は、Uに対して 75% 以上、Pu に対して 40%程度であった。
- (2)金属の総合収率が100%に達しない主因は、電解精製ステップでのロスと考えられ、陽極での完全溶解と溶融塩電解液から鉄陰極上(Uの場合)、Cd陰極内(Puの場合)への完全回収とを含めて、電解条件や電解精製完了の判定条件を見直す必要がある。なおPuの場合には、実験上の都合で一部を固体鉄陰極上にまず析出させたため、今回は低収率となったが、電解精製浴の前処理を必要としない定常運転では、電解精製ステップ以降の金属収率として75%程度が期待できる。
- (3) 電解精製 U に付着した電解質塩を揮発除去することで、蒸留精製 U を得たが、それを 融解させてインゴットとすることは一部困難であった。その原因は UO₂ の混入による 融点上昇と推定された。
- (4) 電解精製後の Cd-Pu-U 陰極合金を蒸留精製用揮発るつぼに移す過程でロスが発生し、 改善の必要がある。

本章に関する原著論文

T. Hijikata, T. Koyama, T. Usami, S. Kitawaki, T. Shinozaki, and M. Fukushima, "Recovery of uranium and plutonium metals through cathode processing of electrodeposits from reduced oxide fuel anodes", The Royal Society of Chemistry 'Recent Advances in Actinide Science' 650 (2006). 第4章の参考文献

- [1] Y. I. Chang, "The integral fast reactor", Nucl. Technol., 88, 129 (1989).
- [2] T. Koyama, T. Ogata, Y. Sakamura, and H. Kobayashi, "Pyroprocess and metal fuel development for closing cycle with reduced waste burden", *Proc. Global 2009*, September 6-11, Paris, France, 1261 (2009).
- [3] T. Koyama, M. Iizuka, Y. Shoji, R. Fujita, H. Tanaka, T. Kobayashi, and M. Tokiwai, "An experimental study of molten salt electrorefining of uranium using solid iron cathode and liquid cadmium cathode for development of pyrometallurgical reprocessing", J. Nucl. Sci. Technol., 34, 384 (1997).
- M. Iizuka, T. Koyama, N. Kondo, R. Fujita, and H. Tanaka, "Actinides recovery from molten salt/liquid metal system by electrochemical method", *J. Nucl. Mater.*, 247, 183 (1997).
- [5] T. Hijikata, T. Koyama, T. Usami, S. Kitawaki, T. Shinozaki, and T. Kobayashi, "Integrated experiments to demonstrate electrometallurgical pyroprocess of metal and oxide fuel", *Proc. Global 2003*, November 16-20, New Orleans, LA, USA, 763 (2003).
- [6] T. Usami, M. Kurata, H. E. Sims, S. A. Beetham, and J. A. Jenkins, "Pyrochemical reduction of uranium dioxide and plutonium dioxide by lithium metal", *J. Nucl. Mater.*, 300, 15 (2002).
- [7] 宇佐見剛,加藤徹也,倉田正輝,井上正,H.E.Sims, and J.A.Jenkins, "リチウム還 元工程におけるアクチニド元素の挙動(2) – Am, Np を還元できる条件の定量と MOX ペレットの還元挙動の評価–",電力中央研究所報告書, T00020,4月 (2001).
- [8] T. Usami, T. Kato, M. Kurata, T. Inoue, H. E. Sims, S. A. Beetham, and J. A. Jenkins, "Lithium reduction of americium dioxide to generate americium metal", *J. Nucl. Mater.*, **304**, 50 (2002).
- [9] M. A. Vest, E. F. Lewandowski, R. D. Pierce, and J. L. Smith, "Development of a bench-scale metal distillation furnace", *Nucl. Technol.*, **120**, 232, (1997).
- [10] M. A. Vest, G. K. Johnson, R. D. Pierce and E. J. Wesolowski, "Operation of a bench-scale metal distillation furnace", *Nucl. Technol.*, **120**, 243 (1997).
- [11] A. R. Brunsvold, P. D. Roach, and B. R. Westphal, "Design and development of a cathode processor for electrometallurgical treatment of spent nuclear fuel", *Proc. ICONE-8*, April 2-6, Baltimore, MD. USA (2000).
- [12] T. Hijikata, T. Koyama, T. Usami, S. Kitawaki, T. Shinozaki, and M. Fukushima, "Recovery of uranium and plutonium metals through cathode processing of electrodeposits from reduced oxide fuel anodes", The Royal Society of Chemistry 'Recent Advances in Actinide Science', 650 (2006).
- [13] Y. Sakamura, T. Hijikata, K. Kinoshita, T. Inoue, T. S. Storvick, C. L. Kruger, J. J. Roy, D. L. Grimmett, S. P. Fusselman, and R. L. Gay, "Measurement of standard potentials of actinides (U, Np, Pu, Am) in LiCl–KCl eutectic salt and separation of actinides from rare earths by electrorefining", *J. Alloys. Compd.*, **592**, 271, (1998).

- [14] T. Koyama, T. Hijikata, T. Usami, T. Inoue, S. Kitawaki, T. Shinozaki, M. Fukushima, and M. Myochin, "Integrated experiments of electrometallurgical pyroprocessing using plutonium oxide", *J. Nucl. Sci. Technol.*, 44, 382 (2007).
- [15] K. Kinoshita, T. Koyama, T. Inoue, M. Ougier, and J. P. Glatz, "Separation of actinides from rare earth elements by means of molten salt electrorefining with anodic dissolution of U-Pu-Zr alloy fuel", *J. Phys. Chem. Solids*, 66, 619 (2005).
- [16] O. K. Kubachewski and C. B. Alock, "Metallurgical thermochemistry (5th Ed.)", Pergamon Press (1979).
- [17] A. E. Martin and R. K. Edwards, "The uranium-uranium dioxide phase diagram at high temperatures", J. Phys. Chem., 69, 1778 (1965).

第5章 高温融体の輸送を前提とする電解精製・蒸留精製プロセス

5-1 背景:実用プロセスにおける高温融体輸送の優位性

第4章では、金属核燃料の乾式再処理プロセスが成立することを、LiCl-KCl系溶融塩中 での電解精製ステップと蒸留精製ステップを連続したラボスケール試験で示した。一方、 乾式再処理を実用的に行うには、各ステップやステップ間における各種装置の最適化が必 要となる。このため、「高速増殖炉サイクルの実用化戦略研究フェーズII技術検討書(2) 燃料サイクルシステム」においても、乾式再処理の課題として装置工学的技術の確立があ げられている[1]。

すでに Fig. 1-12 に示したように、使用済金属燃料を電解精製の陽極とすると、U や Pu のほかに希土類をはじめとする多種類の核分裂生成物も電解浴中へ酸化溶解し、白金族は 溶解せずに粒子として脱落する。溶解した U と Pu は陰極に回収されるが、多くの核分裂 生成物は電解浴中に蓄積されるので、微粒子が分散した電解浴塩スラリーをリフレッシュ ループに回す必要がある。とりわけ ¹³⁷Cs や ⁹⁰Sr 濃度が上昇すると、それらの自己崩壊熱 で電解浴温度の制御が困難となる。

ラボスケールの電解精製・蒸留精製では溶融塩や陰極 Cd 合金をいったん凝固させ、次の ステップに移してから再溶融することもできる。しかし、大量の溶融塩や Cd 合金を対象と する実用プロセスでは、冷却・再加熱の煩雑さや凝固体のハンドリングが容易ではないこ とから、溶融塩や Cd 合金を高温融体のまま次のステップに移送することが望まれる。ここ では、溶融塩(およびそのスラリー)や溶融 Cd 合金の流動特性を検討し、最適な高温融体 輸送条件を見いだすことが、実用装置設計上で不可欠となる。

これまで、原子力発電に関わる高温融体輸送の研究例としては、溶融塩原子炉における 溶融塩循環ループ[2]や高速増殖炉における Na 循環ループ[3]がある。しかしこれらの研究 は、原子炉冷却用の液体を対象とするもので、乾式再処理装置で求められる流量より桁違 いに多い。また、乾式再処理プロセス機器は密閉空間(ホットセルと呼ばれる)内への収 容が必要なため、ポンプなどの輸送補機の小型化も要求され、原子炉冷却用の高温融体大 量輸送技術をそのまま転用するのは困難である。

5-2 電解精製・蒸留精製プロセスにおける高温融体の輸送

5-2-1 対象となる高温融体と輸送区間

乾式再処理プロセスにおいて高温融体の輸送が望まれるステップを、Fig. 5-1 に示した。 上下向きの青矢印のように、電解精製浴中に蓄積された核分裂生成物を除去するため、溶 融塩電解液を還元・抽出部に導き、液体 Cd-Li と向流にしてアクチノイド(AN:U、Np、 Pu、Am、Cm)を液体 Cd 内に還元・抽出する。その後、溶融塩をゼオライトカラムに導 き、核分裂生成物を吸着・除去する。この溶融塩を電解精製浴にそのままもどすとアクチ ノイド濃度を低下させるため、液体 Cd 内に採取した AN をこの溶融塩中に再度酸化溶解 (CdCl₂を用いる酸化反応で、逆抽出工程と呼ばれている)させてから、電解精製浴にもどす。

一方、赤矢印のように、陰極で得られる AN-Cd 合金を液体のまま蒸留精製部に導き、揮 発後凝縮した液体 Cd を電解精製陰極るつぼにもどす。また左向き青矢印のように、鉄陰極 上の電析 U に随伴して蒸留精製部に持ち込まれた (これらは固体状態で輸送) 電解浴塩は、 揮発分離後に凝縮させ、溶融塩として電解精製浴へ逆流する。このように、高温融体輸送 を前提とした陰極回収金属の蒸留精製ループと電解精製浴塩からの核分裂生成物除去ルー プを設けることによって、固体の搬送をほとんど必要としない乾式再処理の電解精製・蒸 留精製一貫プロセスの実現が期待されている。



Fig. 5-1 A flow-diagram of pyrometallurgical reprocessing [4 by permission].

5-2-2 高温融体の流量と最高流路揚程:想定される乾式再処理実用プラント

「高速増殖炉サイクルの実用化戦略研究 フェーズII技術検討書(2)燃料サイクルシステム」[1]で想定されている乾式再処理実用施設の規模をもとに、単位時間あたりの処理量から高温融体の必要流量を概算し、Table 5-1 に示した。電解精製部から核分裂生成物除去ループへ、また核分裂生成物除去ループから電解精製部からへと6日に1回ずつ浴溶融塩全量の3.5%にあたる67Lを輸送するが、これを1hで完了するには、流量1.1L・min⁻¹が必要となる。また、蒸留精製部では陰極Cd合金から毎日AN 5.6kgを回収するが、2wt%のANを含む陰極Cd合金330kg(35L)を電解精製部から1hで搬出完了するには、流量0.6L・min⁻¹が必要となる。さらに、鉄陰極上の析出物を毎日150kg蒸留精製するが、20

wt%の付着溶融塩 30 kg (18 L)を電解精製部へ1h で還流完了するには、流量 0.3 L·min⁻¹ が必要となる。

一方、19hの時間をかける向流還元・抽出ステップでは0.06L・min⁻¹、5回繰り返し各 1hのゼオライトカラム吸着ステップでは0.04L・min⁻¹の溶融塩流量と概算される。した がって、液 | 液間や固 | 液間の長時間接触を前提とする還元・抽出ステップや吸着ステッ プを除き、高温融体輸送に求められる流量は10⁻¹~10⁰L・min⁻¹のオーダーと見積られる。

なお、密閉空間内への設置を前提に現在想定されている実装置は最高3mであるため、 高温融体輸送に求められる最高流路揚程も3mに設定した。

Table 5-1 Required flow-rate of liquid Cd and molten LiCl-KCl in a proposed pyrometallurgical reprocessing plant.

Output	Input	Fluid	Capacity (L)	Transport time (min)	Flow-rate (L•min ⁻¹)
Electrorefining	Reductive extration	Salt	67 (each 6 day)	60	1.1
Back extration	Electrorefing	Salt	67(each 6 day)	60	1.1
Electrorefining	Distillation	Cd-AN alloy	35	60	0.6
Distillation	Electrorefining	Cd	35	60	0.6
Distillation	Electrorefining	Salt	18	60	0.3
Reductive extration		Salt/Cd	67	1140	0.06
Adsorpt	ion on zeolite	Salt	56	1440	0.04

5-2-3 高温融体の移送方法

流体の移送にあたっては、流体と接触するすべての流路壁面や輸送機器の表面の耐久性 がまず求められる。本研究でとりあげる高温溶融状態の金属や塩の場合は、耐熱性のほか 高温での化学的安定性も求められる。

Table 5-2 に示すように、液体輸送用ポンプは液体に直接触れることなく流動させる間接 駆動型と、液体に機械的外力を与えて流動させる直接駆動型に大別される。前者には液体 上部を減圧にして液体を鉛直上向きに引き上げる吸引ポンプや、ファラデーの電磁誘導原 理にもとづく電磁ポンプが知られている。液体の密度で決まる吸引ポンプの理論揚程は、 溶融 Cd で 130 cm、LiCl-KCl 共晶溶融塩で 650 cm であり、液体 Cd にはポンプ揚程がや や不足ぎみながら、検討対象となり得る。他方の電磁ポンプは、イオン伝導体である溶融 塩には原理上の理由(流体を駆動するための直流電流で溶融塩が電気分解される)から使 用できない。また電磁ポンプによる液体 Cd の駆動は可能だが、ここで要求されている少流 量域の輸送には必ずしも適さない。

直接駆動型としては、往復運動ピストンによるレシプロ式と回転運動羽根などによる遠 心式がある。レシプロ式ポンプによる高温溶融塩の輸送例もある[5]が、バルブの設置が不 可欠であり、高温で耐久性に富むバルブの調達や保守は容易ではない。遠心式ポンプによ る高温溶融塩の輸送では、溶融塩原子炉での大規模なもの[2]から少流量のもの[6]まで報告 例があり、乾式再処理プロセスへの応用が期待される。

一方、液体のポンプアップは不可能だが、重力落下による下降流動も補機を必要としな い高温融体の移送手段の一つである。 以上のことから、本研究では高温 Cd 液体と高温 LiCl-KCl 溶融塩の移送手段として、間 接駆動型の吸引ポンプ、直接駆動型の遠心ポンプ、および重力下降流の利用の 3 つを選択 した。

Table 5-2 Comparison of various pumps for high-temperature liquids [4 by permission].

Pump types		Fluid	Flow-rate	Max. head or driving pressure
	Quotion	Liquid Cd	_	< 130 cm*
Indirect driving	Suction	Molten salt	_	< 650 cm*
	Electrony e mer etie	Liquid Na [3]	$< 227 \text{ L} \cdot \text{min}^{-1}$	1.7 MPa
	Electromagenetic -	Molten salt	unapplicable	unapplicable
Direct driving —	Control Control	Liquid Cd	_	_
	Centrifugal –	Molten salt [2]	$4.0-5.5 \text{ L} \cdot \text{min}^{-1}$	$150~{\rm cm}$
	Desimanal	Liquid Cd	_	_
	Reciprocal	Molten salt [5]	$214 \text{ L} \cdot \min^{-1}$	0.02–0.07 MPa

*Maximum head based on the density of liquid.

5-3 工学的規模の電解精製・蒸留精製プラントにおける高温融体の輸送

以上の視点から著者の所属機関では、陰極析出金属に随伴する Cd の回帰ループ、および 電解精製浴塩のリフレッシュループを設けた、Fig. 5-2 のような電解精製・蒸留精製プラン トを設計・構築しようとしている[8]。



Fig. 5-2 An electrorefining-distillative purification-RE removement plant for the pyrometallurgical reprocessing of spent metal fuels (engineering scale). Data taken from [8].

このためには高温溶融状態にある物質の輸送条件を最適化する必要があるので、本章では LiCl-KCl 溶融塩、LiCl-KCl 溶融塩を分散媒とするスラリー、溶融 Cd の 3 種類について、流動特性を実験的に調べるとともに流動制御法も検討した。

また、これらの知見をもとに、想定実機の約 1/8 スケールで電解精製・陰極 Cd 溶融合金 送出ユニットを組み立てた。さらに、アクチノイド模擬金属として Gd を用いる実験を行い、 蒸留精製部での Gd の回収と陰極への液体 Cd の回流が迅速かつ高効率で可能であることを 実証した。

5-4 59LiCl-41KCl 溶融塩の流動特性と輸送

5-4-1 溶融塩の重力下降流と流量制御

5-4-1-1 実験方法:溶融塩の重力下降流と流量制御

(1) 用いた試薬と試料の調製

LiCl と KCl は高純度化学研究所から購入し、それぞれ純度 99 %以上が保証された。ア ルゴングローブボックス内で 59LiCl-41KCl 組成(mol%)となるよう混合し、いったん溶 融・凝固させたものを粉砕して用いた(以後、組成表記は省略する)。この溶融塩は吸湿性 が高いため、すべての操作は Fig. 5-3 の大型アルゴングローブボックス内で行った。



Fig. 5-3 A big-scaled Ar glove box [7 by permission].

(2) 実験装置:溶融塩の重力下降流と流量制御

Fig.5-4 に実験装置を示すが、流量制御弁として装置 LG-G ではグローブバルブ、装置 LG-O ではオリフィスバルブを使用した。装置LG-O では、溶融塩液だめ内の撹拌も行った。

ステンレス製の上部液だめとステンレス製の流路管は、断熱材で囲いヒータで所定温度 に保った(図中では省略)。内径 180 mm、深さ 290 mm の上部液だめの底部中央出口に流 路管を接続した。LG-G での流路管は内径 10.1 mm、傾斜角 11°、長さ 859 mm、管頂と管 底での液位差 475 mm であり、LG-O での流路管は内径 10.1 mm、傾斜角 10°、長さ 1200 mm、管頂と管底での液位差 435 mm である。LG-G の流路管の途中にはグローブバルブ

(Swagelok 社製 U シリーズ)を設置した。LG-O では上部液だめの底部中央出口にオリフィスバルブ(自作品)を設置し、溶融塩を直径 60 mm のステンレス製羽根で撹拌(0~3000 rpm)した。流路下端から落ちた溶融塩をステンレス製容器に回収し、ディジタル天秤(A&D 社製 HV-60GL) でその質量を測定した。上部液だめ内の液位低下は電位差式レベル計で検知した。



Fig. 5-4 Two types of gravitational downstream experiments for molten salts. Data taken from [7].

(3) 実験手順の詳細:溶融塩の重力下降流と流量制御

実験条件の詳細を Table 5-3 にまとめたが、実験 LG-G0~LG-G2 は装置 LG-G で、また 実験 LG-O1~LG-O18 は装置 LG-O で行った。実験 LG-O1~LG-O10 ではオリフィスバル ブによる流量制御性、実験 LG-O11~LG-O18 では温度による流動性の変化を検討した。な お装置 LG-G のグローブバルブは 2.5 回転、装置 LG-O のオリフィスバルブは 14 回転がそ れぞれ弁開閉操作ねじの回転限界である。

LiCl-KCl混合塩7~10kgを上部液だめに入れてから昇温し、所定温度の溶融塩とした。 流路管は約823Kに保った。その後、バルブを所定開度でオープンし、溶融塩の流動を開 始した。下部回収パンの質量増加をもとに、落下した溶融塩の体積と流量を計算した。ま た、上部液だめ内における所定高さの液面通過時刻から、溶融塩の平均流量を概算した。 下部で回収した塩は凝固後に粉砕し、繰り返し用いた。

97

(L) (K)	(rpm) (*	turn)
LG-G0 Water 4.6 282	_	2.5
LG-G1 LiCl-KCl 4.1 758	-	2.5
LG-G2 LiCl-KCl 4.1 758	-	2.5
LG-O1 LiCl-KCl 5.4 761	2500	1
LG-O2 LiCl-KCl 5.5 761	2500	1
LG-O3 LiCl-KCl 5.2 763	2500	2
LG-O4 LiCl-KCl 5.2 763	2500	4
LG-O5 LiCl-KCl 5.3 763	2500	6
LG-O6 LiCl-KCl 5.6 763	2500	6
LG-O7 LiCl-KCl 5.5 759	2500	8
LG-08 LiCl-KCl 5.7 760	2500	10
LG-O9 LiCl-KCl 5.5 759	2500	12
LG-O10 LiCl-KCl 5.7 761	2500	14
LG-O11 LiCl-KCl 5.6 689	0	6
LG-012 LiCl-KCl 6.0 709	0	6
LG-013 LiCl-KCl 5.7 768	0	6
LG-014 LiCl-KCl 6.5 818	0	6
LG-015 LiCl-KCl 5.1 665	2500	1
LG-016 LiCl-KCl 5.1 714	2500	1
LG-017 LiCl-KCl 5.4 761	2500	1
LG-018 LiCl-KCl 5.5 814	2500	1

Table 5-3 Gravitational downstream experiments for molten LiCl-KCl by means of apparatus LG-G or LG-O.

5-4-1-2 結果と考察:溶融塩の重力下降流と流量制御

(1) 常温の水と高温溶融塩の下降流

Fig. 5-5 に見られるように、758 K の溶融塩は無色透明の液体である。装置 LG-G におけ る溶融塩と水の実験結果を、流量の経時変化として Fig. 5-6 に比較した。バルブを全閉か ら全開に手動操作したため、開弁初期の数秒間については定常的流動と見なしにくい。ま た、水の流量は回収パンに落下した質量を時間微分して求めたものであるが、バルブの設 置位置が管下端より高いので、開弁初期約 10 s まではバルブ通過水の一部しかパンに到達 していない。4.1 L の溶融塩が落下を完了するまでの時間は、同一条件下の LG-G1 と LG-G2 でいずれも約 100 s であった。また、この溶融塩とほぼ同等の動粘度をもつ 282 K の水(後 述) 4.6 L も、約 100 s で落下を完了した(LG-G0)。ここでの実験精度を考えると、758 K の溶融塩と 282 K の水はおおむね同等な流動特性をもつと見なせる。一方、溶融塩の定常 流動が期待される時間域での流量は、数段階の液位に低下するまでの経過時間をもとに不 連続的に決定したもので(この実験の時点で、落下溶融塩の連続的質量計測が困難であっ た)、プロット数も少なくばらついている。


Fig. 5-5 A picture of the molten LiCl–KCl stream from the tube end at 758 K (red arrow indicates the tube end).



Fig. 5-6 Changes in the flow rate during gravitational downstream in the apparatus LG-G.

流体が円管内を隙間なく流動する場合、無次元レイノルズ数(*Re*)を以下のように表すことができる[9]。

$$Re = \frac{vd\rho}{\mu}$$
(5-1)

v: 平均流速 / m s⁻¹

d: 流路の内直径 / m

 $\rho: 流体の密度 / kg m^{-3}$

 $\mu: 流体の粘度 / Pa s (= kg m^{-1} s^{-1})$

	59LiCl-41KCl salt [10]	Water [11]
Temperature / K	758	282
Melting point / K	625	273
Density, $ ho$ / g · cm ⁻³	1.6	1.0
Viscosity, μ / mPa · s	2.4*	1.4
Kinematic viscosity, (μho) / $10^6 \text{ m}^2 \cdot \text{s}^{-1}$	1.5	1.4
Mean velocity, $v/m \cdot s^{-1}$	0.7	0.6
Reynolds number (<i>Re</i>) / dimensionless	4500	4600
Experimental pressure loss coefficient (ξ) / –	25	30
Friction coefficient of straight pipe (λ)	0.04	1
Loss coefficient of straight pipe ($\xi_{\rm S}$ / dimensionless	4.1	
Loss coefficient of bend $\theta = 45^{\circ}$	0.3	
$(\xi_{\rm B})$ / dimensionless $\theta = 90^{\circ}$	0.5	
$\theta = 180^{\circ}$	0.6	
Loss coefficient of value ($\xi_{\rm V}$) / dimensionless	17	
Total loss coefficient (ξ_{T}) / dimensionless	22	

Table 5-4 Characteristics of gravitational downstream of molten LiCl-KCl and water in the apparatus LG-G and the related liquid properties.

*Extrapolated from literature data at 890-1070K [10] by assuming Arrhenius eq.

水と溶融塩の各実験温度における液物性を Table 5-4 に比較した。ここで、758 K における溶融塩の粘度 μ は、890~1070 K 間の文献値[10]をアレニウスプロットして外挿した。溶融塩/水の比で考えると、密度 ρ で 1.6、粘度 μ で 1.7 である。したがって粘度/密度の比にあたる動粘度は、溶融塩で 1.5×10⁻⁶ m²・s⁻¹、水で 1.4×10⁻⁶ m²・s⁻¹とほとんど等しい。

また装置 LG-G での液流に対するレイノルズ数を式 5-1 で計算すると、溶融塩で 4500、 水で 4600 となり、いずれも限界レイノルズ数をわずかに超えた乱流領域にあると判断され た。

ここで、液だめ上面から流路入口までの鉛直距離(液柱高)を h.、重力加速度を g とす れば、流路入口と流路出口(開放端)間での圧力差はpgh.で与えられる。この圧力差が非 圧縮性流体に対して平均流速 v に相当する運動エネルギーを与える場合、流路全体の特性 値としての無次元の総圧力損失係数<u>G</u> は式 5-2 のように与えられる[9]。

$$h_{\rm L} = \zeta_{\rm T} \frac{v^2}{2g} \tag{5-2}$$

*h*L:液柱高 / m

g: 重力加速度 / m s⁻²

ζ_T: 圧力損失係数 / dimenonless

この式にしたがい、実験 LG-G0~LG-G2 で得たデータを Fig. 5-7 に図示した。図中で定 常流動状態にある左下がりの直線部分の傾きが、流路全体に対する圧力損失係数 Gr を与え、 水に対する実験値は約 30、溶融塩に対する実験値 (LG-G2 の場合) は約 25 と近くなった。 溶融塩については液面の経時低下の実測データが少なく、やや信頼性を欠いている。いず れにしても、動粘度 1.5×10-6 m²・s⁻¹程度の流体に対して、装置 LG-G の流路はグローブバ ルブ全開にもかかわらず、30 に近いなを与えている。以下では、758 K の溶融塩と 282 K の水が同等の流動特性をもつものと近似した。



Fig. 5-7 Decreasing mean velocity and fluid head during gravitaional downstream in the apparatus LG-G.

この総圧力損出係数GT は、流路を構成する直管部、曲管部、さらにグローブバルブの通 過に際する圧力損失の総和であり、

$$\zeta_{\rm T} = \zeta_{\rm S} + \zeta_{\rm B} + \zeta_{\rm V} \tag{5-3}$$

♂T:総圧力損失係数 / dimenonless

 ς : 直管部の圧力損失係数 / dimenonless

ぶ:バルブの圧力損失係数 / dimenonless

と表せる。

このうち、直管部の圧力損失係数なは

$$\zeta_{\rm S} = \lambda \frac{l}{d} \tag{5-4}$$

1: 直管の長さ / m

d: 直管の内直径 / m

λ: 直管の摩擦係数 / dimenonless

と書け、ムディー図[12]をもとにレイノルズ数から直管の摩擦係数ルを 0.04 と見積もれるので、装置 LG-G では な = 4.1 と算出される。

また、曲管部の圧力損失係数 GBは

$$\zeta_{\rm B} = 0.00515 \theta \alpha R e^{-0.2} \left(\frac{r}{d}\right)^{0.9} ; \text{if } R e \left(\frac{d}{r}\right)^2 < 364$$
 (5-5)

$$\theta = 45^{\circ}$$
 : $\alpha = 1 + 5.13 \left(\frac{r}{d}\right)^{-1.47}$ (5-5-45)

$$\theta = 90^{\circ}$$
 : $\alpha = 0.95 + 4.42 \left(\frac{r}{d}\right)^{-1.96}$: $\left(\frac{r}{d}\right) < 9.85$ (5-5-90)

$$\theta = 180^{\circ}$$
 : $\alpha = 1 + 5.06 \left(\frac{r}{d}\right)^{-4.52}$ (5-5-180)

d:曲管の内直径 / m

r:曲率半径 / m

θ:曲がり角 /°

で表せる[9]。装置 LG-G におけるサイズパラメータ *d*/m = 0.0101、*r*/m = 0.045 を代入し、 曲がり角 45、90、120°での*G* を式 5-5 から計算したところ、それぞれ 0.3、0.5、0.6 とき わめて小さい値であった。

さらに、グローブバルブの圧力損失係数 ζv は、製造元 Swagelok 社のカタログ[13]から全 開状態で $\zeta v_{min} = 17$ と算出された。

以上三つの圧力損失係数の和として、装置 LG-G における流路全体の総圧力損失係数 を約 22 と見積もることができ、この値は実験的に求まった値約 30 と近い。つまり、液体 の物性値と各流路要素に対する流体力学的推算にもとづき、流路全体の総圧力損失係数 な をある程度の精度で見積もることができる。この流路ではグローブバルブ全開状態でも な の大部分をバルブでの圧力損失 な い, 旅融塩の重力落下流を制御できない。

(2) オリフィスバルブによる重力下降流量の制御

とくに還元・抽出ステップやゼオライト吸着ステップでは、少流量域での制御も求めら れる。オリフィスバルブを設置した装置 LG-O で、溶融塩流量の制御性を検討し、まずバ ルブ開度による平均流速 vの変化を Fig. 5-8 に示した。この平均流速 vはパンに落下した 溶融塩の質量にもとづき、落下率 5~90 %間の所要時間から算出した。この図からわかる ように、バルブ開度の調節により、平均流速域 0.1~1.2 m・s⁻¹でおおむねリニアな制御が 可能であった。これをレイノルズ数に換算すると 700~8900 の区間に相当し、層流域から 乱流域までわたる。



Fig. 5-8 Changes in the mean velocity of molten LiCl-KCl with valve opening in the apparatus LG-O [7 by permission].

また、バルブ開度 6 回転以上で平均流速は一定となっているので、操作ねじの機械的回転限界以前の 6 回転でオリフィスが全開状態に達したと考えられる。同一バルブ開度に設定した[LG-O1/LG-O2]および[LG-O5/LG-O6]の実験で、それぞれほぼ同じ溶融塩平均流速が確認され、オリフィス弁の開閉で再現性高い流量調節が可能であった。また、この自作バルブは 89 回繰り返し使用しても正常な弁機能を保ったので、高温溶融塩の流量調節弁として充分な耐久性が期待できた。

上述のように曲管部の圧力損失係数は小さい(GB < 1)ので無視し、以下では総圧力損失係 数Grを直管部の寄与Gsとバルブ部の寄与Grのみで近似する。

$$\zeta_{\rm T} = \zeta_{\rm S} + \zeta_{\rm V} = \lambda \frac{l}{d} + \zeta_{\rm V} \tag{5-3A}$$

直管の摩擦係数λは以下のように、層流領域では式 5-6L で、また乱流領域ではブラジウス の式 5-6T で算出される[9]。

$$\lambda = \frac{64}{Re} \quad ; \text{laminar } Re < 2000 \tag{5-6L}$$

 $\lambda = 0.3164 Re^{-0.25}$; turbulent 3000 < Re < 10000 (5-6T)

装置 LG-O での実測データから式 5-2 によって算出されたなは、バルブ開度とともに 868 ~7.4 の範囲で変化した。一方、直管の摩擦係数えをもとに式 5-6L、式 5-6T から計算され るななは、平均流速(レイノルズ数)の増加とともに 11~3.9 の区間で変化した。したがっ て、近似式 5-3A から概算されるこのオリフィスバルブの圧力損失係数なは、バルブ開度と ともに 857~3.5 の範囲で減少すると見積もれる。 つまり、装置 LG-O のオリフィス弁を全開にしたときのバルブの圧力損失係数 $\zeta_{V,min}$ は 3.5 であり、装置 LG-O の全開グローブ弁に対する 17 より小さい。したがって、装置 LG-O で オリフィス弁の開度調節を利用すれば、 $\zeta_{T} > 7.4$ の範囲で溶融塩の重力下降流れ(つまり流 量)を制御できることがわかった。理想的な流量調整弁には $\zeta_{V,min} = 0$ 、 $\zeta_{V,max} = \infty$ ともに弁 開放操作量と ζ_{V} との線形性が要求される。少なくとも $\zeta_{V,min}$ で判定するかぎり、自作したオ リフィス弁はグローブ弁より優れた流量制御性を期待できる。

(3) 溶融塩の流速への温度の影響

バルブ開度が6回転または1回転で一定の条件下で実測された、溶融塩平均流速 vの温度依存性をFig. 5-9に示した。バルブ開度6回転でのデータを直線近似すると、平均流速の温度係数は+0.05%・K⁻¹であった。これに対して、バルブ開度1回転でのデータには有意な温度依存性は認められなかった。



Fig. 5-9 Changes in the mean velocity of molten LiCl-KCl with temperature in the apparatus LG-O; broken lines were calculated hydrodynamically.

流体力学的に推算される平均流速 v と上の実測データとを、以下でふたたび比較する。 まず液物性に注目すると、689 K から 818 K への温度変化に際して、溶融塩密度 ρ の変化は -4%にすぎない[10]が、前述の外挿法で求めた粘度 μ は-77%も変わる。バルブ開度1回転 ではレイノルズ数542~793の層流領域にあったので、式5-6Lで λ を求め、これと ζv =857 を式5-3A、式5-2に代入して平均流速 vを計算した。また、バルブ開度6回転ではレイノ ルズ数10500~5700の乱流領域にあったので、式5-6Tで λ を求め、これと ζv =3.5を式5-3A、 式5-2に代入して平均流速 vを計算した。これら二種類のバルブ開度で推算された vを、 計算温度に対して Fig. 5-9 中の破線で示した。

いずれのバルブ開度に対しても、流体力学的に予測された平均流速 v は実測値とよく一致している。なお、バルブ開度 6 回転の方が平均流速の温度依存性が大きい理由は、直管

部での圧力損失係数ながより支配的になっているため、つまり ζy,min より ζs 方が大きく温度 変化するためと推論される。

以上の検討から、直管部での圧力損失の温度依存性が、装置 LG-O における溶融塩流速の温度変化をおもに左右するが、689 Kから 818 Kへの温度上昇でも平均流速の上昇は最大6%程度にとどまることが明らかとなった。

5-4-2 遠心ポンプによる溶融塩の輸送

5-4-2-1 実験方法:遠心ポンプによる溶融塩の輸送

(1) 実験装置

遠心ポンプによる LiCl-KCl 系溶融塩 (組成は同上)の輸送を、二種類の実験装置 LC-0、 LC-B を用いて検討した。Fig. 5-10 上図の装置 LC-0 では、注目する溶融塩流路中にバルブ はなく、最大高さ 104 cm (流路入口・出口間の高さ 96 cm) で一定である。また装置 LC-B ではベローズバルブ操作によって最大高さ 101、124、148 cm をもつ三流路に変更できる。 これら二種類の装置では、遠心ポンプ(サンワハイドロテック社製 MAE-V、回転羽根 50 mm、 回転速度 1800~3000 rpm) や液送流路 (内直径 10.1 mm、水平部分の傾斜角 2[°]) をはじ め、供給タンク (内直径 345 mm、深さ 320 mm、容量 25 L)、回収タンク (内直径 255 mm、 深さ 516 mm、容量 25 L)、ドレーン管 (内直径 10.1 mm、水平部分の傾斜角 2[°]) も同一 規格である。装置 LC-B ではベローズシールバルブ (Swagelok 社製 SS-8UW)を V-0、V-1、 V-2、V-3、V-D の 5 箇所に設置した。図中では省略したが、すべてのタンクと配管は断熱 材で保温し、マイクロヒータで 673~873 K に温度制御した。供給タンクと回収タンク内に は液面検知計を設置した。



(b) LC-B with exchangeable three paths having different maximum heads

Fig. 5-10 Two types of transport experiments for molten LiCl-KCl using a centrifugal pump [7 by permission].

(3) 実験手順の詳細:遠心ポンプによる溶融塩の輸送

輸送対象の溶融塩は、まず回収タンク内で塩を溶融させてから、供給タンクへ重力移動 させた。 実験 LC-B では、まずバルブ V-1、V-2、V-3 のいずれか 1 つだけを開き、溶融塩の流路 を選択した。バルブ V-0 を全開にしてから、遠心ポンプをで作動させ、輸送を開始した。 供給タンクと回収タンク内における所定液面通過シグナルと輸送経過時間にもとづき、流 量を決定した。実験終了後、バルブ V-D を開いて回収タンクから供給タンクへ溶融塩をも どした。一連の輸送実験の詳細を Table 5-5 にまとめた。

D	Volume	Temperature	Pump rotation	Max. head	D (')' ('
Kun	(L)	(K)	(rpm)	(m)	Repetition times
LC-01	20	773	3000	0.96	3
LC-02	20	773	2700	0.96	3
LC-03	20	773	2400	0.96	3
LC-04	20	773	2100	0.96	3
LC-05	20	773	1800	0.96	3
LC-B1	10	775	3000	1.01	3
LC-B2	10	775	3000	1.24	3
LC-B3	10	775	3000	1.48	3
LC-B4	10	775	2700	1.48	3
LC-B5	10	775	2400	1.48	3
LC-B6	10	775	2100	1.48	3
LC-B7	10	748	3000	1.24	3
LC-B8	10	773	3000	1.24	3
LC-B9	10	817	3000	1.24	3

Table 5-5 Transport experiments for molten LiCl-KCl using the centrifugal pump [7 by permission].

5-4-2-2 結果と考察:遠心ポンプによる溶融塩の輸送

(1) 遠心ポンプの流量制御性

装置 LC-0 における流量の経時変化を Fig. 5-11 に示した。同一の遠心ポンプ回転速度で 3回ずつ行った流量の測定結果は良い再現性を示している。初期の流量が少ないのは、遠心 ポンプが所定の定常回転速度に達するまでに約 10 秒かかるためである。また流量が時間と ともに減少するのは、供給タンク内の液位がしだいに下がり、流路入口での圧力が低下す るためと考えられる。

Fig. 5-12 には、遠心ポンプの回転速度による平均流量の増加を示した。バルブレス流路 LC-0 の場合は、ポンプ回転速度 1800~3000 rpm の調節で平均流量を 2.5~8.0 L·min⁻¹ の領域でほぼリニアに制御できた。またもっともきびしい溶融塩輸送にあたる、2 バルブ通 過で揚程 1.48 m の流路を選択した LC-B の場合も、ポンプ回転速度 2400~3000 rpm の調 節で平均流量を 2.3~4.4 L·min⁻¹の領域でほぼリニアに制御できた。しかし、ポンプ回転 速度を 2100 rpm に設定した実験 LC-B6 では、溶融塩を回収タンクまで輸送することが不 可能であった。



Fig. 5-11 Changes in a flow rate of molten LiCl-KCl with time at various rotation speed of centrifugal pump in the apparatus LC-0 [7 by permission].



Fig. 5-12 The flow rate of molten LiCl-KCl in the apparatus LC-0 or LC-B increasing with the rotation speed of the centrifugal pump [7 by permission].

輸送の実現には、流路の最高位置まで液体を押し上げることがまず必要であり、そのためにはポンプ出口(流路出発点)での圧力として*pgh*M(*h*Mはポンプ出口を基準とする流路 最高点の高さ)が求められる。これは充分条件ではなく、有限の流量で液送する際には、 流管内壁との摩擦やバルブ通過抵抗による圧力損失も発生する。これらの圧力損失は流量 とともに増加するため、ポンプに要求される最低出口圧力は、*ph*Mと設定したい流量によっ て変動する。

遠心ポンプの吐出能力は、回転系に対するベルヌーイ式をもとにして、出口・入口間の 圧力差として次のように表せる[12]。

$$P_2 - P_1 = \frac{\rho}{2} \left\{ \left(v_{r,2}^2 + v_{a,2}^2 \right) - \left(v_{r,1}^2 + v_{a,1}^2 \right) \right\} - P_i$$
(5-7)

Pi:入口圧力 / Pa

P2:出口圧力 / Pa、

va.2:出口の回転軸方向流速 / m・s⁻¹、

*V*_{r,2}:出口の半径方向流速 / m・s⁻¹、 *V*_{r,1}:入口の半径方向流速 / m・s⁻¹ Va.1:入口の回転軸方向流速 / m・s⁻¹

P_i: 羽車内部の圧力損失 / Pa

ρ:液体の密度 / kg・m⁻³

両辺は圧力の次元で、右辺第 1 項は入口・出口間での流体の運動エネルギー差にもとづく 項、第2項は羽車内部での圧力損失項である。第2項が無視できる遠心ポンプでは、Wr.2、 Wr.1、Wa.2 のすべてが軸回転速度 n に正比例するので、吐出圧力(したがってポンプ揚 程)は n²に比例する。一方、流量は n¹ に比例するので、微少流量をポンプ低回転数で実現 しようとすると、式 5-7 で決まるポンプ揚程、すなわち液送できる限界流路揚程も低くなる。

Fig. 5-12 に見られたように、ここで使用した遠心ポンプの場合、流路揚程 1.48 m に対 しても2.5~4.6L・min⁻¹での流量制御が可能であった。この下限流量は向流還元・抽出装 置やゼオライトカラム用には多すぎるが、その他の溶融塩輸送には利用が見込まれる。 (2) 遠心ポンプの揚液性能

遠心ポンプの一定軸回転数における動的特性の指標として、流路揚程と流量の関係を 示すポンプ性能曲線が知られている。3000 rpm で定常回転するこの遠心ポンプについて、 溶融塩(775 K) と水(288 K、溶融塩/水の密度比で揚程を補正ずみ)に対する性能曲線 を Fig. 5-13 で考察した。図中の点線は水に対する性能曲線であり、バルブレス流路での 溶融塩輸送 LC-0 の実測データ(●プロット)は、この曲線の延長上に近かった。

一方、流路に 2 つのバルブを含む実験 LC·B1~LC·B3 でのデータ(□プロット)に対 しては、バルブ通過に要する圧力損失を考慮する必要がある。バルブ製造元 Swagelok 社 の開示データ[13]から、各流量におけるバルブでの圧力損失を見積もったところ、溶融塩 の液柱高に換算して 0.9 ~1.2 m であることがわかった。これらの値を加算・補正した流 路揚程と流量の関係(■プロット)は、水に対するポンプ性能曲線上に近かった。これら の結果から、775 Kの溶融塩と288 Kの水に対する性能曲線はほぼ重なった。



Fig. 5-13 The path head-flow rate relationships for molten LiCl-KCl (775 K) and water (288 K) in the centrifugal pump operating at 3000 rpm (the path head for water has been converted to that for LiCl-KCl) [7 by permission].

(3) 遠心ポンプの揚液性能に対する溶融塩温度の影響

送液粘度の上昇とともに、遠心ポンプの性能は一般に低下することが知られている[3]。 遠心ポンプの回転速度を3000 rpm で一定とした場合、揚程1.24 m の流路における溶融 塩流量は、Fig. 5-14 のように温度低下とともにやや減少した。812 K から748 K への温 度変化を比較すると、この遠心ポンプ輸送の流量変化は-4%であり、前述した重力輸送 の流量変化-3%とほとんど同等であった。液体物性値としての動粘度が同温度区間で +30%も上昇することを考えると、輸送論的には動粘度上昇にともなう流動性の低下が流 路壁面との摩擦を少なくすることによって、流量の温度変化を緩和しているものと推論 される。

本研究の対象プロセスで想定されている溶融塩の操業温度は 773 K であり、若干の温 度制御ずれが発生したとしても、遠心ポンプ輸送に対する影響はきわめて小さいものと 判断できる。



Fig. 5-14 The effects of temperature on the flow rate of molten LiCl-KCl through a 1.24 m head path by the centrifugal pump (3000 rpm) [7 by permission].

5-4-3 まとめ:高温溶融塩の輸送

高温溶融塩の輸送に関して、以下の結論を得た。

- (1) ほぼ同等の動粘度をもつ 758 K の 59LiCl-41KCl 溶融塩と 288 K の水は、きわめて近 い流動特性を示した。流路通過にともなう圧力損失も 288 K の水に対するもので代用 できる。
- (2) 自作した圧力損失係数の小さいオリフィスバルブを操作することによって、溶融塩(約 773 K)の重力落下流量を広範囲に制御できた。これは、とくに少流量域での制御が要 求される向流還元・抽出装置やゼオライト吸着カラムでの補機レス輸送に応用が期待 される。
- (3) 羽根直径 50 mmの小型遠心ポンプを利用した溶融塩の輸送では、回転速度を下げて少流量を実現しようすると、ポンプ揚程が不足し、高い流路揚程には対応できなかった。 ここで用いた遠心ポンプは、比較的多流量での電解精製浴塩などの揚送に適している。
- (4) 溶融塩の動粘度は温度低下とともに上昇するが、本研究対象プロセスの想定温度 773 K から±40 K 程度の温度制御ミスが発生した場合でも、溶融塩の重力輸送も遠心ポンプ輸 送も大きな影響は受けない。

以上により、電解精製・蒸留精製プロセスにおける高温溶融塩の流量制御に関して、重要となる特性を把握できた。

5-5 金属微粉体が混入した 59LiCl-41KCl 溶融塩スラリーの強制分散と輸送

5-5-1 背景:金属微粉の溶融塩スラリー

使用済金属燃料を電解精製の陽極とすると、酸化溶解しない貴な金属や Zr は粉末として 陽極から脱落する。比較的粗大な粉末は陽極バスケット内に回収されるが、微粉化した一 部は Fig. 5-15 のように脱落し、電解精製浴中に混入する。繰り返し使用した電解精製浴塩 のリフレッシュに際しては、これら金属微粉末の除去も不可欠である。



Fig. 5-15 An electrorefining cell with two exchangeable cathodes (one solid Fe and another liquid Cd) coupled with an anode basket for the pyroreprocessing of spent metal fuels [15 by permission]. \checkmark Insoluble metal particles.

使用済(135,000 MW・day・ton-1)金属燃料の典型的な化学組成[4]を Table 5-6 に示した。 アクチノイドの酸化電位ではアノード溶解しない 40Zr、42Mo、43Tc、44Ru、45Rh、46Pd、 47Ag、48Cd のような貴な金属(化学で定義する貴金属と同義ではない)が、合計約6 wt% (1 ton あたり 59 kg)含まれる。これらの多くは陽極バスケット内で回収できるが、米国 アイダホ国立研究所(INL)の報告[14]によると、651 kgの使用済燃料を電解精製したのちの 浴塩には、約0.03 wt%の金属粒子が混入する(溶融塩量は非公開のため、金属粒子の全量 は不明)[14]。したがって、電解精製浴塩に混入する金属粉末の最多量は合計 0.5 wt%程度 と想定すれば充分と考えられる。

また Table 5-6 に示すように、アノード溶解しないこれらの金属の結晶密度は 6.5~12.4 g・cm⁻³(単純平均は 10.4 g・cm⁻³) と 59LiCl−41KCl 溶融塩の密度(1.6 g・cm⁻³、773 K)よ り高いので、静置状態では重力沈降する。このような高温スラリーを二相混合物のまま輸 送した報告例は、ほとんど見あたらない。そこで本研究では、不溶解性金属の模擬物質と して密度が 7.9 g·cm-3と比較的近く、773 K の 59LiCl-41KCl 塩に接しても安定な 18-8 ステンレス粒子を選び、粒子の強制分散挙動と流動を実験的に検討した。

Table	5-6	Elem	ienta	l co	mpositic	n	of	typical	spent	t metal	fı	ıel (1	35,000
MW•d	ay•t	on-1)	and	the	density	of	in	soluble	metal	crystals	•	Data	taken
from [5, 10]].											

Group / E	Group / Elements		density / g•cm ⁻³ [10]
	U	729	
Actinoid metals	Pu	131	
	MA (Np, Am, Cm)	6	
	Zr	10	6.52
	Mo	12	10.2
	Тс	11	11
- In a shahla mahla matala	Ru	11	12.1
Insoluble noble metals	Rh	3	12.4
-	Pd	10	12.0
-	Ag	1	10.5
-	Cd	1	8.69
Rare eart	h metals	45	
Alkali r	netals	15	
Alkaline ea	Alkaline earth metals		
Chalc	Chalcogen		
Halogen		1	
Rare	gas	3	
Tot	al	1000	

5-5-2 撹拌下におけるスラリー内金属粒子の強制分散

5-5-2-1 実験方法: 撹拌下におけるスラリー内金属粒子の強制分散

用いた試薬と試料の調製

59LiCl-41KCl 共晶塩(mol%)には 5-4-1 と同じものを用いた。18-8 ステンレスの粒子は 高純度化学研究所と Alfa Aesar 社から購入し、3 つの粒径にふるい分けした。以下では P1

(53~106 µm、代表径 80 µm)、P2 (250~300 µm、代表径 275 µm)、P3 (300~415 µm、 代表径 358 µm)と表記する。

(2) 実験装置

強制分散状態にある溶融塩スラリーの重力流下実験を Fig. 5-16 に示す装置で行った。上 部スラリーだめから流下管までは、Fig. 5-4 の溶融塩の重力流下実験に用いたオリフィスバ ルブ流路 LG-O と同一である。水系スラリーの重力流下に関する報告[16]によれば、円管流 路の下降角 15°以下では、管底に粒子が堆積する可能性がある[16]。そこで、流路内壁への 粒子沈着も検討するため、この装置の流路勾配を 10°に設定した。

スラリーをステンレス製羽根(直径 60 mm、3枚プロペラ)で撹拌し、金属粒子を強制 分散させた。流下した粒子を溶融塩と分けて回収するため、回収パンの上部に二重フィル タを設置した。オールステンレス製の円筒フィルタ1(内径 100 mm¢、高さ 200 mm)の 底に円筒状金網(300 または 100 メッシュ)、その下段のフィルタ2(内径 252 mm¢、高さ 200 mm)の底に円筒状金網(300 メッシュ)を張った。ディジタル天秤(A&D 社製 HV-60GL) による質量測定で流路下端から落下したスラリー量を決定した。上部液だめ内の液位低下 は電位差式レベル計で検知した。

さらに、流下中の粒子を視認できるアクリル樹脂製の装置も同様に準備し、ステンレス 粒子の水系スラリーに対する流下実験を行った。



Fig. 5-16 An experimental setup for the gravitational downstream of molten LiCl-KCl slurries containing 18-8 stainless particles under forced dispersion [15 by permission].

(3) 実験手順の詳細

Table 5-7 に実験条件をまとめたが、ここではスラリー中粒子の強制分散を調べるため、 ステンレス粒子のサイズ、体積分率、スラリー攪拌回転速度をパラメータとし、オリフ ィス弁開度は満開状態に保った。約 10 kg の LiCl-KCl 溶融塩(約 765 K)を上部スラリ ーだめに準備し、800~2500 rpm で攪拌しながら、25~200 g のステンレス粉を加えた。 その後、オリフィス弁を開き、流下したスラリー中の粒子をフィルタで分離・回収した。 粒子に付着した溶融塩を水で洗い落とし、乾燥後に粒子質量を測定した。回収した溶融 塩は凝固・粉砕して次の実験に用いた。また、ステンレス粒子の水系スラリーに対して も、アクリル樹脂製の装置で重力流下実験を行った。

Run	Stainless particles*	LiCl–KCl volume (L)	Particle fraction (vol%)	Impeller (rpm)	Temperature (K)	Orifice opening (turn)
LsG-011	P1	6.1	0.2	800	767	6
LsG-O12	P1	6.6	0.2	1200	770	6
LsG-O13	P1	6.0	0.3	1200	768	6
LsG-O14	P1	6.3	0.3	2500	769	6
LsG-O21	P2	6.0	0.3	800	766	6
LsG-O22	P2	5.9	0.3	1200	766	6
LsG-O23	P2	6.4	0.3	1800	764	6
LsG-O24	P2	6.0	0.3	2100	766	6
LsG-O31	P3	6.3	0.3	800	762	6
LsG-O32	P3	5.9	0.4	800	763	6
LsG-O33	P3	6.2	0.4	1200	762	6
LsG-O34	P3	6.1	0.04	2100	761	6
				* D1: F	9 100 Do: 050 90	0 Do: 000 415

Table 5-7 Experimental conditions for the gravitational downstream of hydrodynamically dispersed LiCl-KCl slurries containing 18-8 stainless particles [15 by permission].

* P1: 53–106 μm, P2: 250–300 μm, P3: 300–415 μm

5-5-2-2 結果と考察: 撹拌下におけるスラリー内金属粒子の強制分散

(1) 水系スラリーの強制分散

まず、水中におけるステンレス粒子の強制分散挙動を検討した。Fig.5-17 に見られるように、500 rpm の攪拌条件下では P2 粒子が底部に定在したが、2100 rpm では粒子が水中に舞い上がった。撹拌回転速度の上昇とともに底部に定在する粒子は減少し、容器底面に定在粒子が認められなくなる分散限界攪拌回転速度を *n*crit と定義した。これはあくまでも強制撹拌水流があっての粉体の浮遊であり、コロイド科学的な安定分散ではない。

オリフィス弁開度を満開 6 回転に設定した場合の水系スラリーの重力流下では、流路中 に残留した粒子はほとんど認められず、粒子は流路壁面に捕捉されることなく水流で押し 流されることがわかかった。



500 rpm

2100 rpm

Fig. 5-17 Blown up (2100 rpm) or precipitated (500 rpm) P2 particles in the stirred water phase by a rotating impeller [15 by permission].

(2) 溶融塩系スラリーの強制分散

溶融塩系スラリーでは粒子を観察できないため、水中での実験結果をもとに流体力学的 に粒子挙動を考察した。レイノルズ数は流体に働く慣性力と粘性力の比を示す無次元数で あるが、回転インペラーで撹拌されている液体には、攪拌レイノルズ数が適用される[9]。

$$Re_{\rm rot} = \frac{nd_1^2 \rho_{\rm L}}{\mu} \tag{5-8}$$

*Re*rot: 攪拌レイノルズ数 / dimenonless

d: インペラー直径 / m

n:インペラー回転速度 / rps

*ρ*L:液体の密度 / kg・m⁻³

μ:液体の粘度 / Pa・s

[流下・回収された金属粉/上部スラリーだめに入れた金属粉]の質量比を粒子輸送率β と定義し、溶融塩系スラリーで実測されたデータを Fig. 5-18 に示した。横軸は攪拌回転速 度とし、上の横軸には式 5-8 で算出される *Revot* をとった。いずれの実験条件においても *Revot* > 30000 であり、スラリーだめ内部での強制撹拌液流はかなり乱れている。

P2 粒子の輸送率βは、攪拌回転速度 1200 rpm 以上でほぼ 1 まで達した。したがって、 1200 rpm の強制撹拌下において、すべての P2 粒子は底面にとどまることなく、溶融塩相 中ですでに完全分散状態にあると考えることができる。より粗大な P3 粒子の場合には、 2100 rpm で輸送率 1 が実験的に確認された。攪拌回転速度と粒子輸送率の関係を輸送率 1 まで直線的に外挿した約 1390 rpm において、P3 粒子が完全分散状態に入るものとここで は予想した。

これに対して、最小の P1 粒子の場合には輸送率が 1 まで到達せず、約 0.9 が上限であっ た。この原因は上部スラリーだめでの残留ではなく、約 10 %の粒子が回収側の二段フィル タを通過したことにある。P1 粒子群の SEM 写真を Fig. 5-19 に示したが、球形ではないた め、鉛直方向から見たサイズが金網の開口径より小さい場合には通り抜ける。実際に、P1 粒子の水系スラリーの流下実験では、約 10 %が下部の回収パンまで落下した。したがって、 800~1200 rpm の中間撹拌速度において、P1 粒子が完全分散状態に入るものと推定した。



Rotation speed of stirrer / rpm

Fig. 5-18 Transported fraction of fine (P1), medium (P2) and coarse (P3) particles at various dispersion conditions in the slurry reservoir [15 by permission].



Fig. 5-19 An SEM image of 18-8 stainless P1 particles (53–106 $\mu m,$ from Kojundo Chemical Laboratory).



Fig. 5-20 Critical impeller rotation rate, $n_{\rm crit}$, for the complete forced dispersion of various sized particles in a slurry reservoir as in Fig. 5-16 [15 by permission].

溶融塩中の P1、P2、P3 粒子に推定された分散限界攪拌回転速度 *n*crit を、平均粒子径に 対して Fig. 5-20 にプロットした。横軸量、縦軸量ともにかなりの誤差を見込む必要がある が、おおむね右上がりの傾向にあると判断できる。撹拌下の水系スラリーに対しては、粒 子の完全分散条件を記述する多くの実験式が、これまでに提案されている。これらのうち、 本実験装置と類似の攪拌プロペラを使用したものには、実験式 5-9~5-13 が知られている [17]。

Zwietering;

$$n_{\rm crit} = 6.0 d_{\rm I}^{-0.85} d_{\rm P}^{0.2} v^{0.1} \left(g \frac{\rho_{\rm P} - \rho_{\rm L}}{\rho_{\rm L}} \right)^{-0.45} \left(100 \frac{\rho_{\rm P}}{\rho_{\rm L}} \frac{\phi_{\rm P}}{1 - \phi_{\rm P}} \right)^{0.13}$$
(5-9)

Hobler–Zablocki;

$$n_{\rm crit} = 10.325g^{0.45}d_{\rm I}^{-0.9}d_{\rm P}^{0.25}v^{0.1} \left(\frac{\rho_{\rm P}-\rho_{\rm L}}{\rho_{\rm L}}\right)^{0.6} \left(\frac{\rho_{\rm P}}{\rho_{\rm L}}\right)^{0.17} \left(\frac{h_{\rm IB}}{d_{\rm I}}\right)^{0.19} \left(\frac{d_{\rm V}}{d_{\rm I}}\right) \left(\frac{\phi_{\rm P}}{1-\phi_{\rm P}}\right)^{0.17} (5-10)$$

Kneule-Weinspach;

$$n_{\rm crit} = 1.75 \left(\frac{g}{d_{\rm I}} \frac{\rho_{\rm P} - \rho_{\rm L}}{\rho_{\rm L}}\right)^{0.5} \left(1 + \frac{\rho_{\rm L}}{\rho_{\rm P}} \frac{1 - \phi_{\rm P}}{\phi_{\rm P}}\right)^{-0.25} \left(\frac{d_{\rm V}}{3.25d_{\rm I}}\right)^{5/3}$$
(5-11)

Einenkel-Mersmann;

$$n_{\rm crit} = 24.93 \frac{\nu^{0.0826}}{d_{\rm I}^{0.7768}} \left(g \omega_{\rm ss} \phi_{\rm P} \frac{\rho_{\rm P} - \rho_{\rm L}}{\rho_{\rm L}} \right)^{0.3058} \left(\frac{d_{\rm V}}{3.175 d_{\rm I}} \right)^{5/3}$$
(5-12)

n_{crit}:分散限界攪拌回転数 / s⁻¹ (rps) dv:容器の内直径 / m di:インペラーの直径 / m dv:粒子の直径 / m v:液体の動粘度 / m²·s⁻¹ g: 重力加速度 / m・s⁻² か: 粒子の体積分率 / dimenonless h_{IB}: インペラーと容器底面の距離 / m p_P: 粒子の密度 / kg・m⁻³ p_L: 液体の密度 / kg・m⁻³

∞ss: 粒子の定常沈降速度 / m・s⁻¹

本実験における諸パタメータをそれぞれの実験式に代入し、計算された *n*crit の粒子径依存性を、Fig. 5-20 に描き入れた。実測された *n*crit のデータにもっともよくフィットするのは、Zwietering の実験式 5-11 であった。

5-5-3 59LiCl-41KCl 溶融塩系金属粉スラリーの重力流下

5-5-3-1 実験方法: 59LiCl-41KCl 溶融塩系金属粉スラリーの重力流下

流路のパラメータとしてオリフィスバルブの開度、また流下スラリーのパラメータとし てステンレス粒子の体積分率と粒径を選び、Table 5-8 に示す諸条件下で溶融塩系スラリー の重力流下実験を、Fig. 5-16 の装置で行った。このとき、上部スラリーだめ内の粒子を強 制完全分散状態におくため、5-5-2 で得た知見をもとに、P1、P2、P3 粒子スラリーに対す る撹拌回転速度をそれぞれ 1200、1800、2100 rpm に設定した。平均流速が低い場合には、 流路壁に堆積した粒子群についても調査した。

実験手順は、水系スラリーも含めて 5-5-2-1 と同様である。

Table 5-8 Experimental conditions for the gravitational downstream of completely dispersed LiCl-KCl slurries containing 18-8 stainless particles [15 by permission].

Run	Stainless particles*	LiCl–KCl volume (L)	Particle fraction (vol%)	Impeller (rpm)	Temperature (K)	Orifice opening (turn)
LsG-O15	P1	6.1	0.3	1200	765	9/8
LsG-O16	P1	6.1	0.3	1200	763	2
LsG-O17	P1	6.1	0.3	1200	761	4
LsG-O18	P1	6.0	0.3	1200	768	6
LsG-O25	P2	6.1	0.4	1800	766	1
LsG-O26	P2	6.0	0.3	1800	766	5/4
LsG-027	P2	6.3	0.4	1800	765	5/4
LsG-O28	P2	6.4	0.3	1800	764	2
LsG-O29	P2	6.9	0.3	1800	761	6
LsG-O2a	P2	6.3	0.4	1800	765	6
LsG-O35	P3	5.9	0.4	2100	763	5/4
LsG-O36	P3	5.9	0.3	2100	761	3/2
LsG-O37	P3	5.5	0.4	2100	763	2
LsG-O38	P3	5.5	0.3	2100	761	3
LsG-039	P3	6.1	0.4	2100	761	4
LsG-O3a	P3	6.1	0.04	2100	761	6

* P1: 53-106 μm, P2: 250-300 μm, P3: 300-415 μm

5-5-3-2 結果と考察: 59LiCl-41KCl 溶融塩系金属粉スラリーの重力流下

(1) 水系スラリーの重力流下

溶融塩系スラリーの実験に先だって、水系スラリー中の粒子の流れを観察し、既報[18-19] と比較した。Fig. 5-21のように、分散媒の流れにともなう粒子輸送よりも粒子の重力沈降 が優勢になるにしたがって、(a)底面付近に非対称サスペンション領域が生まれ、(b)底面 上で粒子が押し流される移動床(摺動層)が形成され、さらに、(c)流路底面に粒子が捕 捉される定在床を形成すると考えられている[18]。流路入口・出口間の圧力損失と分散媒液 体の流速の関係は、不均一浮遊流から移動床形成へ遷移する流速 vab、移動床形成から定在 床形成へ遷移する流速 vb/cの2つで区切られる。

水を分散媒とする鉱石や砂スラリーの Va/b については、実験式 5-13 が報告されている[18]。 この式中の定常沈降速度 æs は、式 5-15、5-16、5-17、5-18 から収束計算で求めた[9]。ま た、同じスラリーの vb/c については、実験式 5-19 が提案されている[19]。



Fig. 5-21 Flow models of slurry particles competing with gravitational precipitation and a typical hydrodynamic curve of the mean velocity of disperse liquid *vs.* pressure drop. Data taken from [18].

$$v_{a/b} = 1.06 \left(gd_{\rm T} \frac{\rho_{\rm P}}{\rho_{\rm L} - 1} \right)^{0.5} \left(\frac{d_{\rm P}}{d_{\rm T}} \right)^{-0.35} \frac{\omega_{\rm ss}^{0.5}}{\left(gd_{\rm T} \frac{\rho_{\rm P}}{\rho_{\rm L} - 1} \right)^{0.25}} \phi_{\rm P}^{0.2}$$
(5-13)

$$\omega_{\rm ss} = \left(\frac{4gd_{\rm P}}{3\rho_{\rm L}C_{\rm D}}(\rho_{\rm P} - \rho_{\rm L})\right)^{0.5}$$
(5-14)

$$C_{\rm D} = \frac{24}{Re_{\rm p}}$$
 (*Re*_p < 1) (5-15)

$$C_{\rm D} = \frac{24}{Re_{\rm p}} (1 + 0.125 Re_{\rm p}^{0.72}) \qquad (1 < Re_{\rm p} < 10^3) \tag{5-16}$$

$$Re_{\rm P} = \frac{\omega_{\rm ss} d_{\rm P} \rho_{\rm L}}{\mu} \tag{5-17}$$

$$v_{\rm b/c} = \left(40gd_{\rm T}\phi_{\rm P}\frac{\rho_{\rm P}-\rho_{\rm L}}{\rho_{\rm L}}\right)^{0.5}C_{\rm D}^{-0.25}$$
(5-18)

 $Re_{
m P}$: 粒子レイノルズ数 / dimenonless g: 重力加速度 / $m \cdot s^{-2}$

- *d*_T:流管の内直径 / m
- di:インペラーの直径 / m
- de: 粒子の直径 / m
- μ:液体の粘度 / Pa・s

 $g: 重力加速度 / m \cdot s^{-2}$ $\phi_{P}: 粒子の体積分率 / dimenonless$ $C_{D}: 抵抗係数 / dimenonless$ $\rho_{P}: 粒子の密度 / kg \cdot m^{-3}$ $\rho_{L}: 液体の密度 / kg \cdot m^{-3}$

ωss: 粒子の定常沈降速度 / m・s-1

水を分散媒とする P2 粒子スラリーが管路を移動する際の様子を、Fig. 5-22 の写真で示した。オリフィス弁の開度を調節することによって、水の平均流速 vw,av が変化する。また異なるオリフィス弁開度で経時的に実測された、水流速 vw と流路圧力損失(水柱高 hw)との関係を Fig. 5-23 に示した。ここで水柱高は、流路出口からスラリーだめ液面までの鉛直距離とした。



(a) $V_{w,av} = 0.95 \text{ m} \cdot \text{s}^{-1}$



(b)
$$V_{w,av} = 0.24 \text{ m} \cdot \text{s}^{-1}$$



(c) $v_{w,av} = 0.07 \text{ m} \cdot \text{s}^{-1}$

Fig. 5-22 Depositing P2 slurry particles on the flow tube bottom at various velocities of flowing water [15 by permission].

Fig. 5-23 に見られるように、オリフィス弁が6回転で満開の場合は、流下経過時間とと もに減少する水柱高 *h*w と水流速 *v*wの関係は、粒子の有無に依存しなかった。前述の *v*a/b を 式 5-13 から見積もると 0.32 m・s⁻¹となるので、この場合 *v*w = 0.7 m・s⁻¹ 以上の流速域での スラリー流は不均一浮遊流と予測される。実際に観察されたスラリー流も、Fig.5-22(a)の ように不均一浮遊流であった。

オリフィス弁を 1.15 回転まで絞った場合には、水系スラリーと純水の流動に差が認めら れた。純水に対する log v_w 対 h_w 直線は、オリフィス弁満開時とほぼ同じ傾きを保ったま ま、低水流速側へ移動し、オリフィス弁以降の流路での圧力損失に変化はないことを示唆 した。一方、水系スラリーに対する log v_w 対 h_w 直線は、 $v_w = 0.29 \text{ m} \cdot \text{s}^{-1}$ を超える領域 では純水と同じ傾きであったが、 $v_w = 0.29 \text{ m} \cdot \text{s}^{-1}$ 以下では傾きが大きくなった。この境界 水流速は式 5-16 で推算された $v_{a/b} = 0.32 \text{ m} \cdot \text{s}^{-1}$ 以下では傾きが大きくなった。この境界 水流速は式 5-16 で推算された $v_{a/b} = 0.32 \text{ m} \cdot \text{s}^{-1}$ ときわめて近い。低水流速側の $v_{W,av} = 0.24$ $\text{m} \cdot \text{s}^{-1}$ で実際に観察されたスラリー流も、Fig.5-22(b)のように移動床を形成していた。さ らに、固定床形成の境界流速 $v_{b/c}$ は式 5-18 から 0.25 $\text{m} \cdot \text{s}^{-1}$ と求められた。これよりもかな り低水流速側の $v_{W,av} = 0.07 \text{ m} \cdot \text{s}^{-1}$ で実際に観察されたスラリー流は、Fig.5-22(c)のように 固定床と移動床を形成していた。このように、水系スラリー系の流動は 2 つの境界水流速、 $v_{a/b}$ と $v_{b/c}$ 、で特徴づけられることが、実験的に確認された。



Fig. 5-23 The $(v_{\rm w}, h_{\rm w})$ plots for time-dependent downstream of P2 slurry or pure water through the path as shown in Fig. 5-21; reservoir agitation 1800 rpm [15 by permission].

つぎに粒子の輸送率 β を考察する。溶融塩を分散媒とする P2 スラリーとは異なり、水を 分散媒とする P2 スラリーは撹拌回転速度を 3000 rpm まで上げても完全分散しなかった。 撹拌回転速度 1800 rpm、オリフィス弁 6 回転全開で流下させたのち、約 30 %の粒子がス ラリーだめ底面上に残留した。そこで便宜上、オリフィス弁以降の流路を輸送されるべき 粒子は、撹拌回転速度 1800 rpm の場合、スラリーだめに入れた全量の 70 %とした。この 仮定にもとづいて 0.1~0.5 vol%の P2 粒子水系スラリーに対する粒子輸送率 β を算出し、平 均水流速 $v_{w,av}$ との関係として Fig. 5-24 に示した。また推算された境界水流速 v_{ab} と v_{bc} を この図中に描き入れると、水流速の低下とともに vab 付近で粒子輸送率βが急落しているこ とがわかる。したがって、高い粒子輸送率を確保するためには、移動床の発生を抑制し、 不均一浮遊流の状態を維持することが重要と判断された。



Fig. 5-24 Transported fraction of P2 particles increasing with the mean velocity of water [15 by permission].

(2) 溶融塩系スラリーの重力流下

溶融塩系スラリーでは粒子を観察できないため、水中での実験結果をもとに流体力学的 に粒子挙動を考察した。Fig. 5-25 に示したのは、2 種類のバルブ開度(6回転と2回転)で 重力流下させた場合の液流速 n と液高 h の関係であり、溶融塩系 P2 スラリー(0.4 vol%) と純溶融塩の結果を比較してある。

Fig. 5-25 に見られるように、オリフィス弁が6回転で満開の場合は、液流速と液柱高の 関係は粒子の有無にほとんど影響されない。式5-1 で計算されるレイノルズ数は6800~ 8400 で、乱流領域にあると判断される。式5-13から見積もられる前述のvabは0.28 m・s⁻¹ であるから、0.4 vol%のP2溶融塩系スラリーは約1m・s⁻¹以上の液流速域で不均一浮遊流 状態にあると考えられる。

これに対して、オリフィス弁を2回転まで絞った場合は、P2スラリーの液流速は同一液 柱高に対する純溶融塩の液流速よりかなり低くなった。純溶融塩に対する log vL 対 h_w 直 線は、オリフィス弁満開時とほぼ同じ傾きを保ったまま、低流速側へ移動し、オリフィス弁以 降の流路での圧力損失に変化はないことを示唆した。式 5·1 で計算されるレイノルズ数は 4200~4800 で、乱流領域にある。一方、P2スラリーの場合は、0.28 m・s⁻¹付近を境界と して、log vL 対 h_L 直線の勾配が変化した。高流速側では純溶融塩と同じ傾きで、低流速側 ではこれより傾きが大きくなった。この境界流速に対応するレイノルズ数は 1300~2300 で層流領域にある。またこの境界流速は式 5·13 で推算された $v_{ab} = 0.24 \text{ m·s}^{-1}$ ときわめて 近い。したがって、P2 溶融塩系スラリーの流れは液流速 0.28 m・s⁻¹付近を下回ると、不均 一浮遊流から移動床形成流れに遷移したと推定される。



Fig. 5-25 The (v_L, h_L) plots for time-dependent downstream of P2 slurry or pure LiCl-KCl through the path as shown in Fig. 5-21; reservoir agitation 1800 rpm [15 by permission].

同様の検討を P1 スラリーに加えると、va/b の計算値 0.16 m・s⁻¹に対して、観察された境 界液流速は約 0.14 m・s⁻¹であった。また P3 スラリーの場合、va/b の計算値 0.25 m・s⁻¹に 対して、観察された境界液流速は約 0.35 m・s⁻¹であった。このように P1、P2 粒子の溶融 塩系スラリーでは、水系スラリーの不均一浮遊流/移動床流の遷移流速に関する実験式 5-13 をそのまま適用できた。

体積分率 0.2~0.4%の P2 スラリー中の粒子輸送率βを Fig. 5·26 に示した。水系スラリー での測定結果とよく類似しており、平均流速 ν_{Lav} が 0.01 m・s⁻¹では 0 %、1.0 m・s⁻¹では ほぼ 100 %となった。これらの中間の流速域 0.15~0.3 m・s⁻¹付近で、βが大きく変化して いる。

P1 および P3 スラリーの粒子輸送率をそれぞれ Fig. 5・27、Fig.5・28 に示した。粒子輸送率の急変は、P1 スラリーの場合 0.03~0.16 m・s⁻¹付近の流速域、P3 スラリーの場合 0.18 ~0.5 m・s⁻¹付近の流速域で認められた。なお、高流速域で P1 粒子輸送率が 90 %までしか 到達しないのは、一部の粒子が捕集フィルタを通過したためである。



Fig. 5-26 Transported fraction of P2 particles increasing with the mean velocity of molten LiCl-KCl [15 by permission].



Fig. 5-27 Transported fraction of P1 particles increasing with the mean velocity of molten LiCl-KCl [15 by permission].



Fig. 5-28 Transported fraction of P3 particles increasing with the mean velocity of molten LiCl-KCl [15 by permission].



Particle size / µm

Fig. 5-29 Calculated $v_{a/b}$, observed transition velocity of disperse liquid (v_{Trans}) , and observed velocity for particle deposition (v_{Dep}) at the fluidity change of LiCl-KCl or water slurry [15 by permission].

Fig. 5-29 には、各粒径のステンレス粒子に対して重力流下実験で決定された不均一浮遊流/移動床流間の遷移液流速 vTrans、および粒子輸送率の急落をまねいた下限液流速 vDepを プロットした。また、実験式 5-13 で算出される境界液流速 vab を曲線で描き入れた。本研 究ではステンレス粒子の溶融塩系および水系スラリーに対して、混合物スラリーとしての 流動性が急落する下限液流速および粒子輸送率の急落をまねく下限液流速 vDep を、ある程 度の精度で決定できた。 5-5-4 まとめ:金属微粉体が混入した溶融塩スラリーの流動と粒子輸送

使用済金属核燃料の電解精製に関連して、不溶性金属の微粒子とLiCl-KCl溶融塩の二相 混合物である劣化電解精製浴の輸送を、ステンレス粒子を模擬微粉とするスラリーで検討 し、以下の結論を得た。

- (1) 溶融塩中の粒子を強制浮上させるための撹拌条件は、水系スラリーに対して提案された Zwieteringの実験式で整理でき、粒径の増加とともに完全分散に要する攪拌条件も厳し くなった。
- (2) 流路底面上で粒子を摺動させることなく、不均一浮遊流の状態を維持することが、粒子の完全輸送に必要である。不均一浮遊流/移動床流間の遷移液流速は、都田らの水系スラリーに関する実験式 5-13 で整理できた。
- (3) 最大(粒径 415 μm)のステンレス粒子を下降角 10°の流路で完全輸送するためには、溶 融塩流速として約 0.8 m・s⁻¹(*Re*換算で 5900)以上が必要であった。

以上により、不溶性金属の微粉を含む高温溶融塩を、電解精製装置からリフレッシュ装置まで二相混合物のまま移送するために必要な条件を把握できた。

5-6 液体 Cd の流動特性と輸送

- 5-6-1 液体 Cd の重力下降流と流量制御
- 5-6-1-1 実験方法: Cd の重力下降流と流量制御
- (1) 試薬と試料の調製

Cd金属は日本鉱業金属から購入し、99.99%の純度が保証された。

(2) 実験装置

Fig. 5-30に示した装置で液体Cdの重力下降流の実験を行った。ステンレス製の上部液だ め、下部レシーバ、さらにステンレス製の流路管は断熱材で囲い、ヒータで所定温度に保 った(図中では省略)。なお、Cd(融点594 K)の凝固を防止するため、流路管外壁の設定 温度は820 Kとした。内径208 mm、深さ252 mmの上部液だめの底部中央に流路管を接続 した。流路管は内径10 mm、傾斜角2°、管頂・管底間の液位差280 mm(長さ2200 mm) で、途中にグローブバルブ(Swagelok社製Uシリーズ)を設置した。流下したCdはレシー バで回収した。上部液だめの温度を測定し、下部レシーバ内の液位をレベル計で検知した。



Fig. 5-30 Experimental apparatus for the gravitational downstream of liquid Cd [4 by permission].

(3) 実験手順の詳細: Cd の重力下降流と流量制御

実験条件の詳細をTable 5-9にまとめたが、バルブ開度をパラメータとして重力流下する 液体Cdの流量制御性を検討した。流下開始前の上部液だめ内Cd量は3.9~6.2 Lとした。各 部の温度を確認後、バルブを所定開度でオープンし、液体Cdの流動を開始した。下部レシ ーバに設置した4本のセンサで液面通過を検知し、時間間隔と液量からその区間での平均流 量*q*cdを算出した(本節では流量ベースでの実験式で検討するため、流速ではなく流量を用 いた)。下部レシーバに回収したCdは上部液だめに回送した。

Table 5-9 Gravitational downstream experiments for liquid Cd [4 by permission].

-			
Run	Total volume (L)	Cd temperature (K)	Valve opening (turn)
CG-G1	6.1	763	0.5
CG-G2	4.5	741	0.5
CG-G3	5.8	752	1.5
CG-G4	5.2	756	2.0
CG-G5	4.6	753	2.0
CG-G6	4.2	749	2.0
CG-G7	4.4	756	2.0
CG-G8	4.3	742	2.0
CG-G9	5.0	749	2.0
CG-G10	5.2	698	2.0
CG-G11	5.1	749	2.0
CG-G12	5.6	748	2.0
CG-G13	5.2	756	2.0
CG-G14	5.5	747	2.0
CG-G15	5.8	760	2.5
CG-G16	4.9	750	2.5
CG-G17	3.9	751	2.5

5-6-1-2 結果および検討: Cd の重力下降流と流量制御

(1) グローブバルブによる Cd 流量の制御

液体Cdの重力降下流量とグローブ弁開度の関係をFig. 5·31にプロットしたが、満開2.5 回転の弁を2.0回転以下の開度に調整することで、 $0.8 \sim 2.6 \text{ m}^3 \cdot \min^{-1}$ の平均流量域に制御で きた。この流量域をレイノルズ数域に換算すると、 $8000 \sim 25000$ の乱流領域に入る。 59LiCl-49KCl溶融塩の場合には、同一グローブ弁開度の調節でほぼ層流領域で流量制御が 可能であった。この相違は、液体Cdが溶融塩より高い流動性をもつことに起因する。動粘 度で比較すると、液体Cd($2.1 \times 10^{-7} \text{ m}^2 \cdot \text{s}^{-1}$ 、773 K)は59LiCl-49KCl溶融塩($1.4 \times 10^{-6} \text{ m}^2 \cdot \text{s}^{-1}$ 、773 K)の約1/7しかない。弁構造の特徴からもともと中流量域制御用とされてい るグローブ弁は、とくに高い流動性をもつ液体Cdの少流量制御にはあまり適さない。



Fig. 5-31 Mean gravitational downflow rate of liquid Cd increasing with globe valve opening [4 by permission].

バルブでの圧力損失と流量の間には、つぎの関係が知られている[3]。

$$q = \frac{C_{\rm V}}{11.56} \left(\frac{P_{\rm V}}{\rho_{\rm sp}}\right)^{0.5} \tag{5-19}$$

q:流量 / m³·h⁻¹

Cv: バルブ流量係数 / dimenonless

 ρ_{sp} :液体の比重 / dimenonless

Pv: バルブ圧力損失/kPa

バルブ開度で決まる流量係数 Gvを製造元Swagelok社の開示データ[13]から求め、Cdを通過 流体として計算した流量とバルブ開度の関係を、Fig. 5-31に破線で描き入れた。実測値のプ ロットはほぼこの曲線上にあるとみなせる。 向流還元・抽出装置のようにさらに低流量域での制御が必要な場合には、ここで利用したグローブ弁よりもオリフィス弁の方が適している。

(2) Cd 流量に対する温度の影響

バルブ開度2.0回転の条件で実測されたCd平均流量*q*caを、温度に対してFig. 5-32にプロットした。*q*caはばらつきの範囲内で一定であり、698~756 Kの区間では温度の影響は認めがたい。バルブ開度2.0回転では、直管部での圧力損失がバルブ圧力損失より支配的と推定されるが、*q*caの測定精度を上回る有意な温度変化はいずれにもない。したがって、773 Kから数+K程度の温度低下は、重力輸送される液体Cdの流量に大きな影響は与えないと判断できる。



Fig. 5-32 Effects of temperature on the mean gravitational downflow rate of liquid Cd [4 by permission].

5-6-2 減圧ポンプを利用した Cd の吸液

5-6-2-1 実験方法:減圧ポンプを利用した Cd の吸液

(1) 実験装置

Fig. 5-33の実験装置を用い、アルミナ製るつぼ(内径270 mm、深さ160 mm)中の液体 Cdを、吸液管(内直径10 mm)を経由してステンレス製吸液タンク(内径220 mm、高さ 295 mm)まで吸引輸送した。油回転真空ポンプ(佐藤真空社製 DW-360)がCd蒸気を吸 い込まないよう、真空ポンプと吸液タンクの中間に室温のフィルタタンクを設置し、Cdを 固体として回収した。吸液管の途中にはグローブバルブ(Swagelok社製のUシリーズ)を 設置した。吸液管の入口から出口までの鉛直距離は930 mmで一定としたまま、液面から吸 液管入口までの深さを吸液開始前にるつぼリフターで調節した。るつぼから吸液タンクま では所定温度に制御した。吸液にともなうるつぼ内の液面低下をレベルセンサで検知した。



Fig. 5-33 Transport experiment for liquid Cd using suction pump [4 by permission].

(2) 実験手順の詳細:減圧ポンプを利用した Cd の吸液

実験条件の詳細をTable 5-10にまとめたが、吸液管入口とるつぼ底面との鉛直距離をパラ メータとして、Cd輸送量の制御性を検討した。吸液管の外壁は約823 Kに保温した。まず、 フィルタタンクと吸液タンクを1 kPa以下まで減圧した。その後、減圧バルブと接続バルブ を閉めた直後に吸液バルブを全開(2.5回転)にし、Cdを吸液タンクへ吸い上げた。るつぼ 内のCd液面高さの経時変化から流量を決定した。吸液タンクまで輸送されたCdは、るつぼ に回送してつぎの実験に用いた。

Run	Volume (L)	Cd temp. (K)	Suction tank temp. (K)	Evacuation time before suction (min)	<i>h</i> _{I/B} (mm)*
CV-G1	1.9	723	723	88	8
CV-G2	2.4	720	723	67	8
CV-G3	3.0	723	723	65	8
CV-G4	6.7	693	773	93	8
CV-G5	6.4	723	773	12	23
CV-G6	5.1	726	773	18	23
CV-G7	5.8	730	773	21	23
CV-G8	6.6	739	773	29	23
CV-G9	5.8	726	745	37	23
CV-G10	5.2	730	723	98	23
CV-G11	7.0	734	723	116	23
CV-G12	6.3	740	723	170	23
CV-G13	6.3	735	673	54	23
CV-G14	3.3	718	723	47	23
CV-G15	6.6	734	773	12	33
CV-G16a	6.5	737	723	40	33
CV-G16b	6.8	735	723	41	33
CV-G17	2.9	719	723	46	33
CV-G18	3.2	728	723	53	33
CV-G19a	7.0	739	723	57	33
CV-G19b	6.8	739	723	299	33
CV-G20	6.3	737	723	74	33
CV-G21	6.2	730	673	124	33
CV-G22	6.4	741	773	127	33
CV-G23	4.1	723	723	87	33
CV-G24	2.5	723	723	88	33
CV-G25	5.3	739	723	139	33
CV-G26	2.7	724	723	84	43
CV-G27	5.3	741	723	63	43
CV-G28	6.3	739	673	68	43
CV-G29	6.4	739	723	45	43
CV-G30	6.6	740	773	62	43
CV-G31	7.0	729	723	74	43

Table 5-10 Vacuum suction experiments for liquid Cd [4 by permission	J.
--	----

* Height of suction tube inlet from crucible bottom

5-6-2-2 結果と考察:減圧ポンプを利用した Cd の吸液

(1) 減圧タンクによる理論吸液揚程

液体Cdと59LiCl-41KCl溶融塩の物理的性質をTable 5-11に比較した。Cdは溶融塩の約5 倍の密度をもつが、粘度は溶融塩の約0.7倍であまり違わない。また、両者の融点も近いが、 CdはLiClやKClより600 K以上も沸点が低く、蒸発しやすい。

Table 5-11 Physical properties of liquid Cd and molten 59LiCl-41KCl.

	Cd [20]	59LiCl-41KCl [10,21]
Melting point / K	594	625
Boiling point / K	1040	1655 (LiCl), 1710 (KCl)
Density / g • cm ⁻³ (at 773 K)	7.8	1.6
Viscosity / mPa•s (at 773 K)	1.6	2.2

$$h_{\rm th} = \frac{10.2}{\rho_{\rm Cd}} \left(101 - \frac{P_{\rm V}V_{\rm V} + 101V_{\rm T}}{V_{\rm V} + V_{\rm T}} + P_{\rm Cd} \right)$$

*h*th:理論吸液揚程 / cm

Pv: 吸液前のタンク内圧 / kPa

W: 吸液タンクの内容積/L

9

(5-20)

pcd:Cdの密度/g·cm⁻³
 Pcd:Cdの蒸気圧/kPa
 Vn:吸液管の内容積/L

減圧タンクによる液体Cdの理論揚程hth(地球表面上の場合)は、式5-20で与えられる。 吸液前の吸液タンク内圧Pvによるhthの変化をいくつかの温度でこの式から計算し、Fig. 5-34に示した。本研究で目標とするCd揚程930 mmを確保するためには、773 Kでは吸液タ ンク内圧を約25 kPa以下とする必要があるが、973 Kまで温度が上がると1 kPaをはるかに 下回る減圧が要求される。そこで、923 K以下の温度域でCdの吸液輸送を検討した。



Fig. 5-34 Increasing theoretical suction head $h_{\rm th}$ with decreasing pressure in vacuum tank at various Cd temperatures [4 by permission].

(2) 吸液タンクの必要排気時間

前の実験終了後に除去しきれなかったCdが、吸液タンク内などに残留した。このため、 残留Cdがすべてフィルタタンクまで運ばれて凝固するまで、吸液タンクの内圧はCdの平衡 蒸気圧Pcdより下がらない可能性があった。Cd蒸気を含む吸液タンク内の気圧は実測しがた いため、吸液開始前の吸液タンク排気時間がその後の吸液に与える影響をまず検証した。 この結果をFig. 5-35に示したが、約45分間以上排気してから吸液を開始すれば、吸液ロより高いレベルにあったすべての液体Cdを吸液タンクまで輸送できることがわかった。

したがって、吸液タンク内を吸液開始前に45分間以上排気すれば、残留Cdの影響を受けることなく、真空ポンプの固有到達真空度と吸液タンク内容積で決まるCdの吸引輸送が可能と判断した。なお、接続バルブを閉じた状態で排気すると、1kPaまでの減圧にこの真空ポンプは10分程度を要した。



Fig. 5-35 Effects of the evacuation time before suction on the final residual height of liquid Cd in a crucible at 730 K [4 by permission].

(3) Cd の輸送量と輸送率

Fig. 5-36に示したように、吸液タンクまで輸送されるCd量はるつぼに入れたCd量ととも にほぼ直線的に増加した。吸液管を浅く挿入したほど(吸液管入口をるつぼ底面から高く 置いたほど)これらの直線の横軸切片が大きいのは、吸液の途中で液面が吸液口より低く なってしまうためである。吸液管をもっとも深く(るつぼ底の8 mm上まで)挿入した場合 には、最高の輸送率約90 %が実現された。切片だけが吸液管入口位置に依存し、勾配は同 一のこれらの直線関係は、現在のところ輸送論的に定式化できていないが、吸液口におけ る液だめ静液圧が高いほど輸送率が高くなることを、定性的に示すものと推論している。

工学的見地からは、供給側容器底面を基準としたCd液高と吸液口高さを調節することに よって、輸送量を約1~7 Lの範囲で制御することができ、電解精製のCd陰極合金の輸送に は適している。


Fig. 5-36 Changes in the transported amount of Cd with the initial amount of Cd in a crucible depending on the immersion depth of suction tube inlet [4 by permission].

(4) Cd 流量の制御

これまで重力降下流による輸送では、バルブ開度による流量制御を検討してきた。そこ で、グローブバルブ開度一定(2.5回転)の条件下で、Cd吸引流量とるつぼ投入Cd量の関係 をFig. 5-37に示した。Cdの輸送量と吸液開始から完了までの所要時間から算出したCd流量 は、バルブ開度一定にもかかわらず0.8~3.5 L・min⁻¹まで大きくばらついた。この最大の理 由は、吸液完了までの所要時間が最短2 min弱であるのに対して、吸液バルブの手動操作に 要する時間が無視できないことにあると推定された。したがって、吸液バルブをより短時 間で操作できないかぎり、Cdの吸引流量をバルブ開度によって制御するのは困難と考えた。



Fig. 5-37 Flow rate of pulled up liquid Cd at various loads in a crucible at 730 K [4 by permission].

5-6-3 遠心ポンプによる Cd の揚液

5-6-3-1 実験方法:遠心ポンプによる Cd の揚液

(1) 実験装置:遠心ポンプによる Cd の揚液

実験装置の概略をFig. 5-38に示した。液体Cdの輸送先としてはもともと蒸留器を想定しているが、ここでは遠心ポンプによるCdの揚液輸送をおもな検討対象とするため、回収タンクまでの輸送と供給タンクへの回送によって、繰り返し輸送実験の便宜を図った。なお、Cdの供給源は供給タンクと呼ぶべきところであるが、本研究対象のプロセス中ではCdの一時的な液だめに相当するため、以下ではバッファタンクと呼ぶ。

遠心ポンプ(サンワハイドロテック社製MAE-V、回転羽根50 mm、制御可能回転速度1600 ~3000 rpm)は、5-4-2で溶融塩輸送に用いたものと同型である。バッファタンク(内直 径250 mm、深さ150 mm)内に設置したポンプの出口を起点とするステンレス管液流路(内 直径10 mm)の長さは、回収タンク(内直径252 mm、深さ208 mm)内の出口まで約5.8 m、 蒸留るつぼ(内直径130 mm、深さ150 mm)上の出口まで約5.0 mである。流路途中に設 置した供給バルブおよびバイパスバルブの操作により、輸送先を回収タンクまたは蒸留器 に切り替えた。遠心ポンプ出口からの最高流路揚程はいずれの輸送先に対しても1.63 mで ある。

バッファタンク、回収タンクおよび流路管は断熱材で囲ったうえ、ヒータで所定温度に 保った。バイパスバルブおよび供給バルブにはいずれもグローブ弁(Swagelok社製のUシ リーズ)を用いた。バッファタンク内のCd温度を熱電対で測定した。バッファタンクと回 収タンク内にはレベルセンサを設置し、蒸留るつぼへの輸送量は下部のロードセルで決定 した。



Fig. 5-38 Pump up experiments of liquid Cd to the recovery tank or distiller by a centrifugal pump [4 by permission].

(2) 実験手順の詳細:遠心ポンプによる Cd の揚液

30~60 kgのCdをバッファタンク中で溶融したのち、遠心ポンプを起動し、バイパスバルブまたは供給バルブを所定開度として揚液を開始した。バッファタンクと回収タンク内における所定液面通過シグナルと輸送経過時間にもとづき、流量を決定した。回収タンクへ輸送したCdは、実験終了後バッファタンクへもどした。蒸留器へ輸送したCd量は実測された質量変化で決定し、体積と流量に換算した。一連の実験条件をTable 5-12にまとめた。

Run	Destination	Cd volume (L)	Temperatur e (K)	Pump rotation (rpm)	Valve opening (turns)	Repetation (times)
CC-G1	Recov. tank	5.7 - 7.5	676 - 719	3000	0.25	7
CC-G2	Recov. tank	5.2 - 7.7	678-755	3000	0.5	13
CC-G3	Recov. tank	7.1 - 7.4	689 - 732	3000	1.0	4
CC-G4	Recov. tank	7.0 - 7.4	716 - 735	3000	1.5	3
CC-G5	Recov. tank	7.2-7.5	700 - 720	3000	2.0	3
CC-G6	Recov. tank	7.0 - 7.5	690 - 730	3000	2.5	3
CC-G7	Recov. tank	7.4	735	2700	0.5	2
CC-G8	Recov. tank	7.1 - 7.4	725 - 737	2700	1.0	3
CC-G9	Recov. tank	7.1 - 7.3	728 - 737	2700	1.5	2
CC-G10	Recov. tank	7.4	718-729	2700	2.0	2
CC-G11	Recov. tank	7.4	712	2700	2.5	1
CC-G12	Recov. tank	7.3	726	2400	1.0	1
CC-G13	Recov. tank	7.1 - 7.2	730 - 733	2400	1.5	2
CC-G14	Recov. tank	7.2 - 7.3	727 - 738	2400	2.0	2
CC-G15	Recov. tank	7.3 - 7.4	722 - 740	2400	2.5	2
CC-G16	Recov. tank	7.3	748	2100	2.5	1
CC-G17	Distiller	3.8	693	3000	0.25	1

Table 5-12 Pump up conditions of liquid Cd by a centrifugal pump[4 by permission].

5-6-3-2 結果と考察:遠心ポンプによる Cd の揚液

(1) バルブ開度による流量制御

まず遠心ポンプの回転速度を一定として、バイパスバルブ開度によるCd流量制御の可能 性を検討した。遠心ポンプ回転速度を3000 rpmで一定とした場合の結果を、Fig. 5-39にプ ロットしたが、バルブ開度約2.0回転以下の範囲でCd流量qcdを制御できる(バイパスバル ブ以外での圧力損失が相対的に小さい)と期待された。0.5~2.5 L・min⁻¹の流量は流路管内 でのレイノルズ数3700~24000に相当し、乱流領域での管内流動調節となった。

液体Cdの重力下降流の場合と同様に、バルブ固有の流量係数 Cvをもとに式5-19から計算 されるバルブ開度と流量の関係を破線で描き入れた。遠心ポンプ輸送での実験値プロット はおおむねこの曲線上にあると見なせる。



Fig. 5-39 Mean flow rates of liquid Cd increasing with bypassing globe valve opening at a constant rotation rate of the centrifugal pump [4 by permission].

実用をめざしている蒸留器への輸送では、黒鉛製蒸留るつぼの機械的強度があまり充分 ではないため、高密度の液体Cdを多流量で投入すると、衝撃(黒鉛るつぼ底面から流路出 口までの高さは約200 mm)で破損するおそれがあるため、少流量域での液送制御が必要と なる。遠心ポンプ回転速度を3000 rpmとした場合、供給バルブ開度を0.25回転まで絞ると、 1.3 L・min⁻¹の平均流量となり、Fig. 5-40に見られるように、るつぼは損傷することなく液 体Cdを受け入れることができた。この結果から、1.5 m超の揚程も可能で少流量制御も比較 的容易な遠心ポンプ輸送法は、電解精製後のCd陰極合金を蒸留器まで移送するのに適した ものとして期待できる。



Fig. 5-40 A photograph of the graphite distillation crucible after receiving liquid Cd (Run CC-G17).

(2) 遠心ポンプ回転速度調節も併用した少流量制御

5-4-2での溶融塩輸送と同様に、遠心ポンプ回転速度と流路中のバルブ開度の調節を併用 することによって、少流量制御の可能性を検討した。バイパスバルブ開度をパラメータと し、遠心ポンプ回転速度によるCd平均流量qcaの変化をFig. 5-41にプロットしたが、バルブ 開度2.0回転以上と1.0回転の2グループに分けて考察できる(バルブ開度1.5回転のデータは いずれのグループに含めるべきか判定しがたい)。各グループ内では、平均流量qcaがポンプ 回転速度に対して直線的に増加する。この原因は、開度1.0と2.0の間でこのグローブバルブ の流量係数*C*vが大きく変化することによって、流路全体の圧力損失が大幅に変わることに あると推定された。

Fig. 5-41にプロットしたのはポンプ揚液が可能であったデータのみで、バイパスバルブ を満開(2.5回転)にしても、遠心ポンプの回転速度を2100 rpmまで下げると揚液できなか った。一方、バルブ開度が1.0回転を下回ると、遠心ポンプの回転速度を3000 rpm以上とし ないかぎり揚液できなかった。ポンプ回転速度nを下げることで少流量送液を実現しようと すると、式5-7のようにn²に比例するポンプ揚程も必然的に減少し、これが流路揚程を下回 ると揚液輸送そのものが不可能となる。

Fig.5-41に見られるようにバルブ開度だけの調節より、ポンプ回転数とバルブ開度の調節 を併用した方が少流量域の制御性が向上する。しかし、還元・抽出用の向流多段装置で要 求される少流量をなお超える範囲にある。遠心ポンプによる液体Cd輸送は、これを除く多 くのCd移送ステップへの応用が期待される。



Fig. 5-41 Mean flow rates of liquid Cd increasing with pump rotation rate [4 by permission].

(3) 遠心ポンプ揚液におよぼす Cd 温度の影響

送液粘度の上昇とともに、遠心ポンプの性能は一般に低下することが知られており[3]、 Cdについても温度の影響を検討した。遠心ポンプ回転速度3000 rpm、バルブ開度0.5回転 の条件下において、Cd平均流量qcdの温度変化をFig. 5-42に示した。温度低下にともなう流 量減少が認められるが、755 Kから683 Kまでの温度低下に対する流量変化率は約-4%にす ぎないことがわかった。

5-6-1の重力降下流の場合に比べて流量の温度変化率が大きいのは、流路長が約2倍で、 温度に敏感な直管部での圧力損失の寄与が大きくなっているためと推論される。一方、 5-4-2の59LiCl-49KCl塩の場合と比較すれば、ほぼ同程度の流量温度変化率である。本研 究の対象プロセスで想定されている電解精製の運転温度は773 Kであり、若干の温度降下が 発生したとしても、Cdの遠心ポンプ輸送に与える影響はきわめて小さいものと判断できる。



Fig. 5-42 The effects of temperature on the mean pump flow rate of liquid Cd through a 1.63 m head path [4 by permission].

5-6-4 まとめ:液体 Cd の輸送

液体Cdの輸送を三つの方法で検討し、以下の結論を得た。

- (1)重力下降による Cd 流量をグローブ弁開度で調節でき、弁での圧力損失を支配的にすれば、弁固有の流量係数をもとに流量を予測できる。溶融塩よりも流動性が高い液体 Cd の場合、輸送管内は乱流状態になるが、流量制御が比較的容易なため、ポンプアップの必要がない移送には適する。
- (2) 減圧ポンプを利用した Cd の吸引輸送を、揚程 930 mm まで実証できた。この場合、 吸液口の高さを変えることによって、Cd の限界輸送量を調節できるが、バルブ開度を 瞬時に変更できないため、流量の制御は困難である。

(3) 遠心ポンプによる Cd 輸送を揚程 1.63 m まで実証できた。遠心ポンプ回転速度とグロ ーブ弁開度の調節を併用し、比較的少流量で Cd を輸送できた。流量制御に与える温度 変動の影響はきわめて小さかった。

以上により、電解精製槽陰極から蒸留装置へのCd合金の輸送、蒸留された純Cdの電解精 製槽陰極への回送などのステップで必要となる、高温液体金属の移送方法を把握すること ができた。

5-7 電解精製-陰極 Cd 合金蒸留精製の連続プロセス化

5-7-1 工学規模をもつ電解精製-陰極 Cd 合金蒸留精製の連続装置

使用済金属燃料の電解精製と両陰極(固体 Fe および液体 Cd の陰極) 析出物の蒸留精製 を連続プロセス化する構想については、Fig. 5-2 ですでに述べた。このうち、Cd 陰極内へ のアクチノイド回収と合金化した Cd の更新に関わる高温液体金属の輸送(陰極で生成した Cd-アクチノイド合金の蒸留精製部への搬出と蒸留精製部から陰極への純 Cd の補給)に相 当する部分をとりあげ、ここでは工学規模の連続プロセス実験で検討した[23]。

目標とした工学規模装置の電解精製部の諸元を、Table 5-13 に実規模装置[4, 22]と比較 した。臨界事故防止のため、実規模 Cd 陰極中に回収する U と Pu 量の上限は 4.8 kg に規 制されている。一方、これらを液相で輸送するためには、Cd との固体金属間化合物が析出 する濃度(773 K において U では 2.3 wt%[24]、Pu では 3.6 wt%[25])以下に保つ必要が ある。そこで、U と Pu の上限濃度を 2.0 wt%に設定すると、実規模装置の陰極 Cd 量は 240 kg と算定される。これに対して、工学規模の陰極 Cd は 30 kg としたので、陰極は 1/8 ス ケールである。また、実規模陽極は使用済金属燃料約 26 kg であるが、工学規模では 2 kg としたので、陽極は 1/13 スケールである。工学規模の電解精製槽は内直径 780 mm、高さ 800 mm としたので、固体鉄陰極を 4 本も装備する実規模電解精製槽に対して約 1/13 スケ ールである。以上のように、工学規模での電解精製部のスケールファクターは主要部位で 1/8~1/13 の範囲にあり、実規模での電解精製をほぼ模擬できるものと期待される。

	Engineering sacle	Full scale	Scale factor
Electrolytic cell / m D×H or W×L×H	$0.78\phi imes 0.8$	$2 \times 1.9 \times 1.2$	<i>ca.</i> 1/13
Salt / kg	150	1920	
Cd crucible / m D×H	$0.27\phi imes 0.16$	$0.4\phi imes 0.32$	1/0
Cd amount / kg	30	240	<i>ca.</i> 1/8
(U+Pu) in cathode / kg • bacth ⁻¹	0.6*	4.8	
Anode spent fuel / kg	2	25.9	<i>ca.</i> 1/13
			1 2 2 1 2 2 2

Table 5-13 Proposed engineering scaled electrorefiner compared with an expected full scaled plant.

* 30 kg×0.02

陽極として金属 U や Pu を調達することが困難なため、金属ガドリニウム(Gd)を模擬陽 極に使用した。Fig. 3-2 ですでに示したように、59LiCl-41KCl 塩中における M | M(III)の 平衡電極電位が U や Pu にもっとも近い希土類金属が Gd である。

5-7-2 Gd を模擬アクチノイドとする工学規模連続装置の構築

液体 Cd および Cd-Gd 合金の輸送を前提として、電解精製-陰極合金蒸留の連続装置を 工学規模で構築した。そのフロー図を Fig. 5-43 に示す。5-6 で得た知見をもとに、ここで の装置設計にあたっては高温液体金属の最適輸送法をつぎのように選択した。

Fig. 5-44(a)の陽極バスケットに模擬使用済燃料としてディスク状の Gd 金属を入れる。 また、Fig. 5-44(b)のアルミナ製陰極るつぼへ液体純 Cd を供給タンクから重力輸送(TR1) する。溶融塩浴中で電解を行い、陽極から酸化溶出した Gd(III)を陰極 Cd 内に Gd(0)とし て還元・回収する。

電解精製終了後、Fig. 5-45(c)の吸引タンクまで陰極 Cd-Gd 合金を吸引輸送(TR2)する。 この吸引タンクから遠心ポンプを設置したバッファタンクまでは、Cd-Gd 合金を重力輸送 (TR3)する。さらに、バッファタンクから Fig. 5-45(c)の蒸留器まで Cd-Gd 合金を遠心ポン プ輸送(TR4)する。

黒鉛製蒸留るつぼから揮発した純 Cd を Fig. 5-45(c)のコンデンサ内で凝縮させたのち、 Cd 供給タンクまで重力輸送(TR5)する。

以上のように、重力下降流、減圧吸引流さらにポンプ揚液流を併用し、液体金属輸送に もとづく電解精製-陰極合金蒸留の連続プロセスを構成した。この工学規模装置の運転状況 や各ステップでの物質収支を検証し、連続装置としての性能を評価・検討した。



Fig. 5-43 A consecutive electrorefining-distillation plant based on liquid Cd (and Cd-Gd) transport. Data taken from [23].



Fig. 5-44 Prepared anode and cathode assemblies in addition to a part of liquid metal transport paths. Data taken from [23].

5-7-3 電解精製-陰極合金蒸留の工学規模連続装置内での純 Cd の循環輸送

5-7-3-1 用いた試薬と試料の調製

金属 Cd は日本鉱業金属から購入し、純度 99.99%が保証された。

5-7-3-2 実験手法の詳細:純Cdの循環輸送

Fig. 5-43 のフロー図に示したとおり、【供給タンク –(TR1)→ 陰極るつぼ –(TR2)→ 吸 引タンク –(TR3)→ バッファタンク –(TR4b)→ コンデンサ –(TR5)→ 供給タンク】の順 に液体の純 Cd を循環輸送した。溶融 Cd の移送を検証する本実験では、蒸留器への液送 (TR4)からコンデンサへの Cd 蒸気輸送・凝縮にいたるステップを省略し、バッファタンク からコンデンサに直接 Cd を輸送(TR4b)した。

電解精製装置、タンクおよび液送管の温度を、すべて 773 K を目標に制御した。

TR1 では、バルブ V1 を開度 0.5 回転とし、供給タンクから陰極るつぼへ Cd を重力輸送 した。供給タンク内液面と陰極るつぼ底面の高低差は約 580 mm である。

TR2 では、バルブ V2 を閉じ、吸引タンク内圧力が 1 kPa 以下に到達するよう 45 分間 以上排気した。吸引管入口は陰極るつぼ底面の上方 23、33、または 43 mm に配置した。 排気完了終了直後にバルブ V2 を全開し、吸引タンクに Cd を吸い上げた。この流路区間の 最高揚程は 930 mm である。

TR3 では、バルブ V3 を開度 2.5 回転とし、吸引タンクからバッファタンクへ Cd を重力 輸送した。吸引タンク内液面とバッファタンク内液面の高低差は約 630 mm である。

TR4b では、遠心ポンプ回転速度を 3000 rpm、バルブ V5 を開度 0.25 回転とし、バッフ アタンクからコンデンサヘ Cd を輸送した。この流路区間の最高揚程は 1630 mm である。

TR5 では、バルブ V6 を開度 2.5 回転とし、コンデンサから供給タンクへ Cd を重力輸送 した。コンデンサ内液面と供給タンク内液面の高低差は約 280 mm である。 陰極るつぼに入れた 6.3 L の液体 Cd を出発点として、以上の循環液送を 5 サイクル繰り 返した。すべての液体 Cd 容器中にそれぞれ複数設置したレベルセンサによって、所定高さ の液面通過を検知し、Cd の液量・輸送量・流量を算出した。

5-7-3-3 結果と考察:純Cdの循環輸送

(1) 循環輸送サイクルにおける Cd の物質収支

各 Cd 容器における流入量、流出量および流入完了時点での液量をサイクルごとにまとめ、 Table 5-14 に示した。陰極るつぼから吸引タンクへの輸送(TR2)量は、るつぼ底面からの吸 引口高さ 33 mm で規制すると再現性が高く、4.5±0.2 L となった(この場合、TR2 完了時 点で陰極るつぼに残留する Cd 量は約 1.7 L である)。バッファタンクの流入(TR3)量と流出 (TR4b)量はほとんど等しく、吸引タンクから重力輸送された Cd はすべてコンデンサへポン プ排出された。なおこのバッファタンク内には、遠心ポンプ吸い込み口以下のレベルに推 定約 1.4 L の Cd がサイクル開始前から残留している。また、バッファタンクからの流出 (TR4b)量よりもコンデンサ中の Cd 量が少なく表示されているが、これは大底面積のコンデ ンサでは液位検知にもとづく Cd 量の測定誤差が大きいためである。実際に、バッファタン クからの流出(TR4b)量は次サイクルにおける陰極るつぼへの流入(TR1)量とほぼ等しいこ とが確認された。

5 サイクル目 CCy-5 における TR1 完了後でも、陰極るつぼ内で初期投入量と同じ 6.3 L の Cd が確認されたので、ここで構築した循環ループは Cd 損失を生じることなく正常に機 能すると判断された。

Run	Cathode crucible					Buffer ta	nk	Condenser	Supply tank	
	TR1 in	Total	Tube*1	TR2 out	TR3 in	Total*3	TR4b out	Total (L)	Total (L)	
	(L)	(L)	(mm)	(L)	(L)	(L)	(L)			
CCy-1	-	6.3^{*2}	23	5.1	4.9	6.3	4.9	4.6	4.9	
CCy-2	5.1	6.3	33	4.4	4.2	5.7	4.3	3.9	4.5	
CCy-3	4.4	6.3	33	4.7	4.5	5.9	4.5	4.1	4.6	
CCy-4	4.7	6.2	33	4.5	4.2	5.7	4.3	3.9	4.5	
CCy-5	4.5	6.3	43	3.9	3.3	4.6	3.2	3.7	4.4^{*4}	

Table 5-14 Observed mass balance of liquid Cd during five transport cycles. Data taken from [23].

 *1 Height of suction tube inlet from crucible bottom $*2 Cycle start

*³ Including initial deposit of 1.4 dm³

*4 Cycle end

(2) 循環輸送サイクルにおける Cd 流量

液体 Cd 合金の移送にあたっては、輸送量のみならず流量にも配慮する必要がある。そこで、各流路の中間に設置したバルブの開度と流量(平均値)の関係を Table 5-15 にまとめた。

TR1 では、アルミナ製陰極るつぼへの熱的衝撃を緩和するため、バルブ V1 の開度を 0.5 回転に設定し、0.3 L・min⁻¹の少流量移送を実現した。瞬間最多流量は約 0.5 L・min⁻¹ と見 積もられた。

TR2 では、陰極るつぼから吸引タンクへの流量は 1.5 L·min⁻¹であった。

TR3 では、バルブ V3 満開(2.5 回転)の重力輸送で充分な流量 3.0 L·min⁻¹ が達成された。

TR4b では、黒鉛製蒸留るつぼに対する機械的衝撃の緩和(TR4 の場合)をめざし、遠 心ポンプ回転速度 3000 rpm とバルブ V5 開度 0.25 回転の条件下で、0.7 L・min⁻¹の少流量 移送を実現した。

TR5 では、バルブ V6 を満開(2.5 回転)として、充分な重力下降流量 2.5 L・min⁻¹を確保できた。

移送先を黒鉛製あるいはアルミナ製のるつぼとする高温液体 Cd 輸送(TR1 および TR4) では、液受け入れ時のるつぼ破損を防ぐためになるべく少流量が、それ以外では輸送時間 短縮のため逆になるべく多流量が望ましい。ここで構築した工学規模の Cd 逐次移送装置で は、これらの流量条件をほぼ満足することができた。

Table 5-15 Required low or high flow rate of Cd in each transport step. Data taken from [23].

	TR1	TR2	TR3	TR4b	TR5
Driving force	Gravity	Vacuum suction	Gravity	Centrifugal pump	Gravity
Valve opening (turns)	0.5	2.5	2.5	0.25	2.5
Flow rate (L•min ⁻¹)	0.3	1.5	3.0	0.7	2.5

5-7-4 Gdを模擬アクチノイドとする電解精製と陰極合金液体の輸送

5-7-4-1 用いた試薬と試料の調製

Cd は日本鉱業金属から購入し、純度 99.99 %が保証された。59LiCl-41KCl 共晶組成塩 および GdCl₃は APL (Anderson Physics Laboratories)社から購入し、いずれも純度 99.9 % が保証された。ディスク状金属 Gd(20 Ø×5 mm)は Rare Metallic 社から購入し、純度 99.9 % が保証された。

5-7-4-2 実験方法の詳細: Gd を模擬アクチノイドとする電解精製と陰極合金液体の輸送 Table 5-16 に実験条件の詳細を示したが、第一回目の電解精製(GEr-1)は以下のように行 った。59LiCl-41KCl 塩約 150 kg を電解精製槽中で溶融(753 K)したのち、所定量の GdCl₃ を加え、Gd 濃度 1 wt%の電解精製浴とした。ステンレス製陽極バスケットには金属 Gd 約 2 kg を入れ、バスケットごと 50 rpm で回転させた。供給タンク内で溶融した金属 Cd 約 27 kg を、アルミナ製陰極るつぼへ移送(TR1)した。アルミナ管で側面を被覆したステンレ ス棒を、通電用リードとして Cd 液面下に沈めた。またステンレス製撹拌羽根を挿入し、陰 極液体金属を 50 rpm で撹拌した。陰極液体金属 | 電解精製浴塩界面の面積は 459 cm² であった。

電解精製は 20.0~44.7 A の電流規制条件下で行った。電解精製中の陽極・陰極電位は、 Ag | [AgCl, Cl-] (59LiCl-41KCl 共晶塩に 1 wt%の AgCl を加えた三元系溶融塩中の Cl-) の可逆電極を基準として測定した。所定時間で電解精製を中断し、浴塩を少量採取して純 水に溶解した。また陰極金属を少量採取し、1 mol・L⁻¹ HNO3 水溶液に溶解した。これらに 含まれる Gd および Li を、ICP-AES (誘導プラズマ発光分析装置)で定量した。

Table 5-16 Controlled current electrorefining conditions for Gd with partially refreshed Cd cathode. Data taken from [26].

GEr-1	GEr-2	GEr-3
27.0	27.0	28.1
0.04 / 0.43	0.55 / 1.24	0.69* / 1.17
1.04 / 1.18	2.47 / 2.49	3.93 / 3.86
20.0	20.8	20.3 - 44.7
50	50	50
50	50	50
213	231	448
	GEr-1 27.0 0.04 / 0.43 1.04 / 1.18 20.0 50 50 213	GEr-1 GEr-2 27.0 27.0 0.04 / 0.43 0.55 / 1.24 1.04 / 1.18 2.47 / 2.49 20.0 20.8 50 50 50 50 213 231

* Based on mass balance at refreshing

第二回目の電解精製(GEr-2)では、第一回目の電解精製(GEr-1)終了後の陰極をそのまま用 いた。GEr-1 終了時よりも GEr-2 開始時の陰極中 Gd 濃度が高いのは、電解電流遮断下で 進行する陰極からの Li 溶解と Gd 析出 (後述)のためである。第三回目の電解精製 (GEr-3) 開始前には、GEr-2 終了後の陰極金属を以下のように更新した。GEr-2 終了後の陰極合金 を吸引タンクへ搬出(TR2)し、供給タンクからほぼ同量の純 Cd を補給輸送(TR1)した。ま た、第三回目の電解精製(GEr-3)終了後も、陰極合金を吸引タンクへ搬出(TR2)した。この 合金搬出時には、充分な流路を確保するため、陰極るつぼ底面から上方 42 または 52 mm に吸引管入口を配置した。このプロセス実験ではバッファタンクから蒸留るつぼへの合金 輸送(TR4)も行い、蒸留るつぼの重量変化から輸送量と流量を算出した。蒸留るつぼまで輸 送された合金も、上述の手順で分析した。この他の操作は 5-7-3 における純 Cd の循環輸 送と同様の手順で行った。

5-7-4-3 結果と考察: Gd を模擬アクチノイドとする電解精製と陰極合金液体の輸送

(1) 工学規模における Gd の電解精製

アクチノイドの模擬物質とした Gd の電解精製では、

Anode : $Gd(0,Gd) = Gd(III,MS) + 3e^{-}$ (5-21a)

Cathode : $Gd(III,MS) + 3e^- = Gd(0,Cd)$ (5-21c)

の変化が進行し、陽極の Gd が陰極の液体 Cd 相内へ合金成分として移動する。これ以外の 電極反応が進行しなければ、通過する電流の大きさがそのまま電解精製の速度に対応する。 理想的な電解精製における最大電流は、陽極または陰極における競争反応の開始によって 規制され、陽極は競争反応開始電位以下、また陰極も競争反応開始電位以上の両条件を満 足する必要がある。不均一系電極反応では、反応場への(反応場からの)関与物質の輸送 過程も速度に関わるため、Gd(III,MS)やGd(0,Cd)の濃度分布が反応電位を支配する。さら に、反応場の面積(電極有効表面積)まで反応電位を左右するため、電解精製槽の幾何学 的構造にも影響される。

そこで、構築した工学規模電解槽の最大運転電流を評価するため、異なる Gd(III,MS)濃度で電解精製した場合の陽極電位、陰極電位、陰極電流効率を、Fig. 5-45~5-47 に比較した[26]。なお、これらの図の横軸は一定電解電流を印加した積分経過時間であり、陰極電流効率は電解前後における Gd(0, Cd)量と通電電気量から算出し、プロットした。電流 20 A は同一で Gd(III,MS)濃度が異なる GEr-1 (Fig. 5-45)と GEr-2 (Fig. 5-46)の結果を比較すると、約–1.6 V でほとんど電解時間によらない陽極電位は、両者共通であった。また、GEr-2 での陰極電位も-2.0 V でほとんど経時変化しないが、GEr-1 の陰極電位は電解時間とともに-2.1 V まで低下する傾向が認められた。さらに、GEr-2 では陰極電流効率が 100 %近いのに対して、GEr-1 では約 60 %と低かった。Gd(III,MS)濃度が低い GEr-1 の場合、Gd 析出以外の還元反応が関与していることが、この結果からわかった。

主反応物 Gd(III,MS)の陰極面近傍での欠乏が競争反応の開始につながったと推測される ため、つぎの電解精製 GGr-3 では Gd(III,MS)濃度を 3.9 wt%まで上げ、電流値の影響を調 べた。Fig. 5-47 に見られるように、陰極電位は電流の増加とともに-2.5 V 付近まで低下し た(同時に、陽極電位も-1.4 V 付近まで上昇し、両極の電位差である電解電圧が増加した)。 陰極電流効率は電流 35 A まで 100 %に近いレベルを維持したが、それより大電流では低下 した。大電流での電解精製で陰極電位が低下し、陰極電流効率も下がる原因は、明らかに 競争反応の進行である。

この電解精製槽の陰極で考え得る唯一の競争反応は、Li(I, MS)から Li(0, Cd)へ還元反応、 式 5-22 である。そこで、GEr-1 から GEr-3 の電解精製後に実測された陰極 Cd 中の Li/Gd のモル比を Fig. 5-48 に示した。Gd(III,MS)濃度の高い GEr-2 では Li/Gd 比が 0.25 以下で あるのに対して、Gd(III,MS)濃度の低い GEr-1 では Li/Gd 比が 1.5 と大きい。実験 GEr-3 でも、小電流域では Li/Gd が小さいが、電流 40 A になると Li/Gd 比が 2.0 を超えた。

 Cathode: Li(I,MS) + e⁻ = Li(0,Cd)
 (5-22)

 このように、Gd 電析の電流効率が低下する電解精製条件では、陰極で Li 電析が競争的

 に進行することが確認された(反応電子数をもとにすれば、Li/Gd 比 1.5 は Li 電析の電流

 効率 33.3 %、Cd 電析の電流効率 66.7 %に相当する)。以上の結果から、電解浴中の Gd 濃

 度を 4 wt%以上、電流 35 A 以下で本電解精製槽を運転すれば、陰極における Gd 電析の電

 流効率が 100 %近いレベルに維持されると期待できた。



Fig. 5-45 Operating cathode potential, and epotential, and current efficiency (\bigcirc plots) for Gd depositing during GEr-1.



Fig. 5-46 Operating cathode potential, anode potential, and current efficiency (\bigcirc plots) for Gd depositing during GEr-2. Data taken from [26].



Fig. 5-47 Operating cathode potential, anode potential, and current efficiency (• plots) for Gd depositing during GEr-3. Data taken from [26].



Fig. 5-48 Analyzed Li/Gd molar ratios in cathode Cd immediately after various electrorefining. Data taken from [26].

この電解精製槽での最大運転電流 35 A は、陰極電流密度 77 mA・cm⁻²にあたる。GEr-3 における陰極作動電位と陰極電流密度の関係を、Gd 析出に対する Cd 陰極の分極曲線とし て Fig. 5-49 に示したが、これより Li 析出を生じない陰極下限電位は-2.2 V と見積もられ る。U 析出、Pu 析出に対する Cd 陰極の分極曲線は不明のため、Gd 析出に対するものを平 衡電位差分だけ平行移動させたものと仮定して、それぞれ Fig. 5-49 に描き加えた(すでに Fig. 3-2 に示したように、Pu | Pu(III)、U | U(III)の平衡電位は Gd | Gd(III)のそれより、そ れぞれ 0.28、0.58 V 高い)。Cd 陰極電位-2.2 V において Fig. 5-49 から予測される Pu、U 単独の析出電流密度はそれぞれ 105、163 mA・cm⁻²となる。一方、U と Pu の同時析出に 関するラボスケール試験では、Cd 中に Li 析出を生じない陰極最高電流密度は、これらの 値の中間にあたる 156 mA・cm⁻²と報告されている[27]。多くの仮定にもとづくが、Li 析出 をともなわず Pu と U が Cd 中に共析する下限電位も、-2.2 V 付近であることが示唆され る。

なお、還元電流の一部を消費して Cd 中に生成した Li は、電解電流遮断後の陰極合金 | 浴塩界面において自発的な酸化還元反応

 3Li(0,Cd) + Gd(III,MS) = 3Li(I,MS) + Gd(0,Cd)
 (5-23)

 を起こした。GEr-2 および GEr-3 終了後に充分な時間をおいてから陰極合金を輸送したところ、いずれも Gd 濃度 1.2 wt%、Li 濃度 0.2 wt%の Cd 合金であることがわかった。



Fig. 5-49 Plots of Cd cathode potential at various electrorefining current for Gd and assumed (cathode potential, electrorefining current) relationships for Pu and U.

(2) 工学規模連続装置における陰極合金の蒸留精製器への移送

5-7-3の純 Cd 循環輸送実験と同様の方法(TR2~TR4)で、電解精製後の Cd-Gd 合金 を蒸留るつぼまで輸送した。GCon-1 と GCon-2 の陰極合金輸送では、陰極るつぼ底面から の吸引口高さを変えた。TR2 での搬出量、TR4 での搬入量、それらの流量および合金中の Gd 濃度を Table 5-17 にまとめた。なお、バッファタンク内レベル計の作動不良により、 TR3 では輸送量と流量を決定できなかった。

(i) 陰極から蒸留器への輸送量

陰極るつぼ底面からの吸引口高さを 42 mm に設定した GCon-1 では、陰極からの搬出量 が 1.6 L となった。またそれより上方の 52 mm に設定した GCon-2 では、1.1 L に搬出量 が減少した。5–6–2 における純 Cd の吸引輸送のデータから、上と同じ条件で純 Cd を吸引 した場合の輸送量はそれぞれ 1.5、1.1 L と見積もられ、Cd 合金の輸送量はこれにほぼ一致 する。したがって、Cd-Gd 合金に対しても純 Cd と同様に、吸引口高さを利用した TR2 吸引輸送量の制御が可能と期待できる。

TR2 完了時点で陰極るつぼに残留する Cd 量は、吸引口高さ 42、52 mm でそれぞれ 2.2、 2.9 L であった。吸引口は、吸い込み流路を確保する目的でなるべく底面から浮かし、また 液面低下時にも浴塩の吸引を回避する目的でなるべく底面に近づけているが、合金搬出量 に比べて陰極るつぼ内残留量が多い現状である。吸引口をるつぼ底面にさらに近づけるよ う改良し、陰極合金の搬出率を上げる必要がある。

蒸留装置の容量が小さいため、バッファタンクから蒸留るつぼへの輸送(TR4)はそれぞれ 4回に分けて行った。GCon-2における蒸留るつぼへの合計搬入量は1.1Lであり、陰極る つぼからの搬出量と等しかった。また GCon-1での合計搬入量は1.3Lで、陰極るつぼから の搬出量の81%となった。

TR2 (Vacuum suction)				TR4 (Centrifugal pump)								
Run Tot (L	Total	Transport-	Flow rate	Gd in alloy	Transpo	Transported (L)		Flow rate (L•min ⁻¹)			Gd in alloy (wt%)	
	(L)	ed (L)	(L•min ⁻)	(wt%)	Each	Total	V4 open. (turn)	Each	av.*	Each	av.	
					0.35		0.25	0.36		_		
			0.54		0.25	0.38 ³		0.45 ~	0.47			
GCon	3.8	1.6	0.9	12		13			-	0.46	+	
-1	5.0		0.5	1.2	0.24	-	0.25	0.03			. —	
					0.13		1.00		_	0.08 ~	0.41	
										0.88		
						0.39		0.25	0.32	0.3	0.66 ~	
										0.74	0.75	
						-	0.25 0.22		•	0.75	0.75	
GCon	4.0	1.1	1.4	1.2	0.26	1.1			\sim	+		
-2	4.0	.0 1.1	1.4	1.2		1.1			_	0.79	<u> </u>	
					0.32		0.50	0.16		0.78 ~	0.09	
										0.79	,	
					0.09		1.00	0.009		-		

Table 5-17 Transport of liquid Cd–Gd alloys from electrorefining cathode to distillation crucible; transported amount, flow rate, and Gd content. Data taken from [23].

*Average only for V4 opening 0.25 turns

GCon-1 電解終了直後の陰極中における Gd 濃度は 1.2 wt%であったが、蒸留るつぼまで 運ばれた合金中の Gd 濃度はこれよりも低かった。前もって行った純 Cd 輸送実験の終了後、 バッファタンク内の遠心ポンプ吸い込み口以下のレベルに約 1.4 L (実測不可能なため推定 値) 残留していた純 Cd により、Cd-Gd 合金が希釈されたことが、この原因である。GCon-1 で蒸留るつぼまで輸送された合金の分析結果は、Gd 濃度 0.08~0.88 wt%と大きくばらつ いたが、GCon-2の場合にはどのバッチの分析結果も Gd 濃度 0.75±0.09 wt%で再現性が高かった。そこで、GCon-1 終了後のバッファタンク内に Gd 濃度 0.47 wt%の合金 1.4 L が残留していると仮定したうえで、つぎの GCon-2 における陰極るつぼから蒸留るつぼまでの Gd のみの輸送率を概算したところ、96 %と高い値であった。

また、Fig. 5-50 に写真を示したが、蒸留るつぼに運ばれた合金には、浴塩の付着がいっ さい認められなかった。したがって本工学規模装置では、溶融塩を随伴することなく陰極 合金を輸送できることが確認され、黒鉛製蒸留るつぼの溶融塩による腐食損傷の防止に寄 与する。



Fig. 5-50 A photograph of Cd–Gd alloy (Gd 0.75 wt%) after removed from the distillation crucible.

(ii) 陰極から蒸留器への平均流量と輸送時間

陰極るつぼから吸引タンクへの平均流量は 1.2 L・min⁻¹で、吸引タンクまでの TR2 輸送の所要時間は 2 分以内であった。

吸引タンクからバッファタンクへの流量は実測できなかったが、純 Cd 輸送時と同流量 3.0 L·min⁻¹を仮定すると、バッファタンクまでの TR3 重力輸送の所要時間は1分以内と 期待された。

バッファタンクから蒸留るつぼへのポンプ輸送流量は 0.3 L・min⁻¹ で、蒸留るつぼまで の TR4 輸送の所要時間は 5 分以内と計算された。また、同一遠心ポンプによるバルブ V4 同一開度 0.25 回転で、純 Cd の流量 0.7 L・min⁻¹に対して Cd–Gd 合金(0.75 wt%)の流量は 約 50 %弱まで低下していた。この原因は、Gd 合金化による液体金属の粘度上昇と推定さ れるが、現在のところ Cd–Gd 二元合金液体の粘度データはない。

陰極るつぼから蒸留るつぼに至る合金輸送(TR2~TR4)の所要時間は、工学規模の本装置で合計8分以内と試算された。一方、実規模装置では約30Lの陰極合金輸送が想定されており、もしも上の流量をそのまま仮定すると、TR2で26分、TR3で10分、TR4で100分、合計136分と概算される。

TR4 では流路バルブ V4 を絞ったため、0.3 L・min⁻¹の少流量となったが、5–3 の純 Cd 輸送では 1.3 L・min⁻¹流量でも蒸留るつぼが破損しなかったので、バルブを開いてこの流量 まで上げれば、輸送時間を 23 分まで短縮できる可能性がある。したがって、実規模の電解 精製槽陰極から蒸留るつぼまでの 1 バッチ約 30 L の合金輸送は、合計 60 分程度で完了で きるものと予測される。

5-7-5 まとめ: 電解精製-陰極 Cd 合金蒸留精製の連続プロセス化

すでに 5-6 に示した液体 Cd の流動と輸送に関する知見をもとに、電解精製後の陰極 Cd 合金を蒸留装置まで液送する工学規模の連続装置を構築し、Gd を模擬アクチノイドとする 電解精製と陰極合金の蒸留器までの輸送を連続して行った。これらより、以下の結論を得 た。

- (1) 工学規模電解精製槽の陰極では、電流密度が 77 mA・cm⁻²を超え、作動電位が-2.2 V を 下回ると、浴塩中の Li+イオンの還元と Cd 内への収容が競争的に開始された。実際に U や Pu を電解精製した報告と比べると、これらが Li 収容と競争しないための陰極下限電 位も約-2.2 V と推測された。
- (2) 電流遮断後の陰極合金 | 浴塩界面での自発的酸化還元反応により、電解時に Cd 内へ収 容された Li が酸化溶出し、代わりに Gd が還元析出した。
- (3) 工学規模の装置内で損失なく液体金属を輸送できることを、純 Cd の 5 サイクル循環輸送で実証した。
- (4) 工学規模の装置内で約1.5Lの陰極合金を蒸留装置まで輸送するための所要時間は8分 程度であり、さらに短縮も可能と期待された。また、陰極から蒸留器までの合金輸送率 やGdのみの輸送率も高いレベルにあった。
- (5) 工学規模の連続装置によって、電解精製後の陰極 Cd 合金を高温液体金属のまま、しか も電解精製浴塩を随伴することなく、蒸留精製部まで輸送できた。

陰極るつぼをバッチごとに引き上げ、陰極合金を冷却・凝固させてから蒸留装置まで搬送する従来法に比べ、本研究で製作した工学規模の連続装置では、蒸留るつぼまでの輸送時間の短縮と電解精製浴塩の随伴防止を実現できた。Gdを模擬アクチノイドとしたこれらの実証実験の結果は、使用済金属核燃料の実規模での再処理プロセスを開発する上でも、高温液体金属のままでの輸送が装置工学的に有利であることを示している。

本章に関する原著論文

T. Hijikata and T. Koyama, "Development of high temperature molten salt transport technology for pyrometallurgical reprocessing", *J. Power Energy Syst.*, **3**, 170 (2009).

T. Hijikata and T. Koyama, "Development of high-temperature transport technologies of molten salt slurry in pyrometallurgical reprocessing", *J. Power Energy Syst.*, **4**, 202 (2010).

T. Hijikata and T. Koyama, "Development of high-temperature transport technologies for liquid cadmium in pyrometallurgical reprocessing", *J. Eng. Gas Turbines Power*, **141**, 042902 /1 (2009).

第5章の参考文献

- [1] 日本原子力研究開発機構 次世代原子力システム研究開発部門 FBR 燃料サイクルユニット FBR サイクル総括ユニット "高速増殖炉サイクルの実用化戦略研究 フェーズII技術検討書-(2)燃料サイクルシステム", JAEA-Research, 2006-043 (2006).
- [2] W. R. Huntley and M. D. Silverman, "System design description of forced-convection molten-salt corrosion loops MSR-FCL-3 and MSR-FCL-4", ONRL/TM-5540 (1976).
- [3] I. J. Karassik, W. C. Krutzsch, W. H. Fraser, and J. P. Messina, "Pump Handbook", MacGraw-Hill Inc., New York (1976).
- [4] T. Hijikata and T. Koyama, "Development of high temperature transport technologies for liquid cadmium in pyrometallurgical reprocessing", J. Eng. Gas Turbines Power, 141, 042902/1 (2009).
- [5] 渡辺英夫,橋本弘之,片桐一成,湯伯敏,"溶融塩用振動ポンプの高温性能向上",機械 学会論文集,63,117 (1996).
- [6] E. L. Carls, R. J. Blaskovitz, T. R. Johnson, and T. Ogata, "Tests of prototype salt stripper system for IFR fuel cycle", *Proc. GLOBAL93*, September 12-17, Seattle, USA, (1993).
- [7] T. Hijikata and T. Koyama, "Development of high temperature molten salt transport technology for pyrometallurgical reprocessing", J. Power Energy Syst., 3, 170 (2009).
- [8] T. Koyama, T. Hijikata, T. Yokoo, and T. Inoue, "Development of engineering technology basis for industrialization of pyrometallurgical reprocessing", *Proc. GLOBAL2007*, September 9-13, Boise, USA (2007).
- [9] 化学工学便覧 6版,2章,日本化学工学会,丸善(1999).
- [10] J. J. George, "Thermodynamic and transport properties for molten salts: correlation equation for critically evaluated density, surface tension, electrical conductance, and viscosity data", The American Chemical Society and the American Institute of Physics for the National Bureau of Standards (1988).
- [11] 化学便覧-基礎編,3版,日本化学会,丸善(1984).
- [12] 機械工学便覧 5 版, 日本機械学会, 丸善 (1990).
- [13] Swagelok Company Catalog, Bellows sealed valve U-series (2003).
- [14] 塚田毅志, "金属燃料の乾式再処理プロセスの合理化に関する技術開発-(18)電解精製 槽からのアクチニドおよび核分裂生成物の移行評価-" O19, 日本原子力学会 2007 秋の大会 (2007).
- [15] T. Hijikata and T. Koyama, "Development of high-temperature transport technologies of molten salt slurry in pyrometallurgical reprocessing", J. Power Energy Syst., 4, 202 (2010).
- [16] 野田佳六, "沈降性粒子の管内流動について", 浮選, 26, 4, 25-33 (1979).
- [17] M. Bohnet and G. Niesmak, "Distribution of solid in stirred suspensions" Ger. Chem. Eng., 3, 57 (1980).

- [18] 都田昌之,米原潤,木村恒夫,前田四郎,"水平固液混相流の遷移流速について",化学 工学論文集,3,497 (1977).
- [19] I. Zandai, M. Scec, and G. Govatos, "Heterogeneous flow of solids in pipelines", *Proc. Amer. Soc. Civ. Engr. Hy.*, 93, 145 (1967).
- [20] E. A. Brandes and G. B. Brook Smithhells, "Metals Reference Book", Seventh Ed., Butterworth Heinemann Ltd, Oxford (1992).
- [21] O. K. Kubachewski and C. B. Alock, "Metallurgical Thermochemistry, Fifth Ed.," Pergamon Press (1979).
- [22] T. Koyama, T. Ogata, Y. Sakamura, and H. Kobayashi, "Pyroprocess and metal fuel development for closing cycle with reduced waste burden", *Proc. Global 2009*, September 6-11, Paris, France, 1261 (2009).
- [23] T. Hijikata, T. Murakami, and T. Koyama, "Development of high-temperature transport technologies for liquid Cd cathode of pyro-reprocessing", *Proc. FR 09*, December 7-11, Kyoto, Japan, (2009).
- [24] I. Johson, "Solubilities in liquid metals", Report No. ANL-HMF-SL-1747 (1960).
- [25] A. Shunk, "Constitution of binary alloys", Second Supplement, McGraw-Hill, New York (1969).
- [26] T. Murakami, T. Hijikata, and T. Koyama, "Engineering-scale demonstration of electrorefining process", Proc. MS-8, October 19-23, Kobe, Japan (2008).
- [27] T. Kato, K. Uozumi, T. Inoue, O. Shirai, T. Iwai, and Y. Arai, "Recovery of plutonium and uranium into liquid cadmium cathodes at high current densities", *Proc. Global 2003*, November 16-20, New Orleans, USA, 1591 (2003).

第6章 本研究の総括と今後の課題

6-1 アクチノイド酸化物から塩化物への低温変換

現行の湿式再処理法で使用済酸化物核燃料から U と Pu を回収すると、分離しきれなかった U (および少量の Pu) とマイナーアクチノイド (MA: Np、Am、Cm) などが残る。 長半減期をもつ MA は、直接廃棄することなく核種変更することが望ましく、金属核燃料 と混合して原子炉中で核分裂させる構想がある。

このためには、MA 酸化物をまず塩化物に変える必要があるが、実際には MA よりも多量の U が混在するため、これはアクチノイド(AN: U、Np、Pu、Am、Cm)塩化物への転換反応である。従来は、炭素と塩素ガスを用いる 59LiCl-41KCl 溶融塩中での反応で AN 塩化物に転換しているが、高温(973 K)の Cl₂雰囲気中での材料腐食が課題であった。ここでは、脱酸素と塩素付加の二重機能が期待できる五塩化モリブデン(MoCl₅)に注目し、より低温度で進行可能な新しい塩化物転換法として提案した。

そこで、AN酸化物よりも塩化物変換が困難と推定されるジルコニウム酸化物(ZrO₂)を模擬物質とし、高温反応過程を調べた。MoCl₅によるZrO₂からZrCl₄への反応は約500Kで始まり、668Kでは約30分間で全面転換できた。気体または液体のMoCl₅がZrO₂[s]に作用する反応は、固体反応物間の接触が不要なため、炭素とCl₂を利用する従来法より低い反応温度でも、実用的な反応速度が期待できた。

また生成塩化物の単離にも注目し、模擬生成物の塩化ネオジム(NdCl₃)に混入した Mo 副 生物の揮発除去も検討した。Nd₂O₃ と MoCl₅ との反応で副生するモリブデンオキシクロラ イド(MoO₂Cl₂)と四塩化モリブデン(MoCl₄)を蒸留法で分離し、純度 99 %以上の NdCl₃ を得 た。NdCl₃ と同程度の蒸気圧をもつ一連の AN 塩化物も、同様に蒸留精製が可能と見込め る。

ここで提案した MoCl₅を用いる酸化物から塩化物への転換反応は、700 K 以下でも充分 な速度で進行する要件を満足し、さらに主生成物に混入するモリブデン副生物の大部分を 揮発分離できたことから、従来法よりすぐれた AN 塩化物への転換法として期待できる。

さらに、この低温塩化物転換の今後の応用としては、Zr(軽水炉用燃料棒の被覆管材料) や希土類金属などの精錬分野が考えられる。また、福島第一原子力発電所の原子炉事故に よる核燃料溶融物(デプリと呼ばれる)は、Zr、U、Puの金属とそれら酸化物の混合物と 予測され、硝酸などには不溶とされているが、MoCl₅を用いて塩化物転換できれば、その 後の処理が可能となると期待されている。

6-2 アクチノイドと希土類金属(燃料毒)の分離

現行の湿式再処理で発生する高放射能レベル廃液中は、MA 総計の 10 倍にものぼる 23 wt%の希土類(RE: Y、La、Ce など)を含む。MA を金属核燃料に加える場合には、中性 子を吸収する燃料毒の RE を分離除去し、燃料性能の低下を防ぐことが必要である。 これらの酸化還元電位の差を利用して、LiCl-KCl 溶融塩中に導入した AN、RE 種のう ち、より貴な AN を選択的に還元・回収し、RE は溶融塩中に残す。このような選択的還元 を電解法ではなく、溶融塩 | Li (Cd-Li 液体合金)の二液相界面で行い、AN 金属を選択的 に Li 還元して Cd 相内へ回収するステップを検討した。

この場合、実際の分離対象である AN と RE の塩化物には、上流の洗浄工程などで NaCl が約 20 wt%も混入する。このため、LiCl-NaCl | Cd-Li 系での実験もあわせて行い、Cd 相への AN の選択的回収に NaCl 混入はほとんど影響しないことを明らかにした。また、この界面反応の温度で AN と RE の二相分配比はほとんど変化しないことなどを示した。

溶融塩中への NaCl 混入の影響を検討すべき事例としては、使用済金属燃料の電解精製も ある。もともと金属 Na とともに被覆管内に封入された金属核燃料を、使用後に電解精製陽 極とすれば、浴塩中の NaCl 濃度が上昇する。上述の二相界面での実験結果は、使用済金属 燃料の電解精製で浴塩中の NaCl 濃度が上昇した場合も、AN と RE との分離性能が低下し ないことを示唆した。

6-3 使用済金属核燃料の電解精製と蒸留精製

酸化物核燃料を対象とする湿式再処理に対して、金属核燃料の再処理も将来的に期待されている。ここでは使用済金属燃料を陽極とし、陰極に U や Pu を回収するが、電解精製 やその後の U、Pu 精製など、個々のステップごとに研究が展開されてきた。ここでは、固体 Fe 陰極上への U 回収と液体 Cd 陰極内への U+Pu 回収を前提として、電解精製→Fe 陰極上析出物の蒸留精製、および電解精製→陰極 Cd 合金の蒸留精製を連続プロセスとして検証した。実験は AN 金属の調製から開始したので、AN 酸化物のリチウム還元→電解精製→付着浴塩と Cd の揮発除去、の三連続プロセスであった。したがって、ここでの知見は酸化物核燃料の再処理にも適用できるが、上述の連続プロセスで UO2や PuO2 から金属 U や Pu を回収できることを実証した。

6-4 高温融体の輸送を前提とする電解精製・蒸留精製の連続プロセス

核燃料の化学的処理プロセスを実用化するためには、装置工学的技術も重要である。と くに高温の溶融塩や溶融金属も関わる物質変換・物質分離過程では、これら融体を凝固さ せずに液体のまま移送することは、プロセス構成上で大きなメリットを生む。

しかし、これら高温融体の少量輸送法はほとんど未確立のため、ここでは三種類の融体 (LiCl-KCl 溶融塩、この溶融塩に金属粉末が混在するスラリー、溶融 Cd)の流動特性を まず把握した。また、液送の駆動力として重力流下、減圧吸引、電動ポンプ排出の三つを 利用し、工学的規模のプラント内で想定される各融体の流路区間を目標に、輸送量、流量 などの制御性も検討した。これらから得た知見は以下のとおりである。

(1) 59LiCl-41KCl 溶融塩の流動特性と輸送

59LiCl-41KCl 溶融塩(758 K)は水(288 K)とほぼ同等の動粘度で、きわめて近い流動特性 を示すので、流路区間での圧力損失も水の測定結果で代用できた。圧力損失係数の小さい 自作オリフィスバルブの調節で、重力下降流量を広範囲に制御できた。これは、とくに少流量域での制御が要求される溶融塩の補機レス輸送に応用できる。一方、小型遠心ポンプ 輸送は比較的多流量での電解精製浴塩の揚液などに適する。温度低下ととも動粘度が上昇 するが、プロセス想定温度 773 Kから±40 K程度の温度ぶれは、液送に大きな影響を与え ない。

(2) 金属微粉体が混入した 59LiCl-41KCl 溶融塩スラリーの強制分散と輸送

使用済金属燃料を電解精製の陽極とした場合、核分裂生成物のうちアクチノイドより酸 化還元電位の高い Pd、Zr などは、酸化溶解されずに粒子として脱落する。その一部はバス ケットで回収できず、浴塩中にしだいに蓄積される。浴塩の更新にあたっては、これら金 属微粒子ごとスラリーとして搬出することが望ましい。

そこで、分級したステンレス粒子の溶融塩スラリーについて、スラリーだめ内の撹拌に よる強制粒子分散を調べ、均一分散に要求される攪拌条件を究明した。また、スラリー輸 送時の流路内粒子沈降も検討し、流路底に粒子移動床や固定床を形成させることなく、不 均一浮遊流を保つための条件も明らかにした。

(3) 液体 Cd の流動特性と輸送

グローブ弁での圧力損失を支配的にすれば、重力下降流量は弁の流量係数で決まり、弁 開度で容易に調節できた。また、減圧タンクへの吸引輸送を揚程 930 mm まで実証でき、 容器底面から吸液口までの高さで輸送量を制限できた。さらに、遠心ポンプを利用して揚 程 1.63 m まで送液でき、ポンプ回転速度とグローブ弁開度の調節を併用して、比較的少流 量まで制御できた。液体 Cd の場合も、プロセス想定温度 773 K から数十 K 程度の温度ぶ れは、液送に大きな影響を与えなかった。

さらに、高温融体の輸送を前提とした乾式再処理の連続化プロセスの一つとして、使用 済金属燃料の電解精製と陰極 Cd 合金の蒸留器までの輸送を連続で行うプラントを設計・製 作した。これは現在想定されている実機の約 1/13 スケールをもつ工学規模で、Cd 合金輸送 には重力降下流、減圧吸引流、ポンプ押し出し流を併用し、巨大なアルゴングローブボッ クス内に組み立てた。

この工学規模装置内において、アクチノイドに代わる模擬使用済燃料として、金属 Gd を陽極から溶出させ、陰極で生成した Cd-Gd 合金を蒸留器まで輸送した。蒸留操作そのものは省いたが、凝縮器から陰極るつぼへの純 Cd 輸送は行った。試験運転では、Gd が陽極から陰極を経由して蒸留るつぼまで移動し、陰極るつぼから蒸留るつぼへの Cd-Gd 合金液送ロスもなかった。

陰極合金を凝固させてから搬出する従来法では、アルミナ製陰極るつぼへの熱的衝撃を 緩和するため、冷却凝固だけでも数時間を要したが、ここでは高温液体金属のまま蒸留器 まで移送でき、時間の大幅短縮を可能とする装置工学上の有利性を示すことができた。

さらに、LiCl-KCl 溶融塩や溶融塩スラリーの液送をとり入れた乾式再処理の連続プロセス化については、これらの流動特性の解明にあたった本著者も加わって、別プロジェクト

での検討が進んでいるが、公開許諾を得がたい未発表データも一部含まれるため、本論文 中には記述しない。

6-5 本研究の工学的意義

現状の原子力発電では、全Uの約2%にすぎない²³⁵Uだけを利用している。期待されて いる金属核燃料サイクルがもし実現されれば、²³⁸Uからも新たな核燃料²³⁹Puが生まれる ため、Uの利用率を90%超まで高められる。また、これまで廃棄処分されてきたMAを、 この燃料サイクル内で短半減期核種に変換すれば、廃棄物の放射能毒を大幅に短期化でき る。本技術は高速増殖炉だけでなく、MAの変換に用いる加速器のターゲット製造にも応用 ができる。さらに、金属核燃料再処理は小規模なバッチ法も可能で、高速増殖炉などの需 要に応じて施設を比較的容易に準備できる。一方、金属核燃料サイクルではPu単離が容易 でないため、核兵器拡散の抑制につながる。また、福島第一原子力発電所の事故で発生し た溶融燃料(デプリ)から、本技術を適用してアクチノイドを回収できると期待されている。

本研究で得られた成果は、このように多くの利点をもつ金属燃料サイクルの実現にむけ て、とくに核燃料再処理に関わる物質化学形態の変換法、物質分離法、およびそれらの連 続プロセス化のための高温融体輸送法を確立に貢献した。さらに一部の連続プロセスで、 工学規模プラントの稼働を実証できたことは、工学的に寄与するところが大きい。

6-6 今後の課題

本研究でとりあげた課題については、それぞれ以下の検討を今後進めることが望まれる。 (1) アクチノイド酸化物から塩化物への低温変換

アクチノイド酸化物から塩化物への転換反応が、MoCl₅存在下で実際に進行することを まず確認する必要がある。また、副生成物の MoCl₄や MoO₂Cl₂を MoCl₅に再生するための 化学反応についても、検討が必要である。さらに、アクチノイド酸化物には種々の不純物 が混入する可能性があり、それらが塩化物転換反応に悪影響を及ぼさないか調べる必要が ある。

(2) アクチノイドと希土類金属(燃料毒)の分離

バッチ法によって決定された AN と RE の分離係数は、他の報告例も含めてあまり大き くないので、AN と RE の分離能を向上させるには、LiCl-KCl 溶融塩と Cd-Li 合金を向流 のフロー系で接触させることが望ましい。それには、これら単独の管内流動ではなく、高 温融体どうしの二相界面で互いを逆流させることが求められ、このような液送法の確立か ら始める必要がある。

(3) 使用済金属核燃料の電解精製と蒸留精製

電解精製ステップでは、電解条件をさらに最適化し、固体 Fe 陰極上あるいは液体 Cd 陰極内へのアクチノイド回収率をさらに向上させる必要がある。また、Fe 陰極上の電着物を蒸留精製するステップでは、付着塩の揮発除去完了後、U 金属を溶融できないケースがあった。この原因としては、UO2を LiCl 中の Li で還元した生成物を、そのまま電解精製陽

極としたので、浴塩中に O が侵入して U 種と結合し、Fe 陰極上の電着物に U 酸化物が混 入したことが推定される。今後、これを実験で確認するとともに、O 源となる酸化物やオ キシクロライド等を浴塩から除去する必要があり、MoCl₅ による塩化物転換法がこれに応 用できる可能性もある。

(4) 高温融体の輸送を前提とする電解精製・蒸留精製の連続プロセス

溶融塩、溶融塩スラリー、および液体 Cd の輸送方法を把握したことで、これら高温融体 の液送を前提とする乾式再処理連続プロセスの実現にある程度寄与できた。しかし現実系 では、溶融塩や Cd 合金の組成が(したがって、液物性も)液送途中で変化する流路区間も 含まれるため、その影響を検討しておく必要もある。今回とりあげた電解精製と蒸留精製 の工学規模連続プラントは、陰極るつぼから蒸留るつぼまでの Cd 合金輸送に3ステップを 要し、その一部は途中のタンク内に残留した。陰極るつぼから蒸留るつぼへ直接移送する 方式に改良することが望まれる。

また、高放射線環境下におかれる実プロセスでは、流路全体の耐久性やメンテナンス性 への配慮も重要である。一方、狭い密閉空間内で運転するため、ポンプなどの装置もコン パクト化が求められる。 著者の発表業績

I. 主論文に関連した発表

定期刊行誌掲載論文(主論文に関連する原著論文)

- 1. <u>T. Hijikata</u>, M. Sakata, H. Miyashiro, K. Kinoshita, T. Higashi, and T. Tamai, "Development of pyrometallurgical partitioning of actinides from high level radioactive waste using a reductive extraction step", *Nucl. Technol.*, **115**, 114 (1996).
- 2. <u>T. Hijikata</u> and T. Koyama, "Development of high temperature molten salt transport technology for pyrometallurgical reprocessing", *J. Power Energy Syst.*, **3**, 170 (2009).
- 3. <u>T. Hijikata</u> and T. Koyama, "Development of high temperature transport technologies for liquid cadmium in pyrometallurgical reprocessing", *J. Eng. Gas Turbines Power*, **141**, 042902/1 (2009).
- 4. <u>T. Hijikata</u> and M. Kurata, "Novel chlorination of zirconium dioxide at low temperature", *Electrochemistry*, **77**, 702 (2009).
- 5. <u>T. Hijikata</u> and T. Koyama, "Development of high-temperature transport technologies of molten salt slurry in pyrometallurgical reprocessing", *J. Power Energy Syst.*, **4**, 202 (2010).

定期刊行誌掲載論文(その他の論文)

1. T. Koyama, <u>T. Hijikata</u>, T. Usami, T. Inoue, S. Kitawaki, T. Shinozaki, M. Fukushima, and M. Myochin, "Integrated experiments of electrometallurgical pyroprocessing using plutonium oxide", *J. Nucl. Sci. Technol.*, **44**, 382 (2007).

国際会議論文(査読付きの full-length papers)

1. <u>T. Hijikata*</u>, T. Koyama, T. Usami, S. Kitawaki, T. Shinozaki, and M. Fukushima, "Recovery of uranium and plutonium metals through cathode processing of electrodeposits from reduced oxide fuel anodes", The Royal Society of Chemistry 'Recent Advances in Actinide Science', 650 (2006).

その他の国際会議発表

- 1. <u>T. Hijikata*</u>, T. Koyama, T. Usami, S. Kitawaki, T. Shinozaki, and T. Kobayashi, "Integrated experiments to demonstrate electrometallurgical pyroprocess of metal and oxide fuel", *Proc. Global 2003*, November 16-20, New Orleans, LA, USA, 763 (2003).
- 2. <u>T. Hijikata*</u>, T. Murakami, and T. Koyama, "Development of high-temperature transport technologies for liquid Cd cathode of pyro-reprocessing", *Proc. FR 09*, December 7-11, Kyoto, Japan (2009).

国内会議発表

- 1. <u>土方孝敏*</u>,坂田昌弘,井上 正,玉井忠治,"長半減期核種の乾式分離技術の開発 溶 融塩-液体 Cd 系におけるアクチノイドおよびランタニド元素の分配挙動",第4回素材 開発研究交流会,東北大学 (1991).
- 土方孝敏*,坂田昌弘,松本俊一,玉井忠治,"長半減期核種の乾式分離技術の開発 溶 融塩-液体 Cd 系における U の活量係数の測定",日本原子力学会 1991 年秋の大会,九 州大学 (1991).

- 3. <u>土方孝敏*</u>, 坂田昌弘, 木下賢介, 玉井忠治, "長半減期核種の乾式分離技術の開発 溶 融塩-液体 Cd 系における U, Np, La, Ce の分配係数の測定", 日本原子力学会 1992 年春 の大会, 東海大学 (1992).
- 4. <u>土方孝敏*</u>, 坂村義治, 井上 正, T.S.Storvick, L.F.Grantham, "TRU の乾式分離技術 の開発: 溶融塩電解法による TRU と希土類元素の分離", 日本原子力学会 1996 年春の 大会, 大阪大学 (1996).
- 5. <u>土方孝敏*</u>, 中村協正, 倉田正輝, 小長谷秀明, "TRU 乾式分離技術の開発 LiCl-KCl 共 晶塩中から Mo の塩化物の揮発速度の測定", 日本原子力学会 1998 年春の大会, 近畿大 学 (1998).
- 6. <u>土方孝敏*</u>, 倉田正輝, "MoCl₅ を用いた酸化物の塩素化技術の開発(I) La₂O₃ の LaCl₃ への転換試験", 日本原子力学会 1999 年春の大会, 広島大学 (1999).
- 7. <u>土方孝敏*</u>, 倉田正輝, "酸化物の塩素化技術の開発 MoCl₅による ZrO₂の塩化物転換反 応", 電気化学会第 31 回溶融塩化学討論会, 東北大学 (1999).
- 8. <u>土方孝敏*</u>,小山正史,宇佐見剛,北脇慎一,篠崎忠宏,明珍宗孝,"CPF における金属 電解法乾式再処理プロセス試験(3) 陰極処理装置の開発と蒸留試験",日本原子力学会 2003 年春の大会,アルカス佐世保 (2003).
- <u>土方孝敏*</u>,小山正史,宇佐見剛,北脇慎一,篠崎忠宏,明珍宗孝,"CPF における金属 電解法乾式再処理プロセス試験(5)希土類元素を用いた陰極析出物の蒸留試験",日本 原子力学会 2003 年秋の大会,静岡大学 (2003).
- 10. <u>土方孝敏*</u>,小山正史,宇佐見剛,北脇慎一,篠崎忠宏,明珍宗孝,"CPF における金属電 解法乾式再処理プロセス試験(8) 電解析出ウラン陰極処理試験",日本原子力学会 2004 年秋の大会,京都大学 (2004).
- 11. <u>土方孝敏*</u>,小山正史,"金属電解法乾式再処理プロセス機器の実用化要素技術の開発(4) 溶融 LiCl-KCl 共晶塩の輸送試験",日本原子力学会 2006 年秋の大会,北海道大学 (2006).
- 12. <u>土方孝敏*</u>, 小山正史, "溶融 LiCl-KCl 共晶塩の輸送における圧力損失に関する基礎的 検討", 電気化学会 2006 秋の大会, 同志社大学 (2006).
- 13. <u>土方孝敏*</u>,小山正史,"金属電解法乾式再処理プロセス機器の実用化要素技術の開発(5) 不溶解性残渣模擬粉末が共存する LiCl-KCl 共晶塩輸送試験",日本原子力学会 2007 年 秋の大会,北九州国際会議場 (2007).
- 14. <u>土方孝敏*</u>,小山正史,"金属電解法乾式再処理プロセス機器の実用化要素技術の開発(7) 不溶解性残渣模擬粉末が共存する LiCl-KCl 溶融塩の輸送挙動",日本原子力学会 2008 年秋の大会,高知工科大学 (2008).
- 15. <u>土方孝敏*</u>, 木下賢介, 小山正史, "実用化に向けた金属燃料サイクルの工学技術実証に 関する研究開発(8) 工学的規模 Cd 陰極処理装置の開発", 日本原子力学会 2011 年秋の大 会, 北九州国際会議場 (2011).

II. 主論文と関係しない発表

定期刊行誌掲載論文

- T. Miura, <u>T. Hijikata</u>, Y. Muranushi, and T. Kishi, "The instability of WO₃·H₂O and WO₃·2H₂O xerogels in a propylene carbonate solution", *Denki Kagaku*, **57**, 7, 740 (1989).
- M. Sakata, M. Kurata, <u>T. Hijikata</u>, and T. Inoue, "Equilibrium distribution of rare earth elements between molten KCl–LiCl eutectic salt and liquid cadmium", *J. Nucl. Mater.*, 185, 56 (1991).
- 3. K. Kurata, Y. Sakamura, <u>T. Hijikata</u>, and K. Kinoshita, "Distribution behavior of uranium, neptunium, rare-earth elements (Y, La, Ce, Nd, Sm, Eu, Gd) and alkaline-earth metals (Sr, Ba) between LiCl–KCl eutectic salt and liquid cadmium or bismuth", *J. Nucl. Mater.*, **227**, 110 (1995).
- Y. Sakamura, <u>T. Hijikata</u>, K. Kinoshita, T. Inoue, T. S. Storvick, C. L. Krueger, L. F. Grantham, S. P. Fusselman, D. L. Grimmett, and J. J. Roy, "Separation of actinides from rare earth elements by electrorefining in LiCl-KCl eutectic salt", *J. Nucl. Sci. Technol.*, **35**, 1, 49 (1998).
- Y. Sakamura, <u>T. Hijikata</u>, K. Kinoshita, T. Inoue, T. S. Storvick, C. L. Krueger, J. J. Roy, D. L. Grimmett, S. P. Fusselman, and R. L. Gay, "Measurement of standard potentials of actinides (U, Np, Pu, Am) in LiCl-KCl eutectic salt and separation of actinides from rare earths by electrorefining", *J. Alloys. Compd.*, **271-273**, 592 (1998).
- S. P. Fusselman, J. J. Roy, D. L. Grimmett, L. F. Grantham, C. L. Krueger, C. R. Nabelek, T. S. Storvick, T. Inoue, <u>T. Hijikata</u>, K. Kinoshita, Y. Sakamura, K. Uozumi, T. Kawai, and N. Takahashi, "Thermodynamic properties for rare earths and americium in pyropartitioning process solvents", *J. Electrochem. Soc.*, **146**, 7, 2573 (1999).
- 7. M. Kurata, K. Kinoshita, <u>T. Hijikata</u>, and T. Inoue, "Conversion of simulated high-level liquid waste to chloride for the pretreatment of pyrometallurgical partitioning process", *J. Nucl. Sci. Technol.*, **37**, 682 (2000).

その他の国際会議発表

- <u>T. Hijikata*</u>, T Higashi, and H.Miyashiro, "An evaluation and preparation of lithium-Antimony reference electrode in molten LiCl-KCl eutectic salt", *Proc. The Fourth Japan-China Conference on Molten Salt Chemistry and Technology*, Kyoto, Japan (1992).
- 2. <u>T. Hijikata*</u>, M. Kurata, and T. Inoue, "Low temperature chlorination of lanthanide oxide by using molybdenum chloride", *Proc. CIMTEC 2000, Mass and Charge Transport in Inorganic Materials*, Lido di Jesolo, Venice, Italy 1395 (2000).
- 3. <u>T. Hijikata*</u>, and T. Koyama, "Development of high temperature transport technologies for molten salt and liquid cadmium in pyrometallurgical reprocessing", *Proc. ICONE-16*, Orlando, USA (2008).
- 4. <u>T. Hijikata*</u>, K. Kinoshita, K. Uozumi, and T. Koyama, "Development of transport technologies for high-temperature fluids of pyroreprocessing", *Proc. The 3rd International Pyroprocessing Research Conference*, Dimitrovgrad, Russia (2010).
- <u>T. Hijikata*</u>, K. Uozumi, T. Tsukada, T. Koyama, K. Ishikawa, S. Ono, S. Suzuki, M Denton, and J. Raymont, "Small zeolite column tests for removal of cesium from high radioactive contaminated water in Fukushima Daiichi nuclear power station", *Proc. Global 2011*, Makuhari, Japan, 519943 (2011).

6. <u>T. Hijikata*</u>, K. Kinoshita, K. Uozumi, and T. Koyama, "Development of transport technologies for hightemperature fluid in pyrometallurgical reprocess", *Proc. Asian Nuclear Prospects 2012*, Bejing, China (2012).

国内会議発表

- 世界孝二,<u>土方孝敏*</u>,村主欣久,美浦 隆,岸 富也, "スピネル型 ZnNi_xCo_{1-x}Mn_{2-x}O₄ (0≤x≤1.0)上での酸素発生",電気化学会 55 回大会,東京工業大学 (1988).
- 2. <u>土方孝敏*</u>,村主欣久,美浦 隆,岸 富也, "炭酸プロピレン溶液中における三酸化タ ングステンキセロゲル薄膜正極挙動",電気化学会 56 回大会,横浜国立大学 (1989).
- 3. <u>土方孝敏*</u>,村主欣久,美浦 隆,岸 富也,"非水溶液中における三酸化タングステン 水和物の電気化学的性質",電気化学会第 30 回電池討論会,名古屋 (1989).
- 4. <u>土方孝敏*</u>, 倉田正輝, 中村協正, "LiCl-KCl 溶融塩中での揮発塩化物 (UCl4, FeCl3, ZrCl4, MoCl5) の挙動", 第 46 回 質量分析総合討論会, 高崎市民文化会館 (1998).
- 5. <u>土方孝敏*</u>, 飯塚政利, 塚田毅志, 高橋恵樹, "金属燃料の溶融塩電解精製における陰極/ 陽極の処理に関する研究開発(3) 陽極残留物を対象とした金属廃棄物の溶融固化試 験", 日本原子力学会 2009 秋の大会, 東北大学(2009).
- <u>土方孝敏*</u>,飯塚政利,塚田毅志,高橋恵樹,"金属燃料の溶融塩電解精製における陰極/ 陽極の処理に関する研究開発(6)金属廃棄物溶融固化条件の検討と浸出挙動評価", 日本原子力学会 2010 秋の大会,北海道大学(2010).
- 土方孝敏*, 魚住浩一, 塚田毅志, 小山正史, 石川敬司, 小野昇一, 鈴木俊一, Mark Denton, John Raymont, "福島第一原子力発電所放射性滞留水処理システムに関する 研究開発 (2) 小型ゼオライトカラム吸着特性試験", 日本原子力学会 2012 春の年会, 福井大学 (2012).
- 8. <u>土方孝敏</u>*, 魚住浩一, 塚田毅志, 小山正史, 石川敬司, 小野昇一, 鈴木俊一, Mark Denton, Rich Keean, Gaëtan Bonhomme, "福島第一原子力発電所放射性滞留水処理 システムに関する研究開発 (5) ゼオライトタイプ吸着剤の Cs 吸着影響因子の評価", 日本原子力学会 2012 秋の年会, 広島大学 (2012).
- <u>土方孝敏*</u>,魚住浩一,稲垣健太,塚田毅志,小山正史,石崎英司,松倉 実,"福島第一 原子力発電所放射性滞留水処理システムに関する研究開発(7)チャバサイトとケイチ タン酸塩吸着剤の Cs 吸着性能評価",日本原子力学会 2013 春の年会,近畿大学 (2013).
- 10. <u>土方孝敏*</u>, 稲垣健太, 塚田毅志, 小山正史, 石崎英司, 松倉 実, "福島第一原子力発 電所放射性滞留水処理システムに関する研究開発(9) ゼオライトタイプ吸着剤の Sr 吸着速度定数の評価", 日本原子力学会 2013 秋の年会, 八戸工業大学(2013).
- III. 受賞
- 1. 2008 年 第 40 回日本原子力学会論文賞. 小山正史、<u>土方孝敏</u>、北脇 慎一. 対象論文タ イトル"Integrated experiments of electrometallurgical pyroprocessing using plutonium oxide".

謝辞

本論文は、1990年から 2011年までの研究成果をまとめたもので、その間、私の研究を 支えて下さった多くの方に感謝の意を表したいと思います。

本論文の審査および完成において、主査をお引き受けくださり、貴重なご助言とご鞭撻 を賜った慶應義塾大学理工学部美浦 隆教授に心から御礼申し上げます。美浦教授のご助言 がなければ、本論文の多岐にわたる分野の研究をまとめることはできなかったと思います。

また、本論文の審査を通じて御指導、御示唆を賜りました慶應義塾大学理工学部磯部徹 彦教授、畑山明聖教授、並びに片山 靖准教授に心より感謝いたします。慶應義塾大学理工 学部栄長泰明教授には貴重なご助言を頂きました。慶応義塾大学在籍中から研究を温かく 見守りご指導頂きました慶應理義塾大学理工学部岸 富也名誉教授に深く感謝いたします。

本研究の遂行に当たり、(一財)電力中央研究所小山正史副研究参事には、研究の計画・実施・成果の発表に際して懇切なるご指導、ご鞭撻を賜りまして心より感謝いたします。

本研究では、(一財)電力中央研究所をはじめ、京都大学原子炉実験所、日本原子力研究開 発機構の CPF 施設等で行われたものであり、その間に多くの方に研究を支えて頂きました。 本研究の一部には、文部科学省からの受託事業として、(一財)電力中央研究所が実施した平 成16年度から平成19年度「金属電解法乾式再処理プロセス機器の実用化要素技術の開発」 の成果を含みます。

静岡県立大学の坂田昌弘教授、日本原子力研究開発機構の倉田正輝博士、川崎重工株式 会社東 達弘氏、松本俊一氏には(一財)電力中央研究所在籍中にご協力を頂きまして感謝い たします。京都大学原子炉実験所の故玉井忠治教授にはアクチノイドの分配実験に多大な ご協力を頂きました。日本原子力研究開発機構の CPF 施設では、明珍宗孝氏、北脇慎一博 士、篠崎忠宏氏、福島峰夫氏のご協力を得て、アクチノイドを用いた貴重な研究を遂行す ることができました。(一財)電力中央研究所の井上 正研究アドバイザーには、米国ミズー リ大学派遣などの際に有益な意見を頂きました。(一財)電力中央研究所の宮代 一上席研究 員、原子力技術研究所塚田毅志領域リーダ、木下賢介主任研究員、宇佐見剛上席研究員、 坂村義治上席研究員、飯塚政利上席研究員、魚住浩一主任研究員、加藤徹也主任研究員、 村上 毅主任研究員には、ご協力を頂き心より感謝します。

また、実験の分析に当たり、(株)電力テクノシステムズ矢作 昇氏、大畑 薫氏、釘宮和夫 氏、佐川 亮氏にはご協力頂きました。心より謝意を表します。

最後に私事になりますが、妻理香子をはじめ家族により、精神的な協力を得ることがで きました。

以上の方々には深く感謝いたします。

2014年1月 土方孝敏